

京都府遺跡調査概報

第 44 冊

1. 丹後国宮農地開発事業（丹後東部・西部地区）関係遺跡
 - (1) 阿婆田窯跡群
 - (2) 大田南・下後古墳群
 - (3) 横浦古墓
 - (4) 山形古墓群
2. 千代川遺跡第16次
3. 伏見城跡

1991

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、本年3月末で満10年を迎え、特別展覧会・特別講演会の開催、論文集の刊行などの事業を実施してきたところであります。これらの諸事業の遂行にあたりましては、皆様方の御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。ふりかえってみますと、この10年間に、公共事業は年々増大し、それに伴い、発掘調査は、単に件数の増加だけでなく、近年とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』を始め、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行して公表してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成元・2年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局・京都府土木建築部・京都府教育委員会の依頼を受けて行った丹後国営農地開発事業関係遺跡・千代川遺跡第16次・伏見城跡の各発掘調査概要を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしかの役に立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局・京都府土木建築部・京都府教育委員会をはじめ、大宮町教育委員会・弥栄町教育委員会・久美浜町教育委員会・亀岡市教育委員会・京都市文化観光局などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡 2. 千代川遺跡第16次 3. 伏見城跡
2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡				
(1) 阿婆田窯跡群	中郡大宮町大野小字阿婆田	平元 8. 7 ～ 平 2. 1. 24 平 2. 4. 19	農林水産省近畿農政局	森 正
(2) 大田南古墳群 下後古墳群	竹野郡弥栄町和田野小字下後他	平 2. 4. 18 ～ 8. 4		石崎 善久
(3) 横 浦 古 墓	熊野郡久美浜町字栃谷小字横浦他	平元 4. 12 ～ 平 2. 7. 20		森島 康雄
(4) 山形古墓群	熊野郡久美浜町大井小字山形	平元 7. 17 ～ 8. 18 平 2. 4. 12 ～ 6. 14		岩松 保正 森島 康雄
2. 千代川遺跡第16次	亀岡市千代川町	平元 7. 21 ～ 平 2. 2. 28	京都府土木建築部	竹原 一彦
3. 伏 見 城 跡	京都市伏見区毛利長門西町	平 2. 10. 29 ～ 平 3. 2. 27	京都府教育委員会	柴 暁彦

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 丹後国宮農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡	
平成2年度発掘調査概要.....	1
(1) 阿婆田窯跡群.....	3
(2) 大田南・下後古墳群.....	40
(3) 横浦古墓.....	49
(4) 山形古墓群.....	53
2. 千代川遺跡第16次発掘調査概要.....	69
3. 伏見城跡発掘調査概要.....	95

挿 図 目 次

1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡

(1) 阿婆田窯跡群

第 1 図	周辺主要遺跡分布図	4
第 2 図	阿婆田窯跡群分布図	6
第 3 図	C支群窯体位置及びトレンチ配置図	7
第 4 図	阿婆田C-1号窯窯体実測図	8
第 5 図	阿婆田C-1号窯出土須恵器実測図	10
第 6 図	阿婆田C-2号窯窯体実測図	11
第 7 図	阿婆田C-2号窯窯体内須恵器出土状況図	14
第 8 図	阿婆田C-2号窯出土須恵器実測図(1)	16
第 9 図	阿婆田C-2号窯出土須恵器実測図(2)	17
第 10 図	阿婆田C-3号窯窯体実測図	19
第 11 図	阿婆田C-3号窯出土須恵器実測図	20
第 12 図	阿婆田C-4号窯窯体実測図	21
第 13 図	阿婆田C-3・4号窯間土層断面図	22
第 14 図	阿婆田C-4号窯出土須恵器実測図	22
第 15 図	阿婆田C-5号窯窯体実測図	23
第 16 図	阿婆田C-5号窯出土須恵器実測図	23
第 17 図	阿婆田C-6号窯窯体実測図	25
第 18 図	阿婆田C-6号窯出土須恵器実測図	27
第 19 図	土坑S K01実測図	29
第 20 図	土坑S K01出土須恵器実測図	29
第 21 図	甕体部拓影	37

(2) 大田南・下後古墳群

第 22 図	大田南・下後古墳群周辺主要古墳時代遺跡分布図	41
第 23 図	大田南・下後古墳群分布図	42
第 24 図	大田南古墳群E地点出土遺物実測図	44
第 25 図	下後古墳群地形図	45
第 26 図	下後3号墳主体部実測図	46

第 27 図	下後 5 号墳主体部実測図	47
(3) 横浦古墓		
第 28 図	西部地区関係遺跡位置図	49
第 29 図	横浦古墓位置図	50
第 30 図	古墓方形石組平面図・断面図	50
第 31 図	横浦古墓平面図	50
第 32 図	古墓断面図	51
第 33 図	出土遺物実測図	52
(2) 山形古墓群		
第 34 図	調査前地形図及び遺構配置図	53
第 35 図	S X 01・02 検出状況実測図	55
第 36 図	S X 01・02 下層遺構及び土層実測図	55
第 37 図	S X 03・04 実測図	56
第 38 図	S X 03 小石室内遺物出土状況図	57
第 39 図	S X 03 土器埋納土坑	57
第 40 図	S X 08・10・11 実測図	58
第 41 図	検出遺構平面図	59
第 42 図	S X 06 表土中出土遺物拓本	59
第 43 図	出土遺物実測図	59
第 44 図	出土遺物実測図(石製品)	60
第 45 図	S X 12~15 実測図	61
第 46 図	S K 01 実測図	62
第 47 図	S B 01 実測図	63
第 48 図	出土遺物実測図	63
2. 千代川遺跡第16次		
第 49 図	調査地周辺遺跡分布図	70
第 50 図	調査区・試掘トレンチ配置図	71
第 51 図	調査区平面図	73
第 52 図	A 地区 S B 03 実測図	75
第 53 図	B 地区 S B 01 実測図	76
第 54 図	C 地区 S X 04 実測図	79
第 55 図	S E 02 実測図	80

第 56 図	C-2地区西壁南部土層断面図	81
第 57 図	D地区SH01・02実測図	82
第 58 図	縄文土器拓影(1)	84
第 59 図	縄文土器拓影(2)	85
第 60 図	出土遺物実測図(1)	86
第 61 図	出土遺物実測図(2)	87
第 62 図	石製品・金属製品	89
第 63 図	木製遺物実測図	90
第 64 図	A・B地区掘立柱建物変遷図	92
3. 伏見城跡		
第 65 図	調査地位置図	95
第 66 図	調査地西壁断面図	96
第 67 図	調査地遺構平面図	97
第 68 図	礎石建物跡S B003周辺遺構平面図	98
第 69 図	石敷及び板塀痕跡断面実測図	100
第 70 図	竈S X169実測図	100
第 71 図	出土遺物実測図(1)	102
第 72 図	出土遺物実測図(2)	103
第 73 図	主要遺構変遷図	105

付 表 目 次

1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡		
付 表 1	平成元・2年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表	1
付 表 2	国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表	2
(1) 阿婆田窯跡群		
付 表 3	杯・皿法量分布表	32
付 表 4	窯体内出土須恵器器種構成表	33
付 表 5	口径別個体数	33
付 表 6	阿婆田窯跡群出土須恵器編年表	35
(2) 大田南・下後古墳群		
付 表 7	大田南古墳群調査結果一覧表	43

図 版 目 次

1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡

(1) 阿婆田窯跡群

- 図版第1 (1)調査地遠景(北東から) (2)調査地全景(南東から)
- 図版第2 (1)C-1号窯全景(東から) (2)C-1号窯遺物出土状況
- 図版第3 (1)C-2号窯崖面露出状況(東から) (2)C-2号窯全景①(東から)
- 図版第4 (1)C-2号窯全景②(東から) (2)C-2号窯下方窯体(東から)
(3)C-2号窯下方窯体遺物出土状況
- 図版第5 (1)C-2・3号窯窯体と下方窯体(北東から)
(2)C-2号窯全景(東から)
- 図版第6 (1)C-3号窯舟底状土坑 (2)舟底状土坑と最終床面
- 図版第7 (1)C-4号窯検出状況 (2)C-4号窯全景(東から)
- 図版第8 (1)C-5号窯全景(東から) (2)S K01全景(南から)
- 図版第9 (1)C-6号窯全景(東から) (2)C-6号窯完掘状況
- 図版第10 (1)C-6号窯窯体内土層断面 (2)C-6号窯遺物出土状況
- 図版第11 (1)C-6号窯舟底状土坑と最終床面
(2)C-6号窯舟底状土坑完掘状況
- 図版第12 (1)C-6号窯燃焼部壁面補修痕跡 (2)C-6号窯煙道部の状況
- 図版第13 (1)C-3・4号間土層堆積状況(東から)
(2)尾根上部試掘トレンチ(北から)
- 図版第14 出土須恵器(1)
- 図版第15 出土須恵器(2)
- 図版第16 出土須恵器(3)
- 図版第17 出土須恵器(4)
- 図版第18 出土須恵器(5)
- #### (2) 下後古墳群
- 図版第19 (1)下後古墳群調査前遠景(東から) (2)下後古墳群調査後遠景(南東から)
- 図版第20 (1)下後2・5号墳調査前全景(南西から)
(2)下後2号墳調査後全景(南西から)
- 図版第21 (1)下後3号墳調査前全景(北東から) (2)下後3号墳主体部(西から)

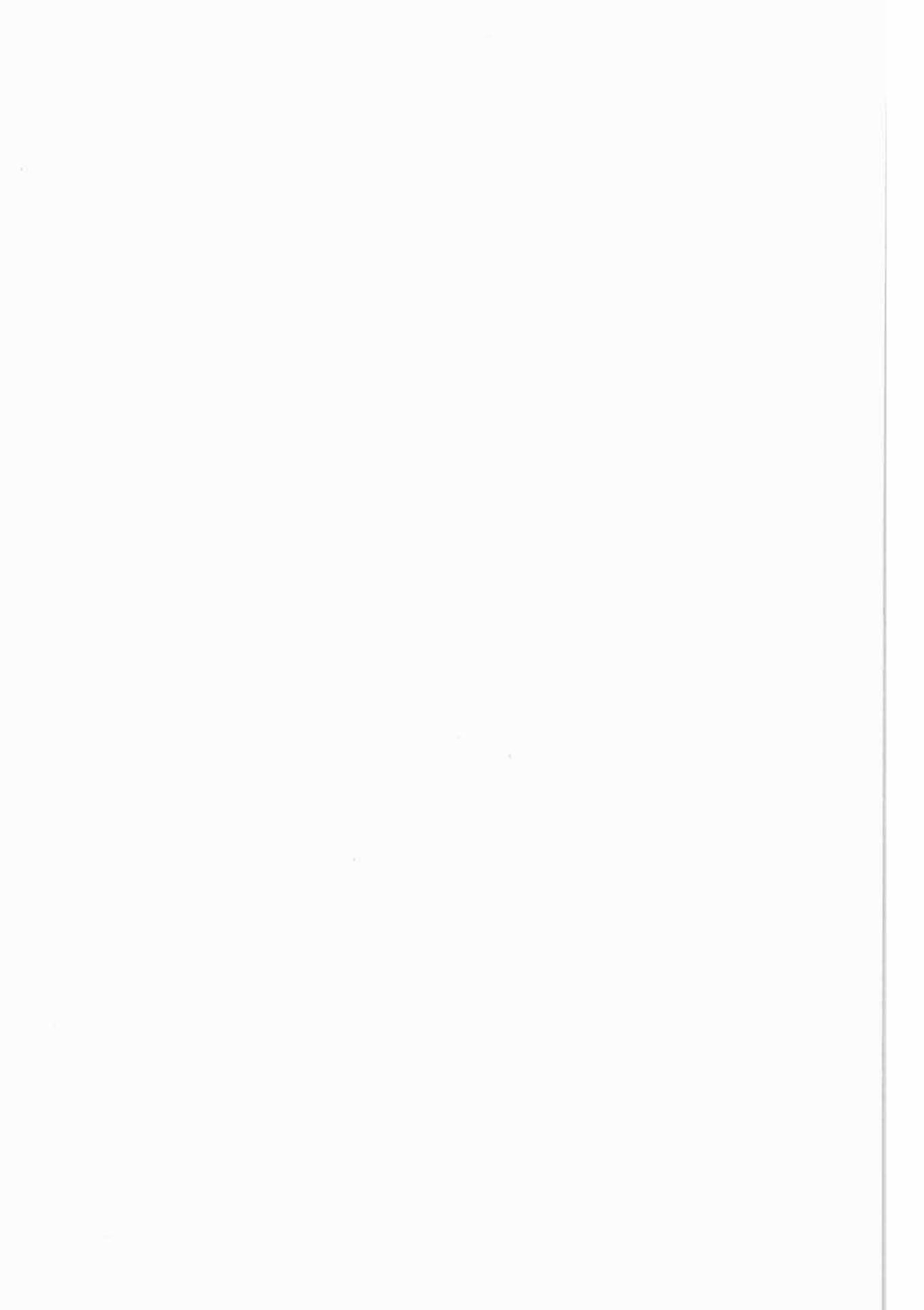
- 図版第22 (1)下後5号墳調査後全景(南西から) (2)下後5号墳主体部(東から)
 (3) 横浦古墓
- 図版第23 (1)調査地全景(北から) (2)古墓全景(俯瞰)
- 図版第24 (1)古墓石組み検出状況(南から)
 (2)古墓盛土2除去後の状況(北から)
 (3)古墓土坑2(北西から) (4)石積み1断ち割り状況(東から)
- 図版第25 (1)石積み2(北西から) (2)石積み3(北から)
 (3)石積み4断ち割り状況 (4)試掘地全景(南から)
- (4) 山形古墓群
- 図版第26 (1)山形古墓群全景 (2)S X01・02
- 図版第27 (1)S X03全景 (2)S X03内小石室
- 図版第28 (1)S X04下層集石 (2)S X10集石
 (3)S X11集石 (4)S X03埋甕土坑
- 図版第29 出土遺物
- 図版第30 (1)調査地遠景(北西から) (2)S X12~15集石(南から)
- 図版第31 (1)S X12遺物出土状況 (2)S X14集石下土坑
 (3)S K01(茶毘跡：北から) (4)S B01(北から)

2. 千代川遺跡第16次

- 図版第32 (1)調査地遠景(東から) (2)調査地全景(北から)
- 図版第33 (1)A地区 S B02(北東から) (2)A地区 S B03(北西から)
- 図版第34 (1)A地区 S B09(北から) (2)A地区 旧流路底(西から)
- 図版第35 (1)B地区 S B01(北から) (2)B地区 S B04・05(東から)
- 図版第36 (1)B地区 S B06(西から) (2)B地区 S B07・08(西から)
- 図版第37 (1)B地区 S B11・12(西北から) (2)B地区 S B10(西北から)
- 図版第38 (1)C-1地区全景(東から) (2)C-1地区 S X06(南から)
- 図版第39 (1)C-2地区全景(北から) (2)C-2地区 S D08・09(東から)
- 図版第40 (1)C-3地区 S E02(南から)
 (2)C-3地区 S X05上部集石(北から)
- 図版第41 (1)D地区 S H01・02(北から)
 (2)D地区 S H01カマド跡(南から)
- 図版第42 出土遺物
- 図版第43 (1)縄文土器 (2)石製品・鉄製品 (3)木製品

3. 伏見城跡

- 図版第44 (1)調査地全景(北西から) (2)調査地全景(南西から)
- 図版第45 (1)礎石建物跡S B003周辺(南西から) (2)礎石建物跡S B006(西から)
- 図版第46 (1)溝S D115断面(東から)
(2)石敷・礎石建物跡S B006(西から)
(3)石敷・礎石及び築地S A168断面(西から)
(4)板塀S A005検出状況及び築地S A168断面(西から)
- 図版第47 (1)板塀S A005・礎石及び石敷(北から)
(2)カマドS X169完掘状況(東から)
(3)土坑S K068・086・116完掘状況(西から)
(4)板塀S A005断面(南から)
- 図版第48 出土遺物



1. 丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区) 関係遺跡平成2年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画、推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴い、平成元年度の年度末に発掘調査が終了した京都府中郡大宮町阿婆田窯跡群、一部試掘調査を行った熊野郡久美浜町山形古墓、平成2年度中に調査を実施した竹野郡弥栄町大田南古墳群・下後古墳群、熊野郡久美浜町山形古墓・横浦経塚の発掘調査概要である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、当調査研究センターでは、昭和60年度から開始し、付表2に示すように多大な成果があがっている。^(注1)

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長水谷寿克、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一、岩松 保、森 正、森島康雄、石崎善久が担当した。

本概要報告は、「はじめに」を増田が、丹後東部地区の「(1)阿婆田窯跡群」は主として森が、「(2)大田南・下後古墳群」は石崎が、西部地区の「(3)横浦経塚」は森島が、「(4)山形古墓」は岩松・森・森島が執筆した。なお、「(1)阿婆田窯跡群」の「1.位置と環境」は、齊藤 優(京都教育大学学生)が執筆した。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び補助員・整理員として作業に従事していただいた。^(注2) また、調査にあたっては、弥栄町教育委員会、大宮町教育委員会、久美浜町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地においても多くの方々の御協力と御指導を賜った。あらためて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田 孝彦)

付表1 平成元・2年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	担 当 者
1	阿婆田窯跡群	京都府中郡大宮町大野 小字阿婆田	平成元年8月7日 ～平成2年1月24日 平成2年4月19日	調査第1係長 辻本 和美 調査員 森 正

2	下後古墳群 大田南古墳群	京都府竹野郡弥栄町和 田野小字下後他	平成2年4月18日 ～平成2年8月4日	調査第1係長 水谷 寿克 調査員 石崎 善久
3	横浦古墓	京都府熊野郡久美浜町 栲谷小字横浦	平成2年4月12日 ～平成2年7月20日	調査第1係長 水谷 寿克 調査員 森島 康雄
4	山形古墓 (試掘調査)	京都府熊野郡久美浜町 大井小字山形	平成元年7月17日 ～平成元年8月18日	調査第1係長 辻本 和美 調査員 岩松 保
5	山形古墓	京都府熊野郡久美浜町 大井小字山形	平成2年4月12日 ～平成2年6月14日	調査第1係長 水谷 寿克 調査員 森 正

付表2 国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	概要
1	有明古墳群・横穴群	大宮町三坂	昭和60年10月 ～昭和61年3月	古墳2基(4世紀後半～5世紀) 横穴3基(6世紀末～7世紀中葉)
2	桃山古墳群	峰山町内記	昭和60年11月 ～昭和61年3月	古墳2基(6世紀中葉)
3	宮の森古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年7月	古墳4基(5世紀～6世紀中葉)
4	ゲンギョウの山古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年10月	古墳9基(4世紀後半・7世紀)
5	高山古墳群・高山遺跡	丹後町徳光	昭和61年7月 ～昭和62年9月	古墳6基(6世紀後半～7世紀前半) 中世～近世墓30基 竪穴式住居跡1(7世紀前半)
6	普甲古墳群 荷古墳群	弥栄町井辺	昭和62年6月 ～昭和62年12月	古墳11基(5世紀前半～6世紀前半)
7	新ヶ尾東古墳群	弥栄町吉沢	昭和62年12月 ～昭和63年1月	古墳3基(6世紀中葉・後半)
8	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和62年5月 ～昭和62年6月	城跡(柱穴・土坑)13世紀
9	アバタ古墳群	久美浜町新庄	昭和62年7月 ～昭和62年11月	古墳2基(6世紀末～7世紀前半)
10	スクモ塚古墳群	峰山町内記 弥栄町荒木	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳4基(4世紀末～5世紀)
11	アバタ東1号墳	久美浜町新庄	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳1基(6世紀中葉)
12	アサバラ遺跡	久美浜町新庄	昭和63年4月 ～昭和63年7月	竪穴式住居跡5(5世紀後半～6世紀) 溝
13	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和63年6月 ～昭和63年8月	城跡(土坑・溝)15世紀 土坑(弥生時代中期末～後期初頭)
14	太田古墳群 下後古墳群	弥栄町和田野	平成元年8月 ～平成元年10月	古墳3基(6世紀初頭～6世紀中頃) 土坑5基(1基は弥生時代後期末)
15	川向1号墳	久美浜町大井	平成元年4月 ～平成元年7月	古墳1基(6世紀後半)

(1) 阿婆田窯跡群

1. 位置と環境

阿婆田窯跡群の所在する中郡大宮町は、丹後半島を北流する竹野川の中流域に位置する。この地域には竹野川が形成した細長い沖積平野が広がり、北は峰山町に接するが、他の三方は山塊に囲まれているため、通称中郡盆地と呼ばれている。

大宮町をめぐる歴史的環境をみると、縄文時代の遺跡としては、早期の押型文土器や後期の磨消縄文土器・沈線文土器が出土した裏陰遺跡^(注3)、正垣遺跡^(注4)が知られる。弥生時代の遺跡は、集落遺跡では谷内遺跡^(注5)、裏陰遺跡、正垣遺跡、三重遺跡等がある。墳墓としては帯城墳墓群^(注6)の調査が行われており、丘陵上に連続と造営される後期の台状墓は、丹後町大山墳墓群^(注7)とともにこの地域における弥生時代の墓制を考える上で貴重な資料といえる。

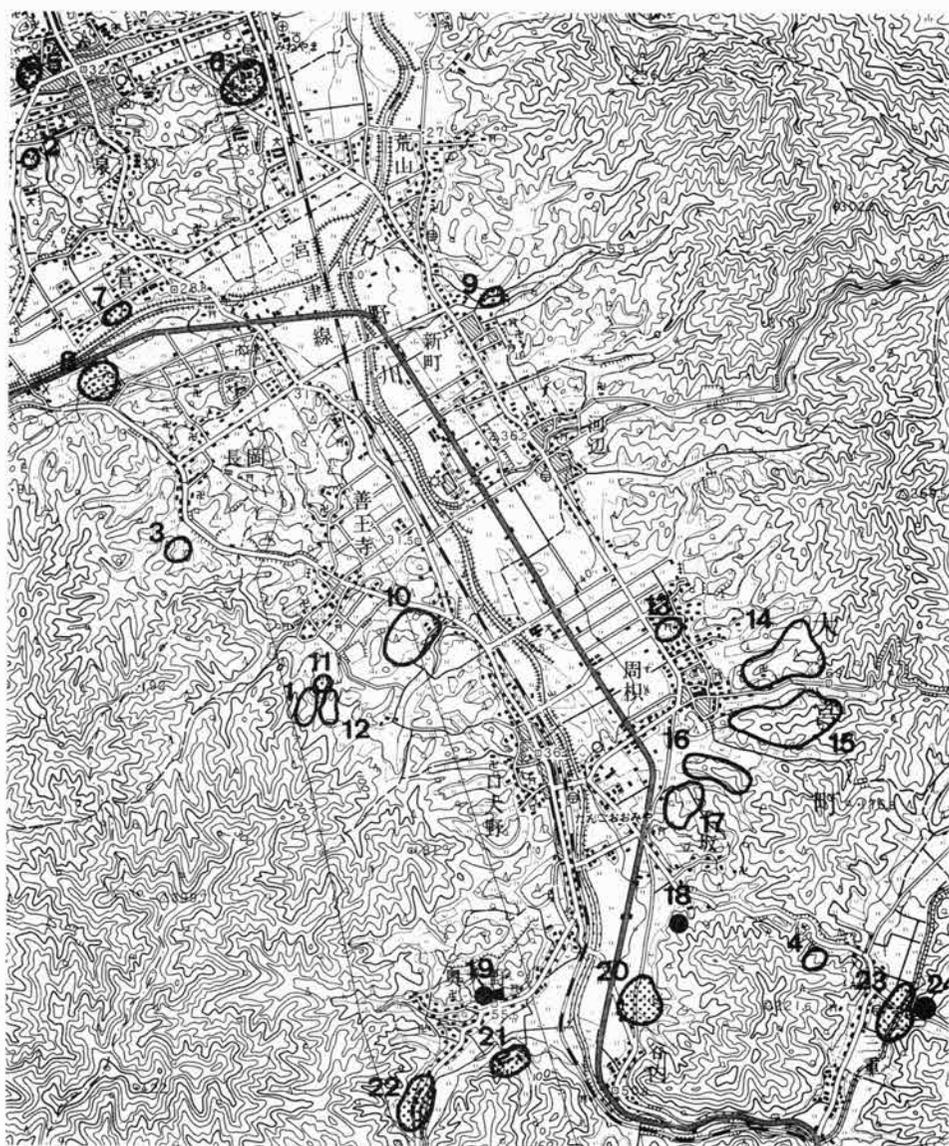
古墳時代の竹野川流域は、前期末から中期中頃にかけて、丹後町神明山古墳や弥栄町黒部銚子山古墳などの大型前方後円墳が築造される。しかし、大宮町にはこれらのような大型首長墓は存在せず、径約25mの円墳で小規模な竪穴式石室に鉄器が副葬されていた大内1号墳^(注8)や、組合式石棺に熟年女性が埋葬され、鏡や玉類が出土した大谷古墳^(注9)等、中規模の首長墓が築造される。この他、有明古墳群^(注10)、小池古墳群^(注11)、池田古墳群^(注12)、帯城古墳群等の小規模な古墳が、中期から後期に築造される。これらの小古墳は近年調査例が増加するが、その変遷過程や画期など検討すべき問題も多く残されている。後期後半以降には横穴式石室墳^(注13)が築造されるが、中でも新戸古墳は、巨石を使用し奥壁に石棚を設ける特徴的な石室構造であり、金銅装の馬具等の出土も知られる。さらに6世紀末葉以降には、石室墳の築造と並行して、大田鼻横穴群^(注14)・有明横穴群^(注15)等の横穴の築造が開始される。中でも大田鼻横穴群は総数30基の規模で、7世紀に築造の最盛期を迎え、8世紀まで造営が続けられる。

歴史時代の遺跡としては、掘立柱建物跡が検出された正垣遺跡、裏陰遺跡、谷内遺跡、石製模造品等の祭祀遺物の出土した大宮売神社遺跡等が知られる。具体的調査例は少ないが、須恵器窯跡では大宮町では阿婆田窯跡以外に新宮窯跡^(注16)、三坂谷窯跡^(注17)が存在する。

京都府北部では現在12か所で須恵器窯跡が確認されている。操業時期は大宮町新宮窯跡、舞鶴市シゲツ窯跡^(注19)で飛鳥時代後半である。奈良時代には網野町郷窯跡、大宮町三坂谷窯跡、同町阿婆田窯跡、奈良時代後半から平安時代前半にかけて峰山町吉原窯跡、同町大河原窯跡、平安時代に同町青谷窯跡、舞鶴市城屋窯跡が操業している。時期の不明なものに久美浜町奥馬地窯跡、舞鶴市小倉窯跡、行永窯跡がある。その中でも、阿婆田窯跡は比較的大きな生産規模を備えていたと考えられる。しかし、京都府北部全体を視野に入れると、確

認された須恵器窯の資料は依然少なく、これらの歴史的背景を考察するためには今後さらに表採資料などの検討が課題といえる。

(齊藤 優)



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

1. 阿婆田窯跡群
2. 吉原窯跡
3. 大河原窯跡
4. 三坂谷窯跡群
5. 古殿遺跡
6. 扇谷遺跡
7. 菅沖波遺跡
8. 途中ヶ丘遺跡
9. 新町遺跡
10. 小池古墳群
11. アバタ遺跡
12. 池田古墳群
13. 大宮壳神社遺跡
14. 幾坂古墳群
15. 左坂古墳群
16. 帯城墳墓群・大田鼻横穴群
17. 有明古墳群・横穴群
18. 大谷古墳
19. 新戸古墳
20. 谷内遺跡
21. 裏陰遺跡
22. 正垣遺跡
23. 三重遺跡
24. 大内1号墳

2. 調査の経過

今回調査を行った阿婆田窯跡群のある谷部分では、従来から多数の須恵器が散布し、窯跡があるとされていた。1979年には、採集遺物の実測図が公表され^(注20)、奈良時代後半期を中心とする窯跡が十数基、3支群に別れて存在することが判明した。

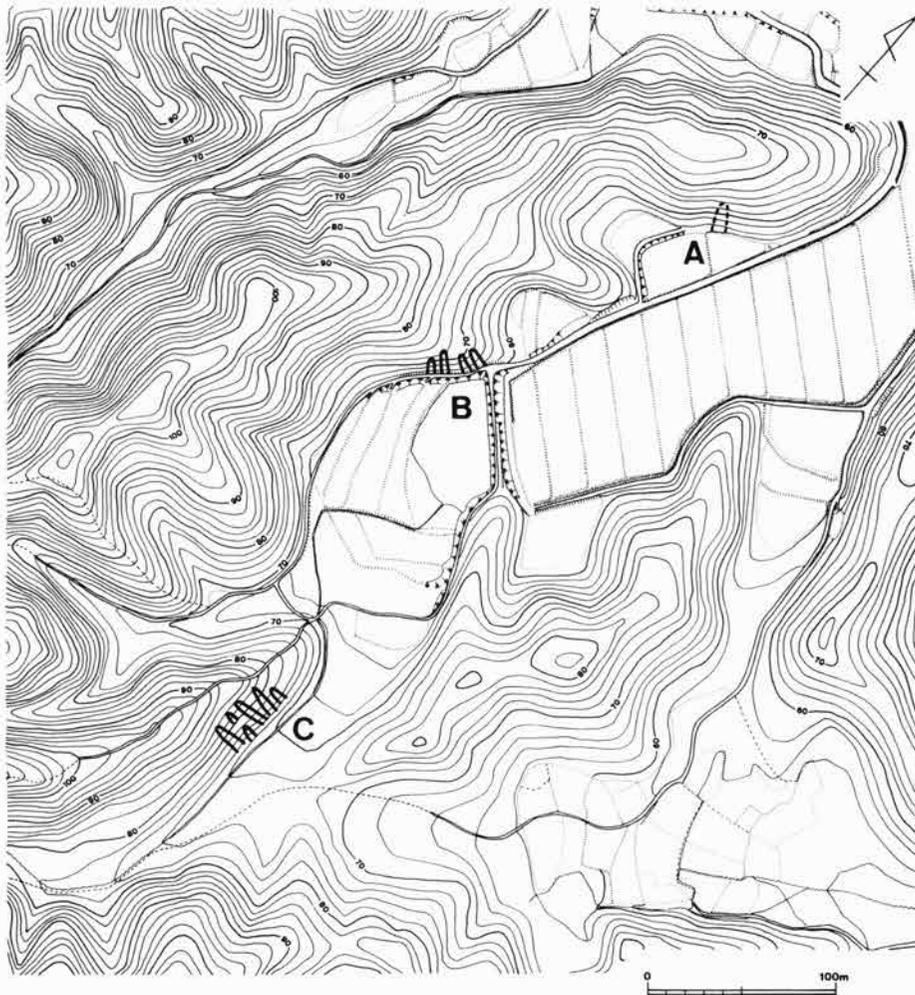
今回は、国営農地東部地区大野団地の造成に伴い、上記3支群のうちC支群の範囲が調査の対象となった。調査前、このC支群の地点は、すでに窯体の位置あるいはその残存状況等、ほとんどわからないような状態であった。このため、協議の結果、京都府教育委員会が試掘調査を行い、窯体の数・残存状況あるいは灰原の有無等を確認した後、当調査研究センターが本調査を行うこととした。試掘調査の結果、4基の窯体が比較的良好な状況で残存していることが崖断面で判明した。また、前面の谷部分では、2次堆積した砂礫層中に土器が含まれるといった状況であり、灰原としては存在しないことが判明した。

以上のような試掘調査の結果をうけ、一部樹木伐採と並行しながらも8月7日から現地調査を開始した。地形測量を行った後、崖面に窯体を確認されていた地点について、丘陵斜面上部までトレンチを設定し、拡張調査を開始した。この結果、残存状況の悪いものも含め、6基の窯体を確認するにいたった。さらに、南北方向にトレンチを拡張し、付近に窯体がないことを確認した。この段階で、各窯体について谷の開口方向(北)側から順に、1～6号窯と窯体番号を確定した。8月29日からは、窯体内の調査にとりかかった。各窯体の残存状況は、2・3・6号窯が比較的良好なものであったが、その他については、窯体の一部がかるうじて残っている程度であった。これら各窯体内部の調査が、終了に近づいた11月28日、確認のため窯体の存在する斜面下方の流土を除去したところ、2・3号窯それぞれの下方、レベル差にして2mの地点で、窯体の一部がずり落ちた状況で残存していることが判明した。窯体内部に残存していた土器片が、上部の窯体内出土のものと接合関係にあった点や、窯体の規模が上部のものと一致することなどからみて、地滑り等の要因によって、下方へずり落ちたものと判断した。11月29日には、現地説明会を実施し、約80名の参加を得た。この後、窯体が位置する丘陵の尾根上にもトレンチを設定したが、遺構・遺物ともに認められなかった。窯体の実測、断ち割り作業等を行い、翌平成2年1月23日には、窯体調査の一応の終了をみた。

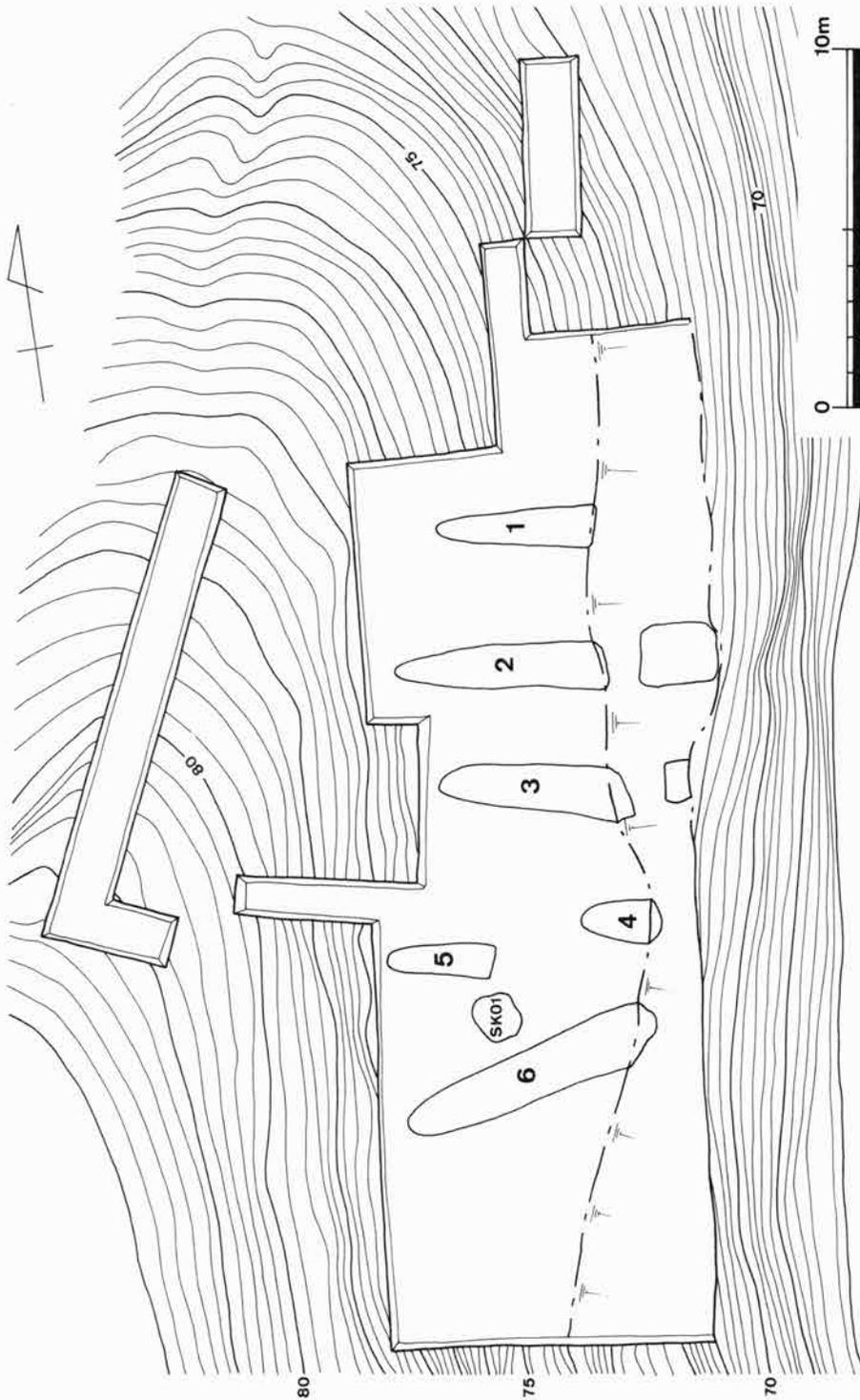
この後、4月19日には、1～6号の各窯体が存在する地点よりさらに谷奥部分について、窯の有無を確認するために、重機による谷部への試掘調査を行った。深さ2m程度で、谷奥の地点まで約30mにわたり掘削を行ったが、遺物を含まない粗砂層の堆積が見られただけであり、斜面に窯体はないものと判断できた。

3. 窯体分布状況(第2図)

阿婆田窯跡群は、竹野川左岸の善王寺集落から西に深くのびる谷筋の南東斜面に位置する。全体では、3支群11基の窯体が分布しており、谷の入り口からA～C支群としている。A支群は、このうち最も北に位置するが、現在は丘陵の南東斜面に1基のみ確認できる。ここから約150m谷奥で、同じ丘陵の南東斜面にB支群が分布する。ここでは、里道によって削られた崖面に4基の窯体断面が露出し、各窯体間は、2～3mと近接して築かれている状況が確認できる。これらの前面には現在溜め池があり、この池の中に灰原が存在する。さらに約200m谷奥で、A・B支群の位置する丘陵から派生する丘陵の東斜面に、C支群が位置する。C支群は、後述するように6基で構成される。以上、現在確認できる窯体は11基であるが、A・B両支群は、その実数がさらに増える可能性は高いと考えられる。



第2図 阿婆田窯跡群分布図



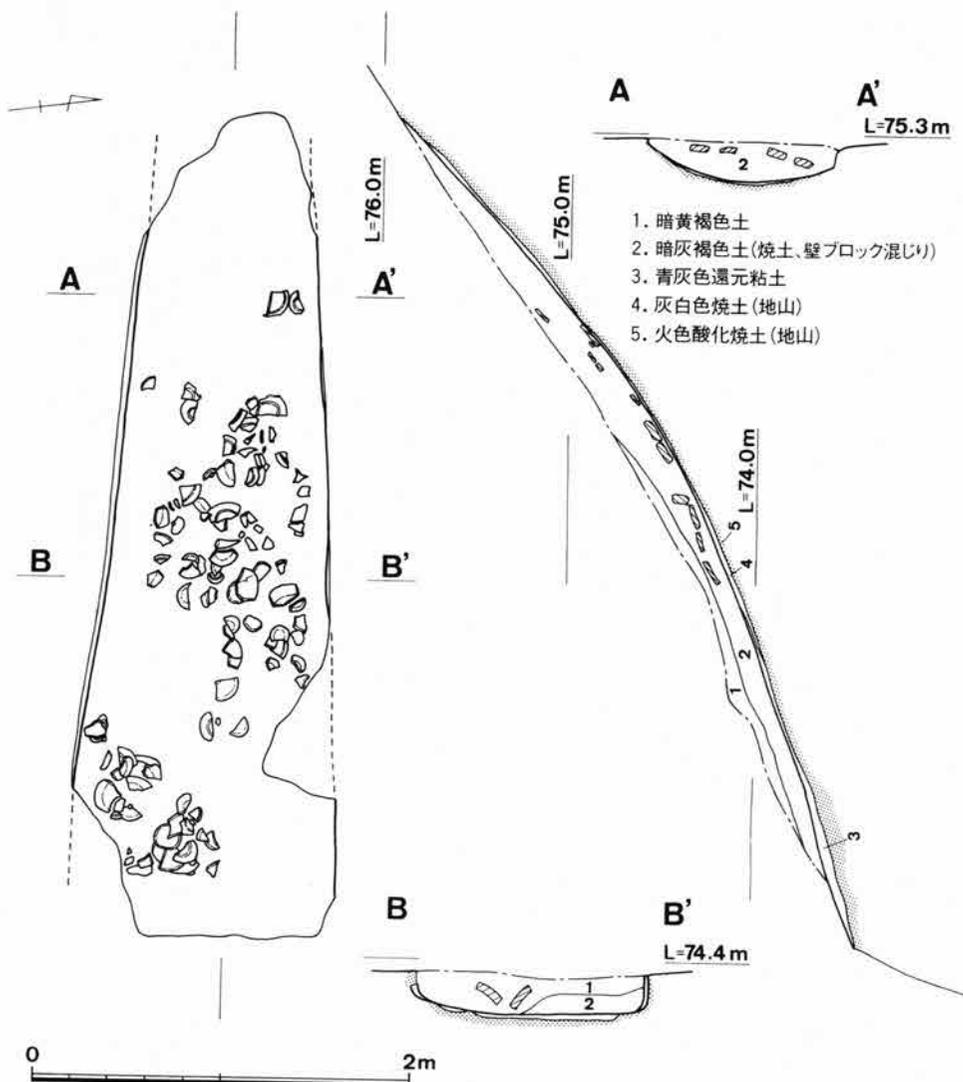
第3図 C支群窯体位置及びトレンチ配置図

4. 調査の概要

阿婆田窯跡群C支群では、今回の発掘調査によって南に向かってのびる丘陵の西側斜面で6基の窯体と1基の土坑(SK01)を検出した。各窯体は非常に近接しており、約18mの範囲に6基の窯体が順次築かれている。これらの窯体は、北側から順に1～6号窯と呼称し、以下に各窯体の構造と出土遺物の概略を記す。

①C-1号窯

窯体の構造(第4図) C-1号窯は、C支群6基の窯のうち最も南(谷の入り口)に位置する。窯体の残存状況は悪く、窯壁はほとんど残っていない。残りのよい部分でも床面から



第4図 阿婆田C-1号窯窯体実測図(S=1/40)

10cm程度立ち上がるだけである。このため半地下式の構造であることはわかるが、どの程度地山面を掘りくぼめていたのかは明確でない。しかし、南に位置する2号窯との床面のレベル差を見た場合、構築にあたっての掘り込みは浅かったものと判断できる。

床面としては焼成部の一部と焼成部が残存しており、残存全長は約4.6mを測る。焼成部最大幅約1.4m・同最大傾斜約30°を測る。平面形は、焼成部から窯尻に向かい、徐々に幅を狭めていくものであろう。

また、1号窯の焼成部では壁面のみに粘土を貼り、床面には粘土を貼っていない。花崗岩風化土の地山をそのまま床面として使用しており、床面は1面である。焼成部の床面は、強く還元され淡青灰色を呈する。その他の窯壁面は、灰白色を呈する。

窯体内床面では、多数の土器が残存しており、総個体数は、220点に及ぶ。焼成部下方及び焼成部にずり落ちた状況であり、最終操業に伴う遺物と見てよい。

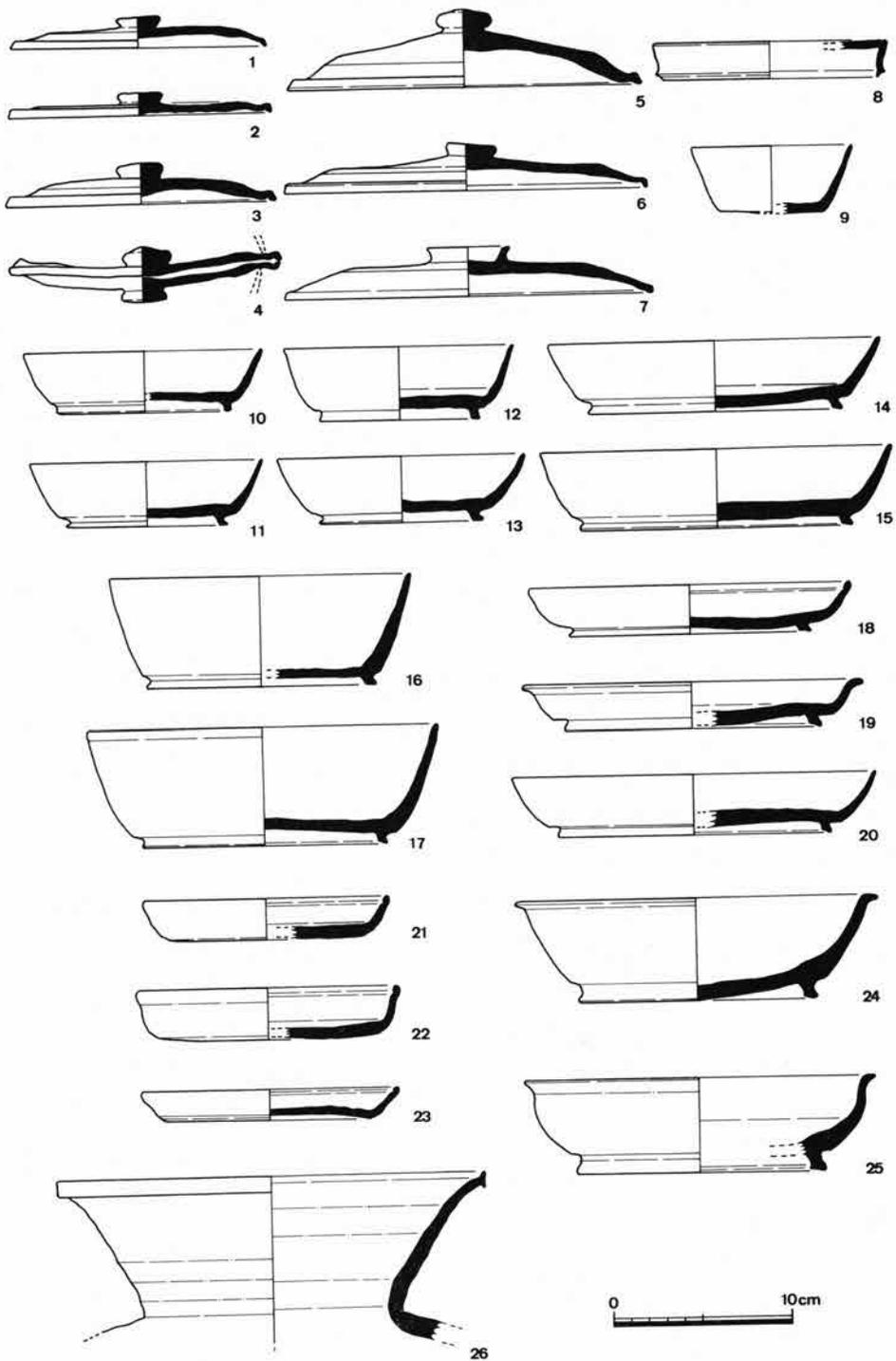
出土須恵器(第5図) 1号窯では、窯体内床面上に222個体の須恵器が残存していた。その器種構成としては、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・碗・短頸壺・壺蓋・鉢がある。構成比は、付表4-①に示すとおりである。窯体の残存状況が先述のように悪いため、最終操業時の器種構成比を表わすものではない。しかし、2号窯と同様に杯Aの比率が低い点や杯Bの比率が高い点等、ある程度最終操業時の比率を反映しているものと考えられる。

杯A(9) 2個体だけ出土した。口径8.9cm・器高3.9cmを測る小形品である。底部と体部の境は明瞭に屈曲し、口縁部まで直線的にのびる。

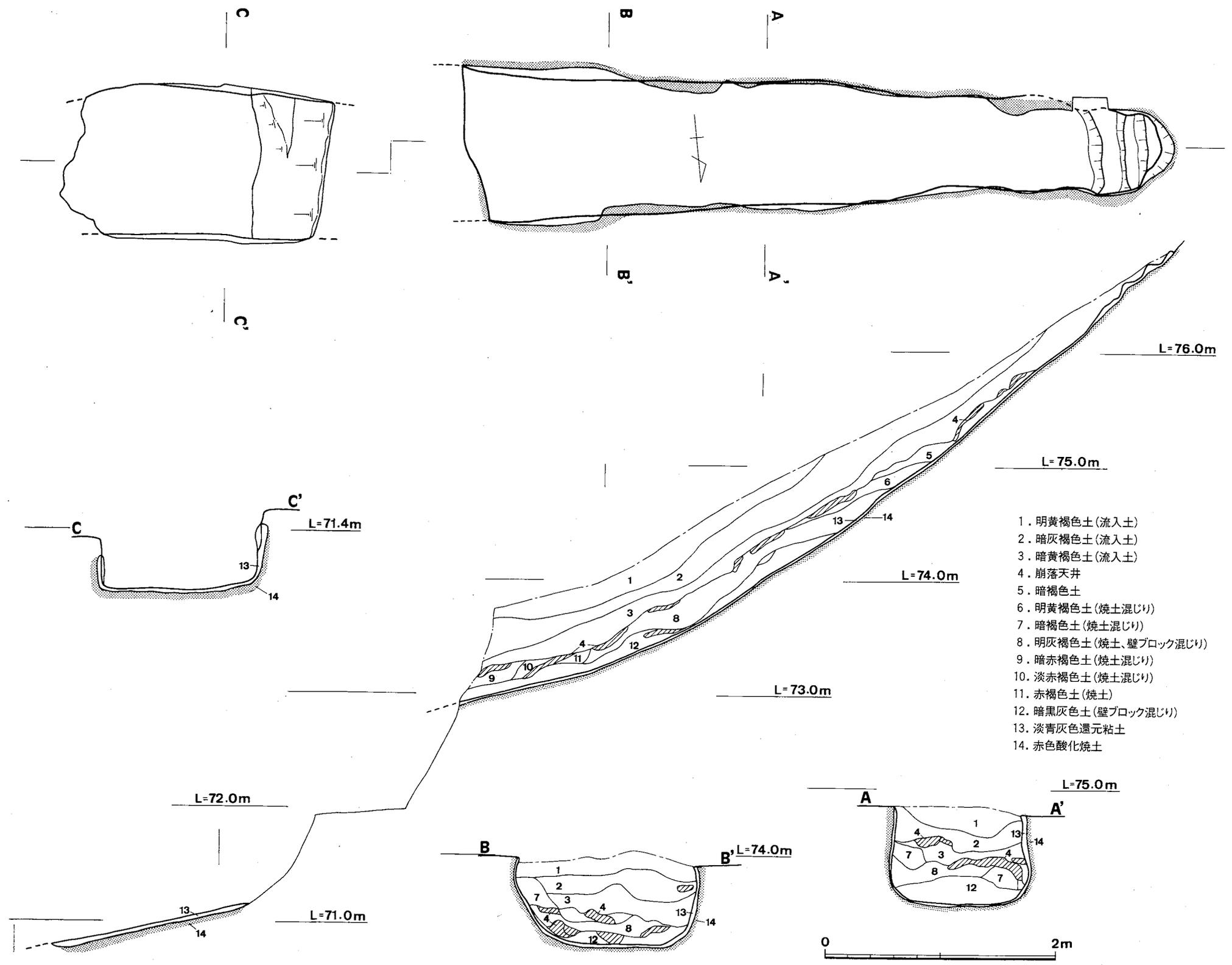
杯B(10~17) 法量によってI~IVに分けられる。I；口径19.5cm・器高6.7cmを測る大形のもの(17)。II；口径17cmを中心とするもの(16)。I・IIは、径高指数34前後である。これらに対してIII(14・15)は、口径18~20cmであるが、器高が低く径高指数は21を中心とする。IV；口径は13.5cmを中心とする。量的には中心となるものである。体部はほぼ直線的に外上方にのびる。高台の形態には、ほぼ垂直に立つものと、外方にふんばるものがある。両方ともに端面で接地するものが主体となる。

蓋(1~7) 法量によって、I；口径19~20cmのもの(5~7)と、II；口径14~15cmのもの(1~4)がある。IIは、数量的に中心となり、法量から見て杯BIVとセットになる。器高は全体に低く扁平であり、口縁端部は短く下方へ折り返す。天井部は、ていねいなヘラ削りを行い、扁平で丸みを帯びたつまみをもつ。IIのうち7は、環状のつまみをもつ。4は、蓋2点があわさって融着しており、さらにそれぞれに杯身をかぶせた状況をうかがうことができる。杯Bの窯詰めの際の重ね焼きの状況を復原できる資料である。

皿A(21~23) 形態・法量によって2種に分けられる。I；底部と体部の境は鋭く屈曲し、口縁部内端面には沈線を施す。やや浅く、径高指数12.5前後である(23)。II；底部と



第5図 阿婆田C-1号窯出土須恵器実測図



第6図 阿婆田C-2号窯窯体実測図 (S=1/40)

体部の境は、丸みをおび、純く屈曲する(21・22)。径高指数は、20前後を測る。口縁端部を、わずかながら肥厚させ、内面には沈線を施す。Iは、ていねいなつくりで、底部から屈曲部にかけてていねいなヘラケズリを施している。

皿B(18~20) 口縁端部の形態によって3つに分類できる。Ba形態；杯Bを偏平にしたもので、口縁部は上方にのび端部を丸くおさめるもの。Bb形態；口縁部を強く外反させるもの。Bc形態；口縁部は、外上方にのびているが、端部内面に沈線を施すもの。高台は、いずれも外方にふんばり、ひずみのないものはほぼ端面で接地する。

椀(24~25) 丸みを帯びた体部に、外反する口縁部をもつ。全体に器壁は厚く、鈍いつくりである。高台は外方にふんばり、ほぼ端面で接地する。

壺蓋(8) 1点のみ出土した。平らな天井部から鋭角に屈曲し、口縁部にいたる。口縁端部は、やや内側につまみだし、内傾する面をなす。つまみの有無は不明である。

甕(26) 7個体出土しているが、図化し得るものは1点のみである。頸部外上方に直線的にのび、端部は真上につまみあげ、下方へもわずかに拡張して垂直な端面を形成する。口径は、24cmを測る。

②C-2号窯

窯体の構造(第6図) C-2号窯は、試掘調査時に崖面に窯体横断面が露出したために発見された。窯尻部分には、3段の段をもつ半地下式窖窯である。天井部は、細片となり窯体内に陥没した状況である。床面及び壁面には、粘土を貼り付け窯壁を構築する。

燃焼部は、窯体から2m程度ずり落ちた状態で検出したため、これを含め復原すると残存全長6.4mを測る。燃焼部から窯尻に向かい徐々に幅を狭め、細長い平面形を呈する。燃焼部と焼成部の傾斜変換点は明瞭でないが、下方床面も含めて考えると、燃焼部復原長約2.8m・同最大幅約1.3mである。焼成部の最大傾斜は約35°を測る。側壁は、燃焼部と焼成部の境付近では、鈍角に内湾気味に立ち上がるが、焼成部では、やや内傾するが直立している。床面は基本的に1面であるが、燃焼部壁面では部分的にスサ入り粘土による補修の痕跡が確認できた。

床面及び壁面は、全体的には焼け締まっているとは言い難く、下方の燃焼部が青灰色を呈し、強く還元されている以外は、灰白色を呈しており、地山の酸化範囲も3~4cmと比較的影響が少ないものと言える。

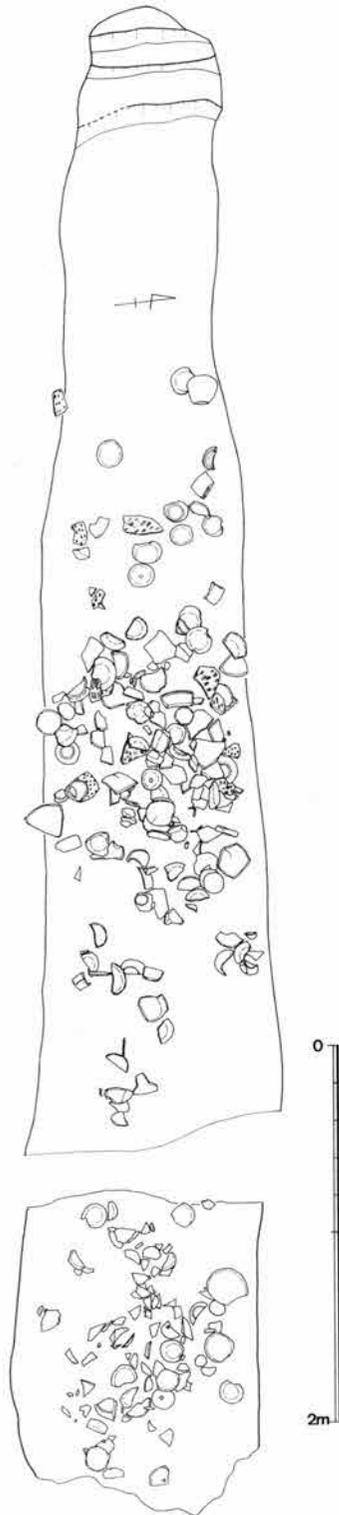
窯体内部には、焼成部の下方及び燃焼部床面上に多数の土器が残存していた。燃焼部のものは焼成部からずり落ちているものと考えられる。これら土器群の総個体数は、200個体に及び、このうち杯類の大半は、完形品あるいは、これに近いものであった。最終操業に伴う土器が取り残されたものと考えられる。

出土須恵器(第8・9図) 窯体内床面からは、203個体の須恵器が出土した。器種構成としては、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・椀・短頸壺・壺蓋・鉢A・鉢B・甕・横瓶・環状平瓶がある。その構成比は、付表4-②に示すとおりである。

杯A(27~30) 法量によりI・IIの2種に分けられる。I；径高指数34でやや深い形態である(27)。II；Iに比べやや浅く、径高指数26前後のもの(28~30)。2のなかでも底部と体部の境が鋭く屈曲するもの(28)と、丸みをおび鈍く屈曲するもの(29)がある。

杯B(31~37) 法量によりI~IIIの3種に分けられる。I(37)と・II(31)は深いもので、径高指数50前後である。IIIは、数量的に主体となるものである。口径は、12~14cmにおさまり、径高指数は28前後で、1号窯の杯BIVとほぼ同法量である。高台の形態には、短くほぼ垂直にのびて端面がややくぼむもの(32~34)と、短く外方にふんばるもの(35・36)の2種がある。

蓋(38~45) 法量によりI・IIの2種に分けられる。I；口径18~19cmを測り、中央のくぼんだつまみを持つ(44・45)。天井部は笠形を呈し、口縁端部はごく短く下方へつまみ出している。椀とセットになるものと考えられる。II；口径14~15cmを測り、杯身BIIIとセットになるもので、数量的にも主体となる(38~43)。細部の形態を見ると、天井部と体部が明瞭に屈曲し器高が低く、方柱状のつまみを持つもの(38・39)と、屈曲部が丸みをおび器高が高く、丸みをおび扁平な擬宝珠つまみを持つもの(40~43)に分けられる。特に前者では、融着した杯身の破片や、降着した灰から、重ね焼きの状況が明瞭に観察できるものが多い。1号窯の杯身Bと同様の



第7図 阿婆田C-2号窯窯体内須恵器出土状況図

方法で窯詰めされていたことがわかる。

壺蓋(46~48) 法量で3種類あるが、それぞれ細部の形態的にも異なるものである。46は最も小さく、口径6.1cm・器高1.4cmを測る。天井部は平らで、つまみを持たない。口縁端部は、やや内側につまみ出し、内傾する面をなす。47もつまみを持たないが、口縁端部はつまみ出さず水平な面をなす。口径8.7cm・器高2.1cmを測る。48は平らな天井部に丸みを帯びた擬宝珠様のつまみをもつ。口縁端部は、外傾する面をなす。口径12.4cm・器高3.8cmを測る。

皿A(49~51) 法量によって2種に分けられる。I；口径18.5~19.5cmを測り、径高指数12前後である(51)。平らな底部から明瞭に屈曲し、口縁端部は肥厚し、内面には沈線を1条施す。底部のヘラ削りをはじめ、全体にシャープでていねいなつくりである。II；口径15.5~16.5cmを測り、径高指数16前後である(49・50)。Iに比べるとつくりは鈍く、底部のヘラ削りも粗雑である。口縁端部の形態は、丸くおさめるもの(49)と、内面に沈線を1条施すもの(50)がある。

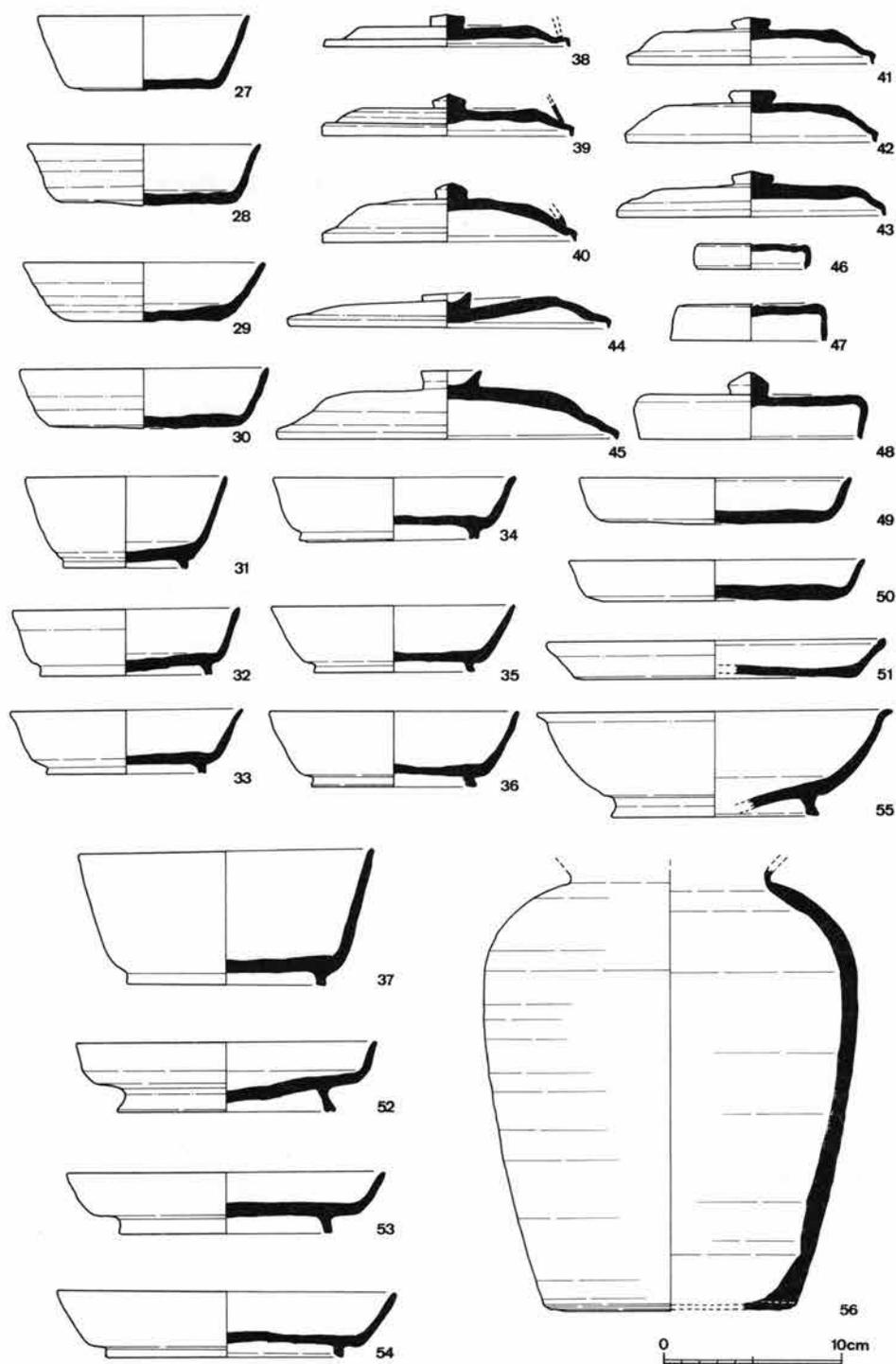
皿B(52~54) 高台の形態により3種に分けられる。Ba形態；高台が1.5cmと高く外方にふんばる(52)。高台端部は、面をなす。Bb形態；高台は1cm程度で、少し外方へふんばる(53)。杯Bの高台に比べるとやや高いものである。Bc形態；杯BⅢを引きのぼしたような形態である(54)。高台の形態も、杯Bと変わらない。

碗(55) 口径19.8cm・器高6.8cmを測る。体部は、稜がなく丸みを帯び、口縁部は外方へつまみだす。高台は、外方にふんばり、ほぼ水平面で接地する。体部内外面ともにロクロなでを施し、全体にていねいなつくりである。

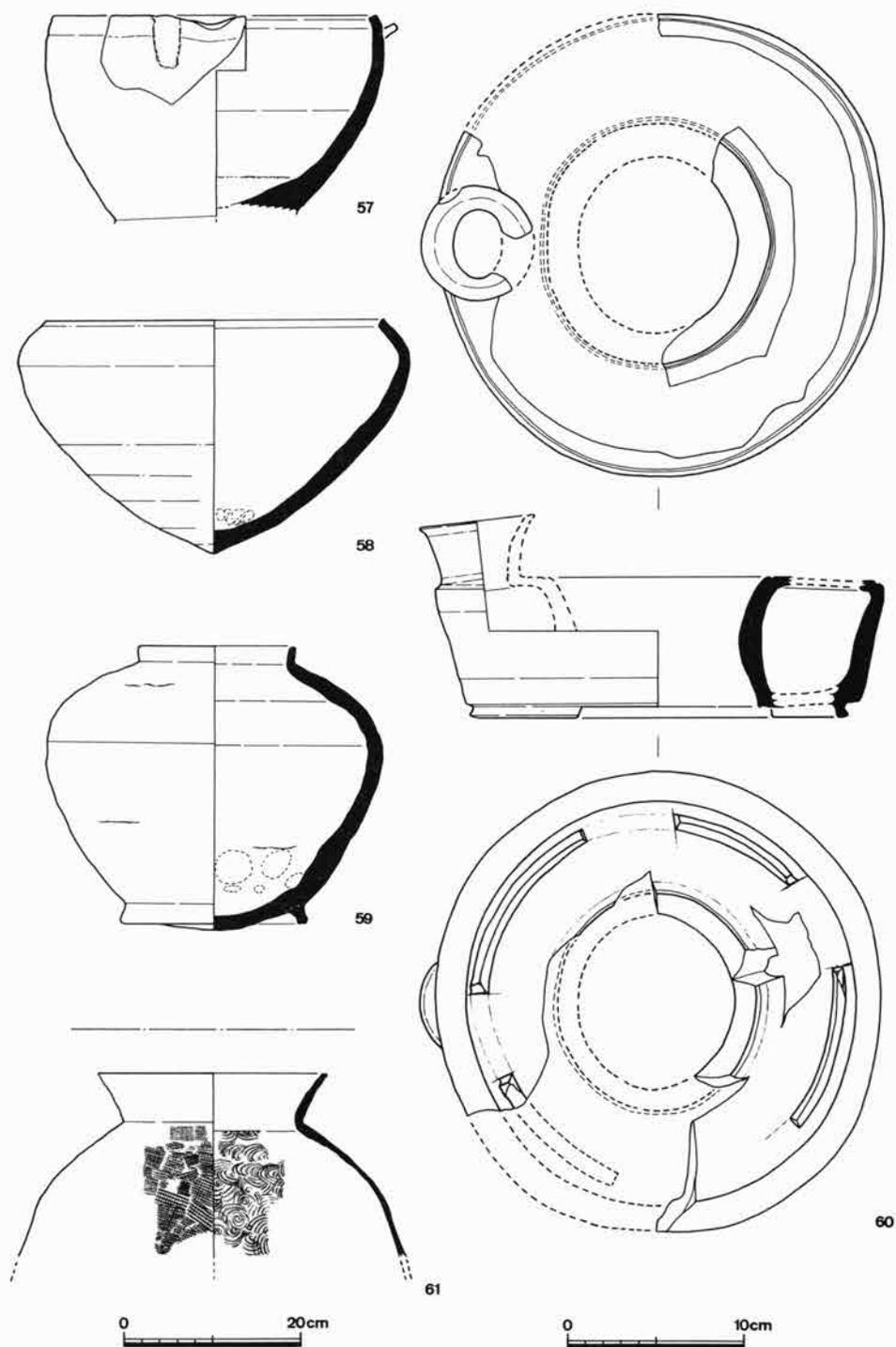
鉢A(58) 鉄鉢である。体部最大径22cmを測り、底部に向かってすぼまり、底部をとがらせている。口縁部は内側へのび、端部は内傾する面をなす。体部下半は、ヘラ削りの後に、ていねいなロクロなでを行っている。

鉢B(57) 片口の鉢である。内湾ぎみにのびる体部で、口縁部はほぼ直立する。口縁部の1か所を外方へ張りださせて片口部を形成する。底部は、欠損しているが、高台が剝離した痕跡が認められる。

環状平瓶(60) 側面から見ると通常の平瓶であるが、体部は断面長方形の環状を呈する異形の須恵器である。体部径は、やや歪んでいるため、頸の付く方向では26.0cm、これに直交する方向では25.2cmを測る。体部上面は平坦な面をなし、内側の面はやや膨らんでいる。頸部は細く、外反して短く開く口縁部をもつ。底部は平らで、短くふんばる輪状高台を貼り付ける。ただし、高台貼り付け後に、4か所を刀子状の工具で切り取り、側面から見ると透かし様の効果を生んでいる。



第8図 阿婆田C-2号窯出土須恵器実測図(1)



第9図 阿婆田C-2号窯出土須恵器実測図(2)

壺A(59) 葉壺形の壺である。丸みを帯びた体部に、短く直立する口縁部を持つ。底部には輪状の高台を持つが、丸い底部のほうが高台下端より突出しているため、正立しない。体部最大径18.8cm・器高16cmを測る。

壺B(56) 長胴の壺である。底部は平らで、直線的な体部をもつ。最大径は、下から3/4にあり、21cmを測る。口縁部は破損しているが、やや外方に短くのびるものと考えられる。外面はていねいなロクロなでを行う。

甕(61) 縦長の体部に、外上方へ直線的にのびる口縁部をもつ。口縁端部は、水平な面をなす。体部外面には、格子状タタキ板の痕跡が残り、同内面に残るあて具痕は、渦巻き状を呈する。破片のほとんどが2次的に熱を受けた状況であり、破片を焼き台として利用していたものと考えられる。

③C-3号窯

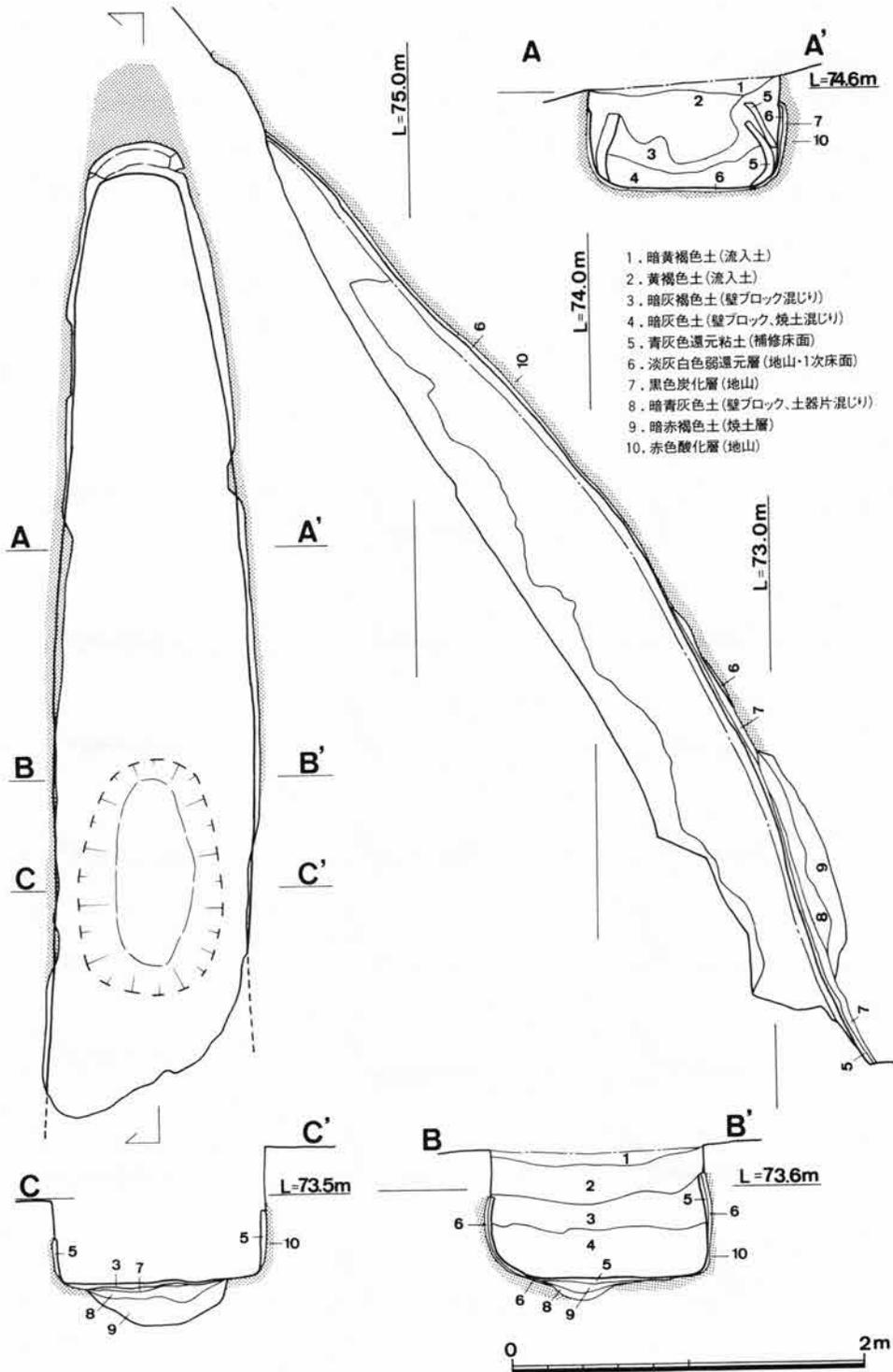
窯体の構造(第10図) C-3号窯は、2号窯の南約2mに位置する半地下式無段の窰窯である。2号窯と同様、崖面に窯体断面が露出したため発見に至った。床面及び側壁は粘土を貼り付けて窯体を構築するが、焼成部の途中から上方の床面には粘土を使用せず、花崗岩風化土の岩盤をそのまま利用している。

焚き口部分は、残存しないため現存全長は約5.5m・焼成部長約2.8m・同最大幅約1.2m・焼成部傾斜約35°を測る。ただし、現存する煙道部分の端から上方に酸化した焼土がのびているため、煙だし部分はさらに40cm程度上方にあったものと考えられる。また、3号窯でも2号窯と同様に、崖面下方にずり落ちた窯体の一部を確認したが、残りは非常に悪く、わずか10cm程度の幅である。燃焼部と焼成部の境付近には、舟底状土坑を設けている。

床面の平面形は、燃焼部から窯尻に向かい徐々に幅を減らし、細長い平面形を呈する。焼成部では一部に1次床面が残存しており、舟底状土坑掘削後に2枚目の床面は粘土を貼って形成している。

壁面は、ほぼ垂直に立ち上がっており、残りのよい部分で床面から約60cmが残存する。焼成部壁面は、部分的に2ないし3面が確認できる。

舟底状土坑は、窯体の主軸方向に長く、下方がやや膨らむ卵形の平面形を呈する。長軸約130cm・短軸約80cmを測る。土坑底面は緩やかにくぼみ、最も深い部分は、下端部より約1/4にあり、最終床面から約24cmを測る。土坑内の埋土は2層に分かれ、いずれも須恵器片・窯壁ブロックを含むほぼ同質の粗砂層である。色調は、上層が暗青灰色で、下層が暗赤褐色である。これは、上層が還元され、下層が酸化したためと考えられる。土坑上方で1次床面の一部と思われる焼土層が土坑壁面に沿って、わずかに落ち込んでいる状況が確認できた。このことは、1次床面の段階で、すでにある程度のくぼみをもつ構造であっ



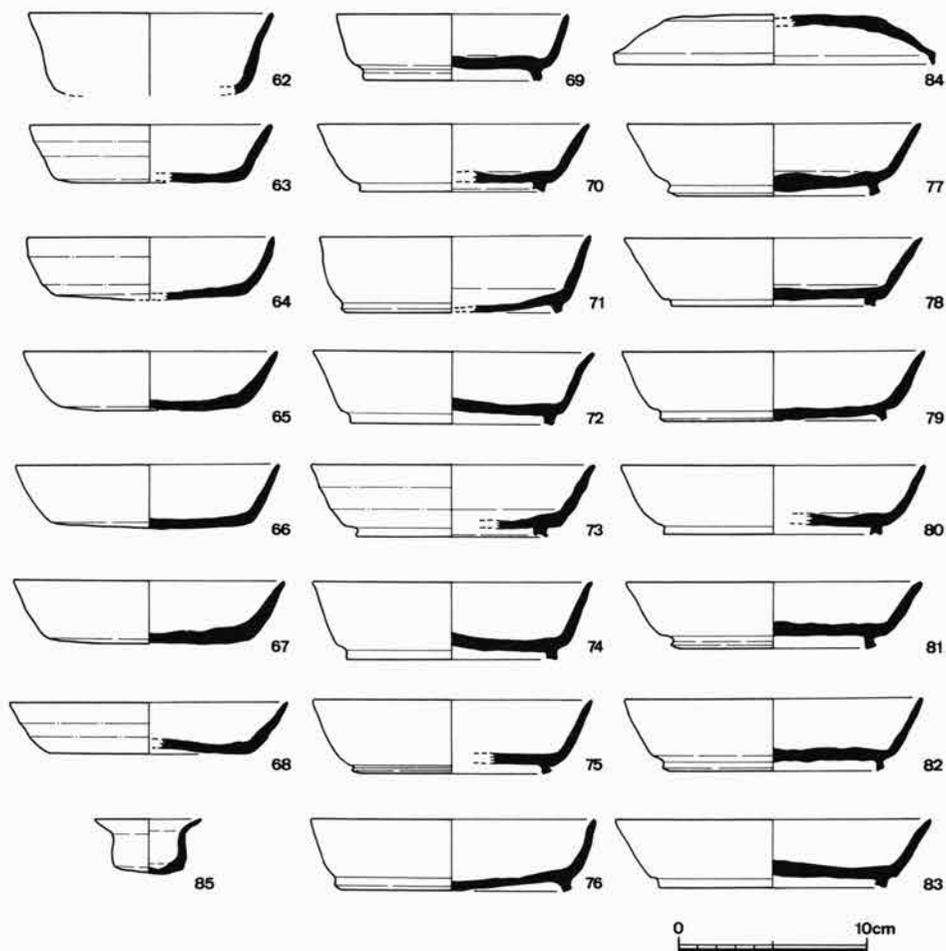
第10図 阿婆田C-3号窯窯体実測図 (S=1/40)

たものと考えられる。

出土須恵器(第11図) 窯体内からは、82個体の須恵器が出土した。器種構成としては、杯A・杯B・杯B蓋・壺・横瓶・甕がある。その構成比は、付表4-③に示すとおりであるが、床面の土器の大半が取り去られているため、本来の器種構成比とは考えられない。

杯A(62~68) 法量によって大きく2種に分けられる。A I；口径12.8~15cm・器高2.6~3.6cmとやや法量にばらつきがみられる。底部と体部の屈曲部は、丸みを帯びるものが主体である。A II；口径は13cmであるが、径高指数33を測る深いものである。1個体のみ出土している。

杯B(69~83) 法量にはややばらつきがみられる。口縁部は、外上方に向かい直線的にのびるものが主体であるが、やや外湾ぎみにのびるものも含まれる。高台の形態には、外



第11図 阿婆田C-3号窯出土須恵器実測図

方にふんばり内端面で接地するものと、ほぼ直立し端面がくぼむものの2通りが存在する。

蓋(84) やや高い笠形の天井部をもつタイプである。口縁部は、下方へ屈曲させる。

鉢E(85) 小形の鉢である。底部は平らで、体部はほぼ直立し、口縁部は外方に屈曲させて開いている。口径5.8cm・器高3.0cmを測る。内外面ともにナデ調整を行っている。

3号窯出土須恵器の胎土には、全般的に粗い長石粒が目立ち特徴的なものである。色調は青灰色で、焼成良好なものがほとんどである。

④C-4号窯

窯体の構造(第12図) 4号窯も、崖面に窯体断面が露出したため発見したものである。しかし、窯体の残りは悪く、焼成部と見られる部分が、わずかに2.5mだけ残存していた。

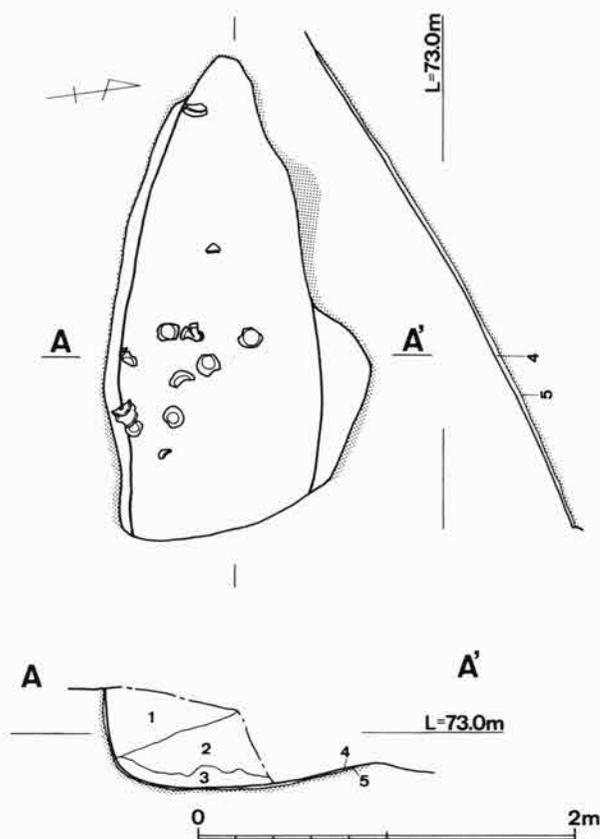
壁面も南側は、最大50cm立ち上がるが、北側については、ほとんど残っていない状況であった。床面及び壁面には粘土を貼り、窯体を構築する半地下式の窖窯と考えられる。現存焼成部の最大幅は約1.2m、同平均傾斜は32°を測る。また、床面自体も上方に行くにつれて、残存状況は悪くなっている。

出土須恵器(第14図) 窯体内からは、115個体の須恵器が出土した。器種構成としては、杯A・杯B・杯B蓋・壺・鉢C・鉢Dがある。

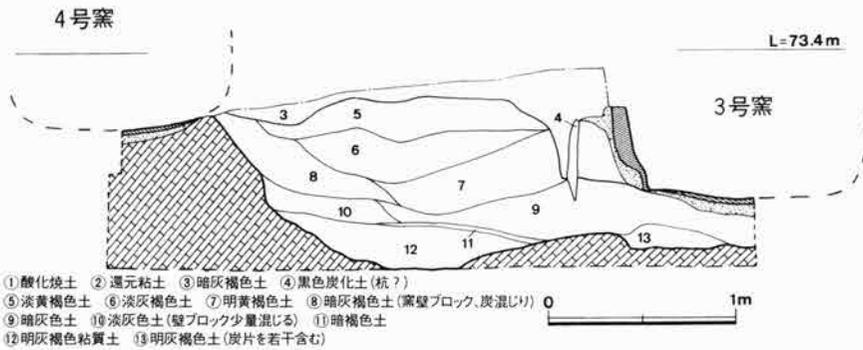
杯A(86) 底部は平らで、屈曲部はやや丸みを帯びており、口縁部は強めのナデ調整により外湾ぎみにのびる。口径は14~15cmに集中し、器高は3.5~4.5cmとややばらつきが見られる。

杯B(87~89) 法量にはかなりばらつきが見られるが、口径でみると14~16cmと17~18cmのところややまとまりを指摘できそうである。法量の大きいA I(88・89)と、小さいものA II(87)に分けられる。

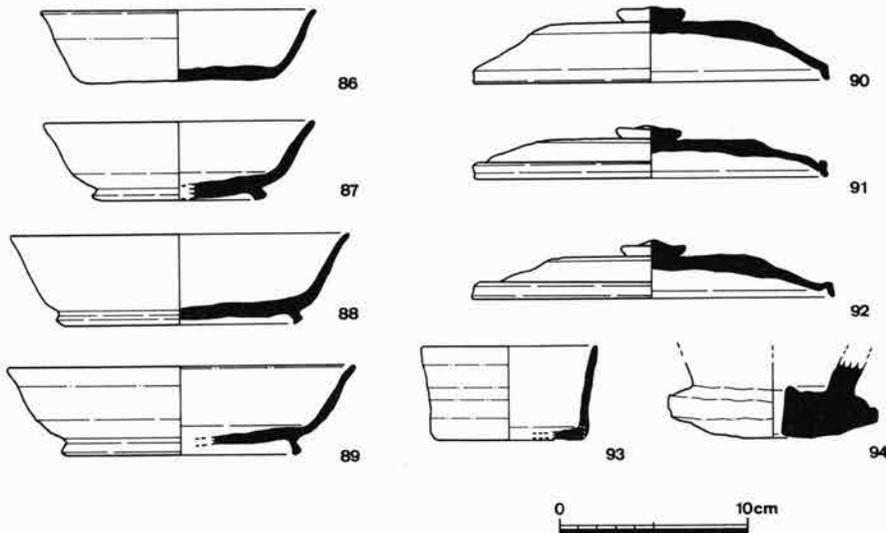
蓋(90~92) 口径は18~19



第12図 阿婆田C-4号窯窯体実測図 (S=1/40)



第13図 阿婆田C-3・4号窯間土層断面図



第14図 阿婆田C-4号窯出土須恵器実測図

cmに集中しており、これから見ると杯B Iに組み合うものである。形態的には、やや器高が高く笠形の天井部で口縁部を下方へ屈曲させるもの(90)と、低い目で天らな平井部で、口縁部を「Z」字状に折り曲げるもの(91・92)がある。

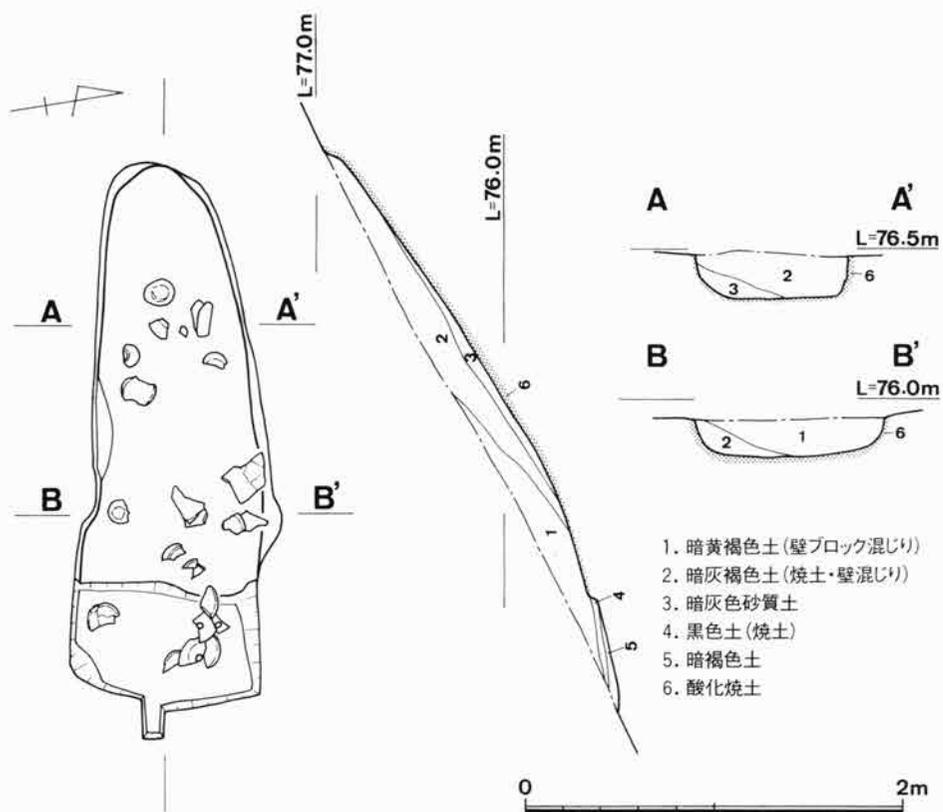
鉢C(94) すり鉢の底部である。底部のみの破片であるが、中央には円形の穴があけられ、底面は粗雑な手持ち削りを行う。体部は外上方に直線的にのびるようである。

鉢D(93) 底部は平らで、ほぼ直立する口縁部をもつ深い形態の鉢である。口径9.1cm・器高4.9cmを測る。1個体のみ出土した。

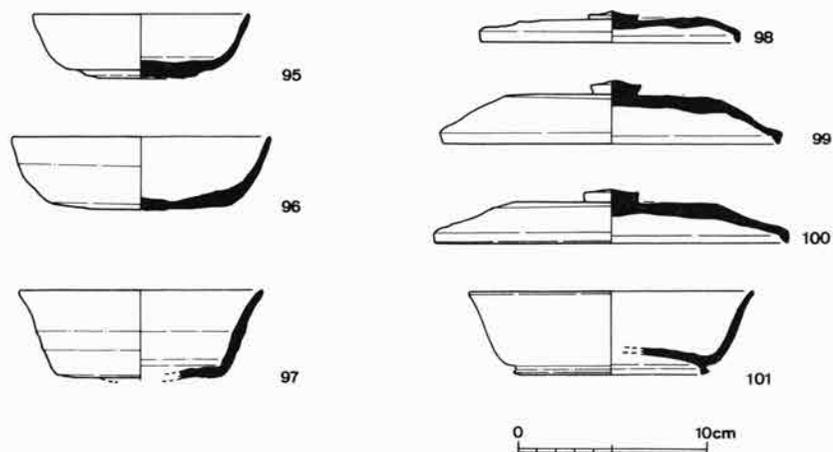
⑤C-5号墳

窯体の構造(第15図) 4号窯の上方約2.5mの地点で、確認した窯体の一部である。当初4号窯の続きの部分かとも考えたが、床面傾斜角及び窯体主軸において双方のつじつま

が合わず、前後関係をもつ別の窯体と考えるのが妥当である。現存残存長約2.2m・同最大幅約1mを測る。床面の傾斜は、下方から20cm程度のところで変化し、やや緩やかになっている。下方の傾斜角は約28°、上方は約31°を測る。



第15図 阿婆田C-5号窯体実測図 (S=1/40)



第16図 阿婆田C-5号窯出土須恵器実測図

床面及び壁面には粘土を用いず、地山をそのまま利用している。また、各壁ともに、還元されておらず、赤褐色に酸化している程度であり、還元焼成されていない。このことは、窯体内部に残された須恵器のほとんどが、軟質で灰白色をすることからも裏付けられる状況である。

出土須恵器(第16図) 窯体内からは21個体の須恵器が出土している。器種構成としては、杯A・杯B・杯B蓋・甕がある。

杯A(95~97) 形態的には、底部と体部の境が丸みを帯び体部は内湾ぎみにのびるもの(95・96)と、平らな底部で体部が外反ぎみにのびるもの(97)の2形態がある。前者は、法量により2種に分けられる。

杯B(101) 1点のみ図化し得た。やや焼けひずんでいるが、口縁部は外反ぎみにのび、高台は、外方にふんばり内端面で接地する。口径15cm・器高約4.5cmを測る。

蓋(98~100) 法量により口径14cm前後のもの(98)と18cm前後のもの(100・101)の2種に分けられる。形態は、やや器高が高く笠形の天井部で口縁端部は下方へ折り曲げる。つまみの形状は、扁平で稜の鋭い擬宝珠様を呈する。

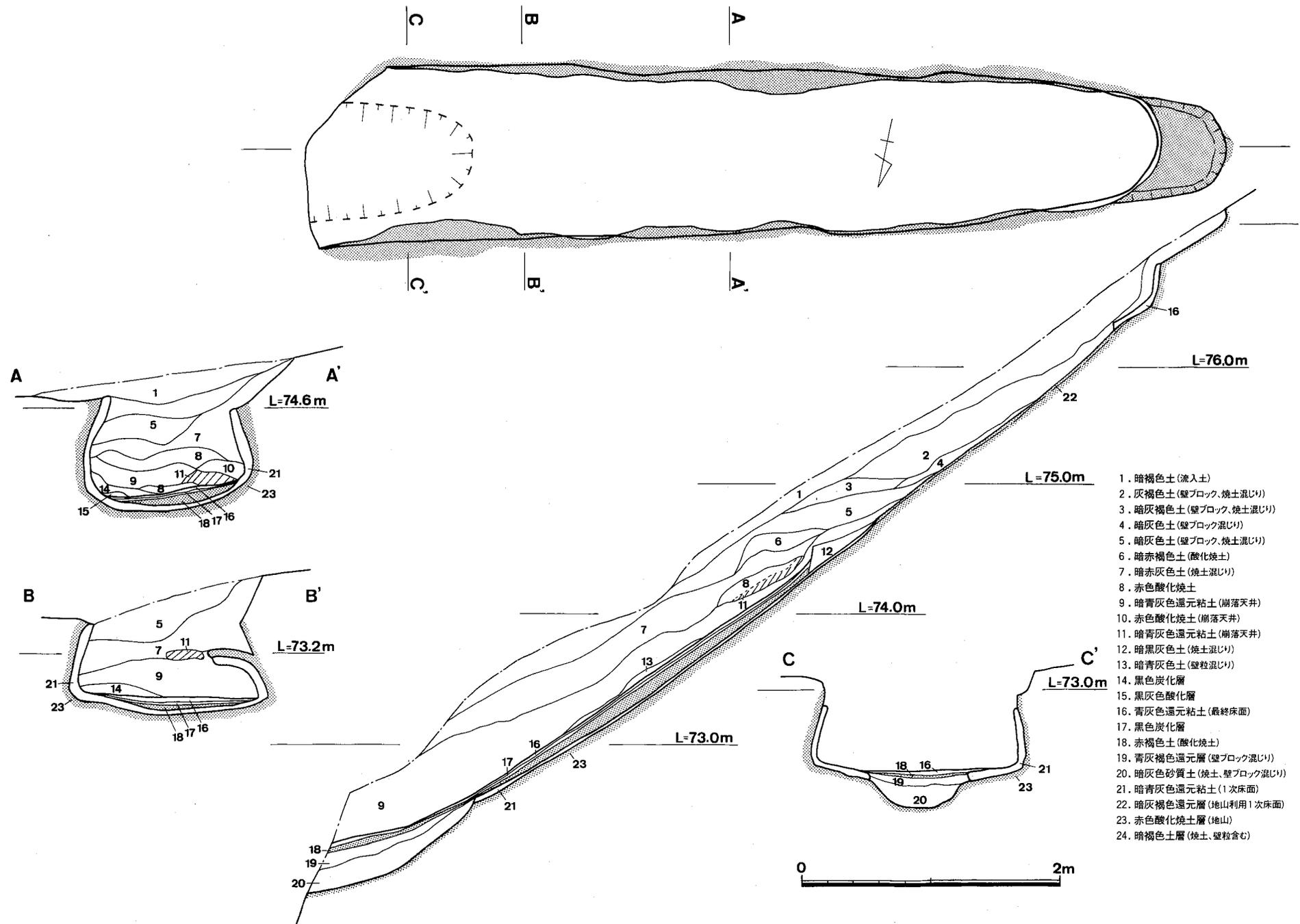
⑥C-6号窯

窯体の構造(第17図) 4号窯の南約1.5mの地点に位置する地下式無段の窖窯である。燃焼部前面は、すでに流失しているが、今回調査を行ったもののなかでは最も残りがよい。現存全長約6.7m・焼成部長約3.8m・同最大幅約1.4m・同平均傾斜角33°を測る。焼成部壁面は床面から最大90cm残っている部分がある。

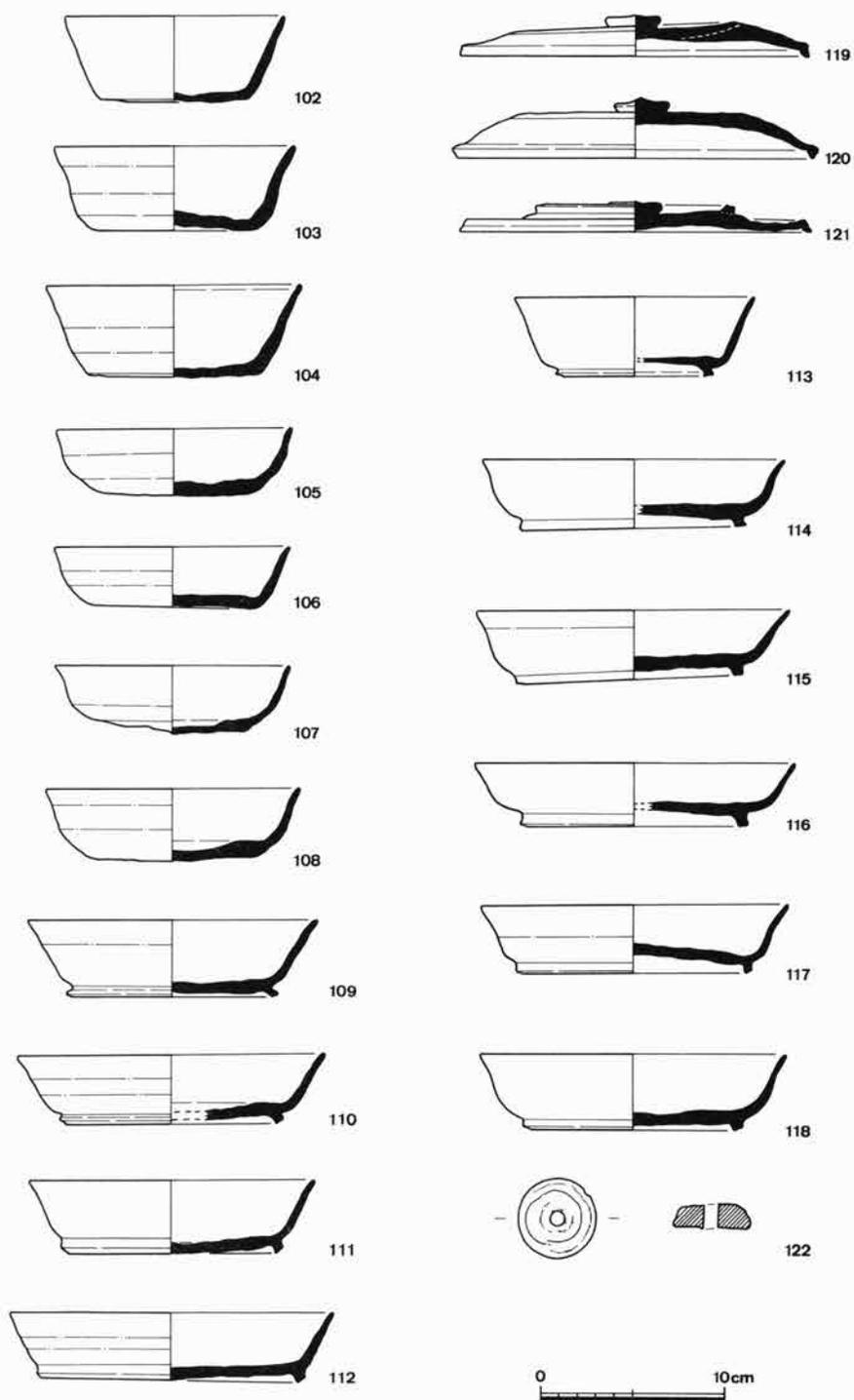
窯体主軸は、他の5基と異なり、焚き口方向をやや北に振る形となる。床面及び壁面にはササ入り粘土を貼り付けて窯体を構築しているが、煙道部床面には粘土を使用せず、地山を直接床面として利用している。床面は、ほぼ平坦で焼成部では2面が確認できる。

当初床面には、粘土を用いず花崗岩風化土の地山を利用している。このため、地山が還元焼成され2cm程度灰白色になり、変質している。2次床面は、1次床面の上に6cm程度焼土混じりの土を敷き、その上に厚さ2~3cm程度に粘土を貼って形成している。壁面は、部分的に補修を行った痕跡が認められるが、全面に及ぶものではない。特に燃焼部に近い部分では手で粘土をなで付けた痕跡がよく残っている。また、窯尻部でも床面及び壁面に粘土を貼り足して補修している。

窯尻部分の床面は、屈曲して上方に25cm程度立ち上がっている。これより上部の構造は不明であるが、上位の地山面が酸化して赤色を呈していることから、いったん立ち上がった煙道部が、再び角度を変えて斜め上方に引かれる構造をとっていたものと復原できる。ここでも3号窯と同様に、焼成部と燃焼部の境に、舟底状土坑を設けている。下方が流失



第17図 阿婆田C-6号窯窯体実測図 (S=1/40)



第18図 阿婆田C-6号窯出土須恵器実測図

しているため全体の形状は不明であるが、窯体主軸方向に長い長楕円形の平面形を呈するものと考えられる。現存全長66cm・深さ18cmを測る。土坑底面は、熱を受け地山が1cm程度酸化して赤色を呈する。また、土坑内埋土は2次床面下に窯壁片・須恵器片を含む砂質土層が堆積している。2次床面に近い上方は青灰色を呈している。

この舟底状土坑が、築窯当初から設けられていたかどうかを検討するのはむずかしいが、3号窯でも確認したように、土坑内埋土中には焼土とともに窯壁片、須恵器片が混じっており、土坑設置以前に焼成が行われていることは確実である。また、土坑上方において土坑底面に沿うような状態で、当初床面の一部が傾斜を持ち落ち込んでおり、築窯当初からこの土坑の部分は、ある程度くぼんでいた可能性が高い。

出土須恵器(第18図) 窯体内からは、137個体の須恵器が出土した。器種構成としては、杯A・杯B・杯B蓋・壺・鉢・甕・紡錘車がある。構成比は付表4-④のとおりである。先述のとおり、窯体焼成部下半及び燃烧部は床面を2面確認したが、両床面間のレベル差は最大でも5cm程度と小さく、1次床面に伴う確実な遺物の抽出は困難であった。

杯A(102~108) 法量・形態により2種に分けられる。AⅠ；口径は14cm前後で径高指数36前後の深い形態である。底部と体部の境は明瞭に屈曲し、口縁部は外上方に直線的にのびる(102~104)。AⅡ；口径は13~14cm前後であり、法量にはややばらつきが見られる(105~108)。底部と体部の境は、2点で屈曲して内湾ぎみにのび、口縁端部はやや外反する。数量的には、AⅡが主体となる。

杯B(109~118) 法量により2種に分けられる。BⅠ；口径にはややばらつきがみられ、16~18cm前後である(109~112・114~118)。高台の形態は、外方にふんばり、内端面で接地するものが大半である。口縁部は、やや外反する。BⅡ；口径13cmで径高指数は33とやや深い形態である。高台はやや外方にふんばり、内端辺で接地する(113)。

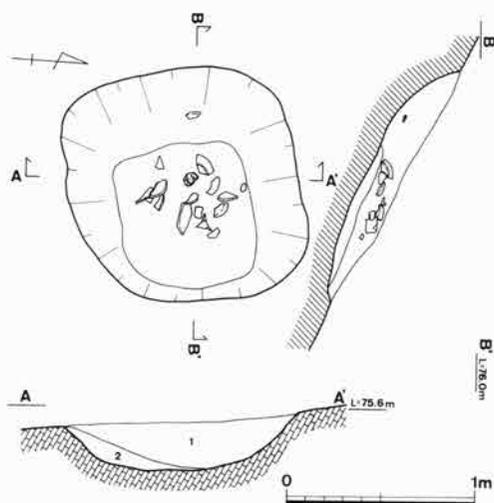
蓋(119~121) 口径18~19cmで杯BⅠに組み合わせるものが主体である。器高はやや高く笠形で、口縁端部は下方へ折り曲げる。つまみは、偏平で丸みを帯びた擬宝珠様を呈する。121は形態が異なり、天井部に高台状の粘土帯を貼り付けるタイプである。

紡錘車(122) 平面は円形で、中央部に径約0.8cmの穿孔をもつ。断面の形状は、角の丸い台形を呈する。直径約5.0cm・最大幅約1.6cmを測る。

⑦土坑SK01(第19・20図)

5号窯の南約1mで、標高75.5m前後の斜面に位置する浅い土坑である。平面形は、いびつな隅丸方形で、中央部での深さ約25cmを測る。土坑埋土中には、杯B・杯B蓋等の須恵器片が土坑内に落ち込んだような状況で出土した。底部及び壁面が熱を受けた痕跡は確認できない。

出土須恵器のうち蓋杯それぞれ1点ずつを図化した(第20図123・124)。123は、杯B蓋である。復原口径約17.7cmを測る。器高はやや高く、口縁端部を下方へ短く折り曲げる。124は、杯Bである。口径16.3cm・器高4.0cmを測る。高台は短く外方へふんばり、内端面で接地する。

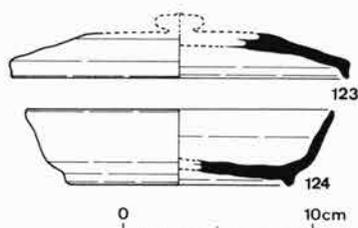


第19図 土坑S K01実測図

4. まとめ

①遺構について

今回調査を行った6基の窯跡は、先述のように窯体のみ調査であり、近接しているにもかかわらず、操業の前後関係の判明するような灰原の堆積状況が不明であった。そこで、3・4号窯の間に堆積する流土を手掛かりに、各窯体の位置関係もふまえ、築窯順位について可能な範囲で検討を行う(第13図)。



第20図 土坑S K01出土須恵器実測図

まず、3号窯と4号窯の間に存在する流土と窯体の関係であるが、この土層中には、窯壁の破片や、須恵器片等が含まれていたが、須恵器片は細片が多く、どの窯体に伴うものか断定することはむずかしい。各土層の堆積状況を見ると、第9層が3号窯窯体床面下に堆積している点、第5～7層が3号窯窯体構築に伴うものと見られる第3層に切られている点から、第5～13層は3号窯構築以前の段階に堆積したものと判断できる。

4号窯の残存状況が悪いため、これら各土層と4号窯との直接的な関連が認められないが、4号窯南側壁面を復原想定すると壁面裏側に存在することとなり、少なくとも4号窯築造以前に堆積していなければならない。また、この地点より前面で4号窯窯体下に流土が堆積している状況を確認しており、4号窯築造以前と判断できる。ただ、第3層については3号窯築造時に伴うものであり、状況としては、4号窯南側壁面を崩しているものと判断できる。また、3号窯北側壁面の裏側には杭状のものが炭化した状況で確認できた。壁面のささえ・強化を図ったものかと考える。以上の点から、流土→4号窯→3号窯という順位が確認できた。

4号窯と上方にある5号窯の関係については、当初同一の窯体である可能性も考えたが、床面の傾斜角度あるいは、窯体主軸にズレがある点から見ても前後関係を持つ別の窯体であると判断できる。両窯体の床面の傾斜角度について見ると、上位にある5号窯床面傾斜が4号窯床面傾斜より緩いため、直接的な切り合い等は認められないものの、5号窯を取り崩した後でないとして4号窯の築造は不可能である。このため5号窯→4号窯という前後関係が想定できる。

以上の点から見て、

5号窯→4号窯→3号窯

という築窯順位が遺構の上で確認できた。しかし、その他の1・2・6号窯については、遺構の上からは順位を検討することができない。

また、今回調査を行った6基のうち窯体残存状況のよかった3・6号窯の2基で同様な形態をとる「舟底状土坑」を確認した。京都府内でも加茂町西瀬窯(8世紀中～後半)・舞鶴市シゲツ窯(7世紀後半)、さらに弥栄町遠所窯跡群中(8世紀)でも確認されている。この種の施設については、機能が十分明らかにされていない。今回の調査では、特にこの土坑のある部分が、築窯当初よりくぼんでいた可能性の高いことを指摘し得た。土坑は、最終操業以前にさらに深く掘りくぼめられ、その上に最終床面が貼り直されている。この掘り直しは、焼成土器・灰等のかきだしに伴うものと考えられるが、築窯当初から存在するならば、さらに別の機能を考えなければならない。現段階では、今回の成果から見て、窯体構築技術に係わる問題であるとの見通しをもち、今後の検討課題としたい。

②須恵器について

今回の調査では、窯体だけの調査となった。このため、出土した須恵器も1・2・6号窯については、比較的残存状況がよかったが、その他については操業時点での器種組成をどの程度示すものか明確ではない。しかし、窯体内出土土器については、すべての破片をチェックした結果、器種構成上、1・2号窯にのみ皿A・皿Bが含まれており、また、壺・鉢が一定の割合を占めている傾向は指摘できる。

このような資料的制約をふまえた上で、窯体内床面出土須恵器の中で、特に各窯ともに出土している杯Bの型式変化をもとにして、先に検討した窯体の前後関係を援用し、窯毎の出土須恵器についての型式の変遷と画期をあとずけてみる。現時点では、6基の窯体を大きく3期に分けて捉えられるものと考えている(付表6)。

I期

5号窯・4号窯・6号窯の3基の窯をI期とする。この段階では、数量的に主体となる法量の杯Bは大形で、いずれの窯でも口径17～18cmを測る。形態的には、杯底部と体部

の境は鈍く屈曲して丸みを帯びている。口縁部も丸みを帯びて外反し、緩い「S」字状を呈する。高台の形態は、4・5号窯では比較的高く、外方に強くふんばって内端辺で接地する。法量は、両窯ともにほぼ2法量存在するようである(付表5-⑥・⑦)。6号窯では、杯Bの器高が低いものが主体となる。高台は、4・5号窯に比べ短く低いものが多い。高台端部は、内端辺で接地するものが主体であるが、114のように高台端面で接地するものもある。

蓋については、器高の高いものが多く、天井部に偏平な擬宝珠様のつまみをもつ。口縁端部の形態は、下方へ短く折り返すが、特に4号窯の中には91のようにいったん上方につまみ上げてから下方へ折り返す特徴的な形態のものが含まれる。杯Aについても全体に丸みを帯びるものが多く、口縁部も外反する傾向が認められる。6号窯でも丸みを帯びるAⅡが主体である。

このほか、この段階の3基の窯の製品については、全体に調整が荒く、胎土についても微砂粒がめだち、やや粗いものである。

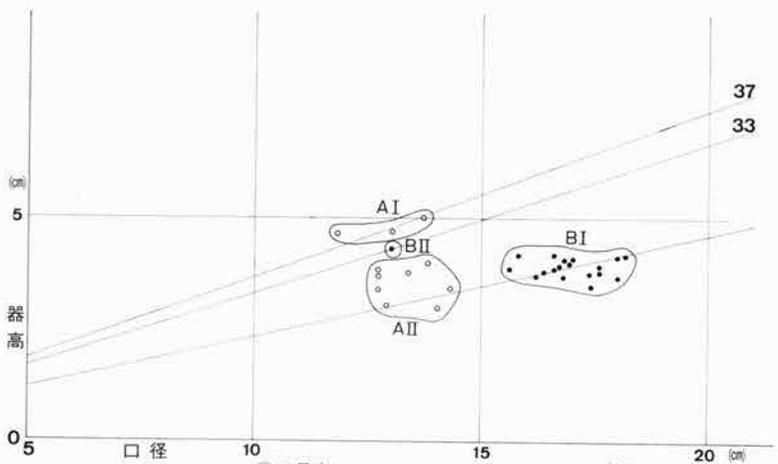
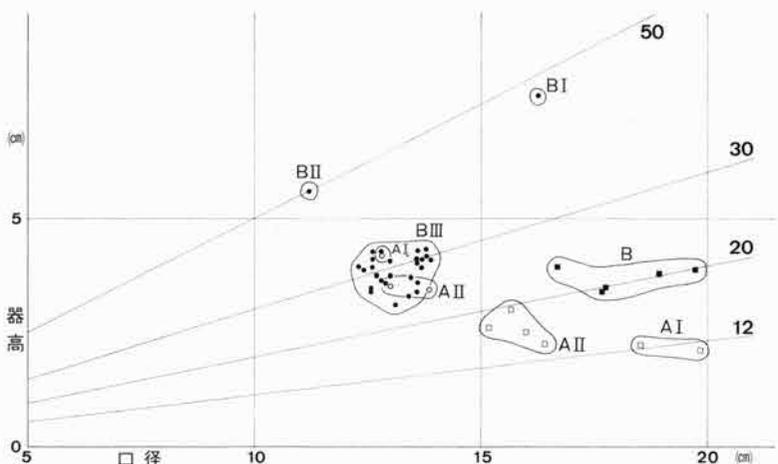
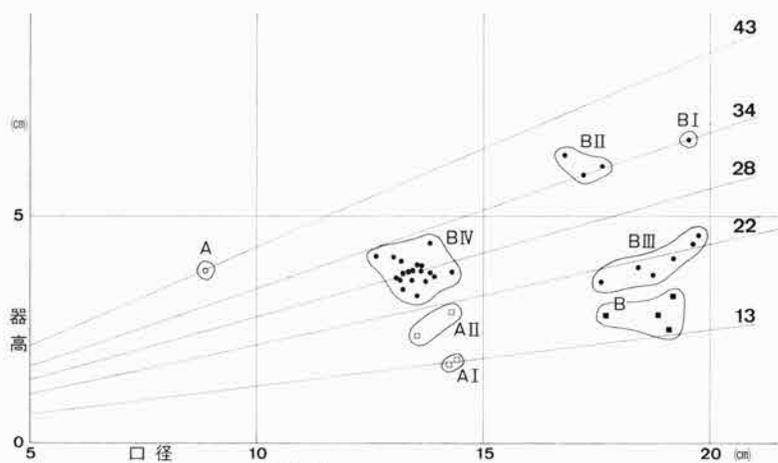
II期

3号窯をII期とする。I期に比べて法量にばらつきが見られるものの、杯Bの法量は口径15~16cmに中心があり、若干縮小する(付表5-⑤^(注22))。底部と体部の境は、やや明瞭に屈曲し、口縁部もほとんど外反せず直線的にのびる。高台の形態は、短く内端辺で接地するものと端面がくぼみ、面で接地するものがある。杯Aは、丸みを帯びるものも存在するが、底部と体部の境が明瞭に屈曲するものが主体となる。3号窯の製品は特に胎土が特徴的であり、1~2mm大の白色砂粒(長石粒)が多く含まれる。

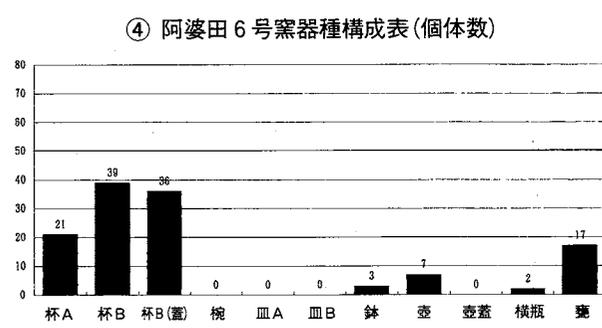
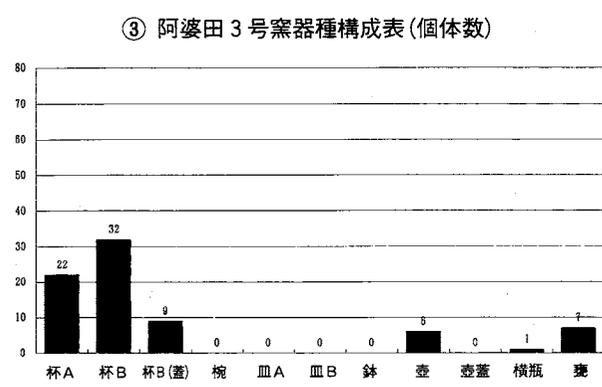
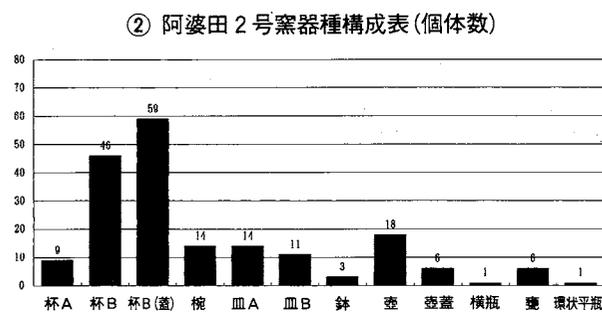
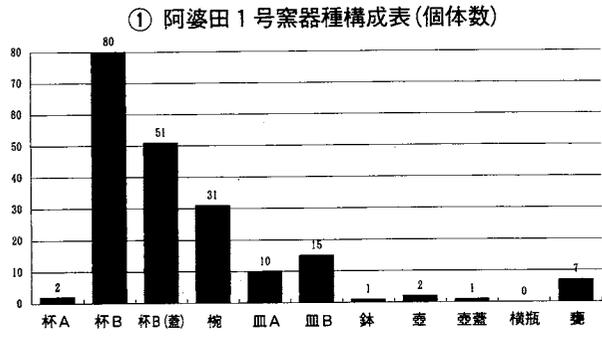
III期

2・1号窯の2基の窯をIII期とする。杯Bは、3ないし4つの法量に分化している。そのなかでも両窯ともに主体となる法量は、口径13~14cmとほぼ同法量で、II期に比べさらに縮小している。2号窯の杯Bは3法量に分かれ(付表3-②、付表5-③)、このうちBⅠとBⅡは、径高指数がほぼ等しく、法量による規格品の出現が認められる。1号窯でも4法量が確認でき、BⅠ・BⅡは、ほぼ同じ径高指数を示す(付表3-①、付表5-①)。形態的には、底部と体部の境は明瞭で、体部はむしろ緩やかに内湾する傾向が認められる。高台は、短くやや外方にふんばるが、端面で接地するものが大半である。1号窯では、高台端部を外方向につまみだすもの(11・13)が主体となる。蓋は、2号窯ではやや器高が高く、丸みを帯びた方柱状のつまみをもつものが主体である。口縁部は「Z」字状になる傾向がある。1号窯では、器高が低く、ほとんど偏平になり、つまみも丸みを帯びた偏平なものになる。この段階の製品は両窯ともに、ていねいなつくりのものが多く、胎土も精良であ

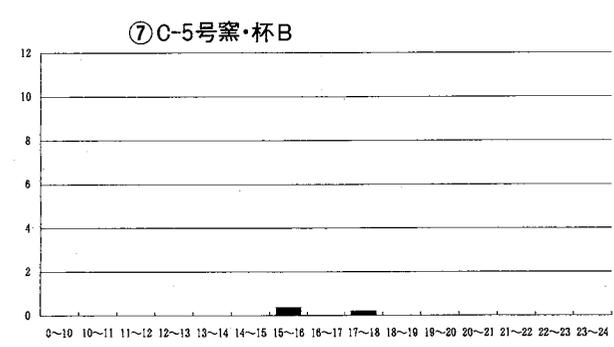
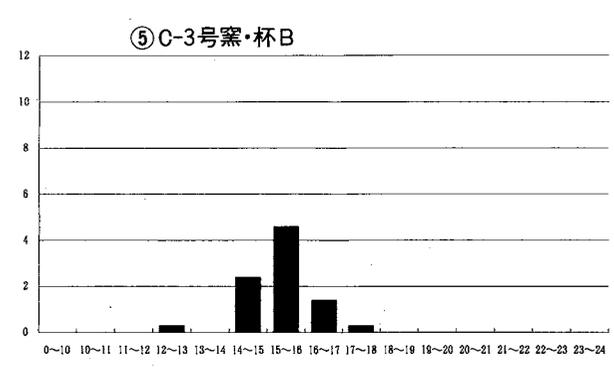
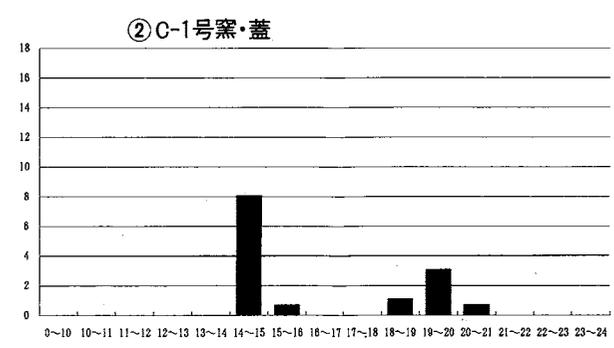
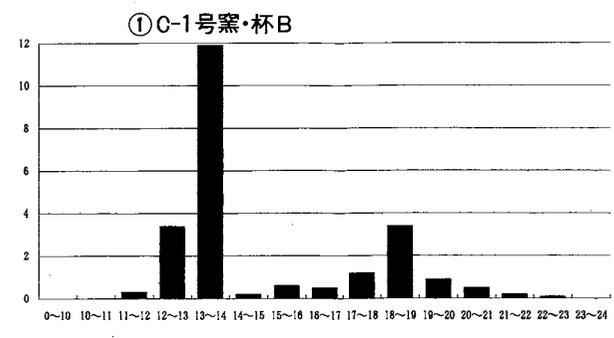
付表3 杯・皿法量分布表



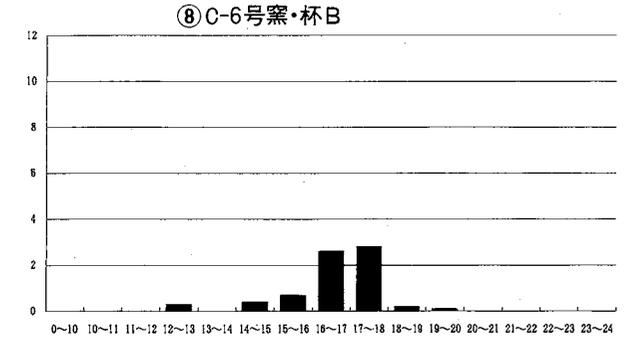
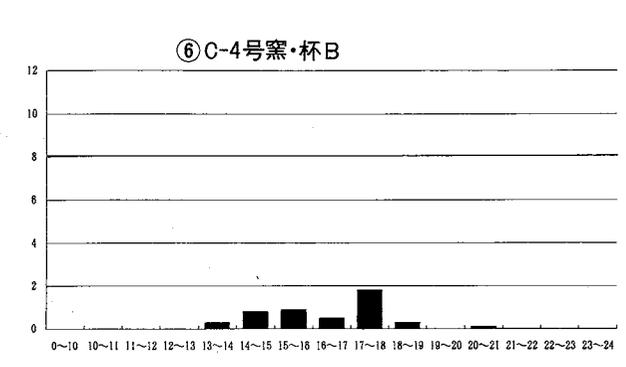
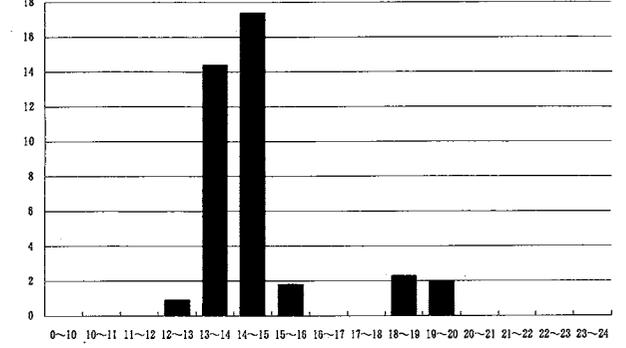
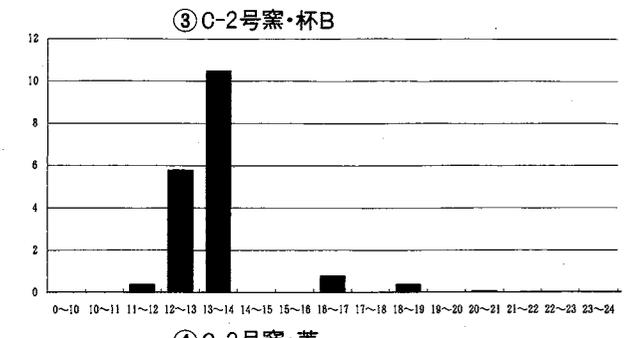
● 杯B
○ 杯A
■ 皿B
□ 皿A



付表4 窯体内出土須恵器器種構成表

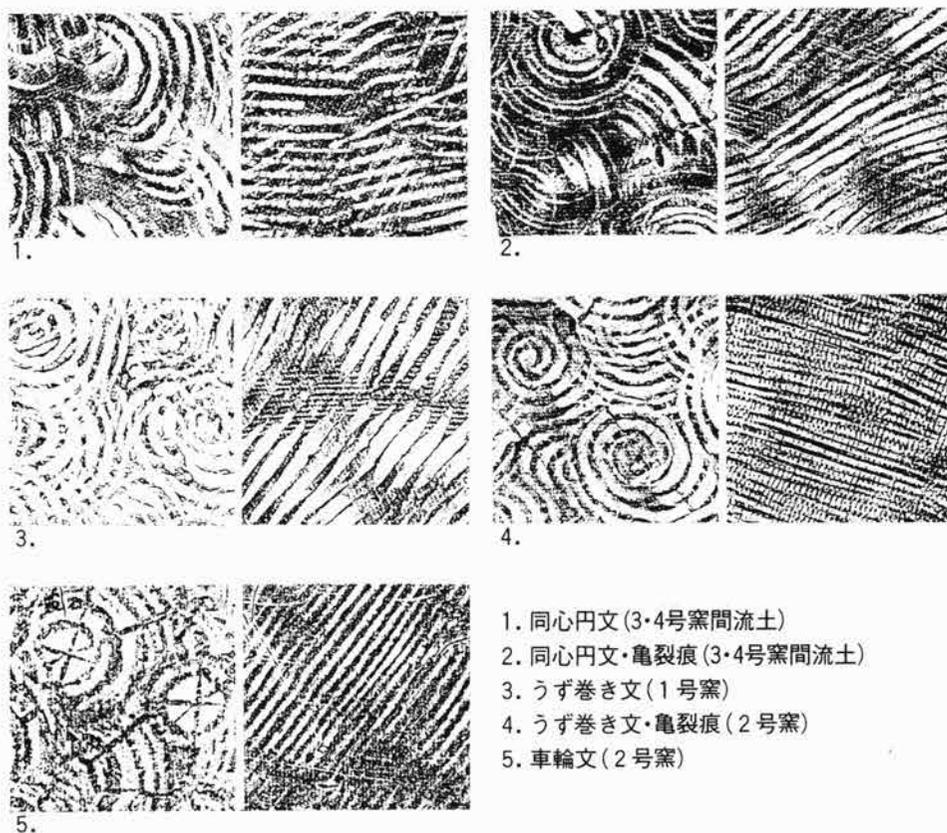


付表5 口径別個体数(杯B・口縁部計測法)



阿婆田 I期	5号窯						
	4号窯						
	6号窯						
阿婆田 II期	3号窯						
阿婆田 III期	2号窯						
	1号窯						

付表6 阿婆田窯跡群出土須恵器編年表(試案)



1. 同心円文(3・4号窯間流土)
2. 同心円文・亀裂痕(3・4号窯間流土)
3. うず巻き文(1号窯)
4. うず巻き文・亀裂痕(2号窯)
5. 車輪文(2号窯)

第21図 甕体部拓影(S=1/2)

る。特にⅢ期においては、前段階に比べ法量による器種分化が明瞭になり、加えて皿A・皿B・椀等の新器種の出現など、食膳具の構成に大きな変化が認められるとともに、壺・甕・鉢等多彩な器種が加わり、前段階とは大きな画期が認められる。

以上、主に杯Bの形態変化をもとにして、大きく3期にわけてみた。型式変化の方向としては、まず主体となる法量の縮小傾向がある。Ⅲ期では、3ないし4種に法量分化し、数量的に主体となるものの法量が最も小さく、大形で浅い形態や、深い形態のものも出現している。また、高台の形態では、高くふんばり、内端辺で接地するものから、短く端面で接地するものへ変化する。しかし、各期の間は連続せず、ある程度の断絶性を認め得る。特にⅡ期からⅢ期の間では顕著であり、土器の型式変化に加え、器種組成上の変化も伴っており、大きな画期として設定することが可能である。

この点についてはさらに、製作技術等の側面から検討を行うことで、より明確にし得るものと考えられるが、今後の検討課題としておく。

最後に、阿婆田窯の操業時期についてであるが、丹後地域内での地域色を明らかにした

上での編年が確立されていない現段階では、明確にすることはむずかしい。このことをふまえた上で、敢えて消費地である平城京での編年と対応させるなら、阿婆田Ⅰ期が平城Ⅱに、阿婆田Ⅲ期は平城Ⅲ～Ⅳに近い様相であるものと考えられる。^(注23) 歴年代では、8世紀初頭から第3四半期頃と見ることができよう。

③甕等のタタキ痕について(第21図)

各窯から少量ずつではあるが、甕片が出土している。大半は、2次的な熱変化が認められるため、焼き台として使用されたものと考えられる。このなかで、特に内面に認められる当て具痕に特殊なものが存在する。ここでは、確認できたパターンを抽出し分類を行う。

(1)の外表面は平行線文である。原体の陽刻部分の幅は2mm前後であり、これに直交する方向に木目の痕跡がわずかに観察できる。内表面は、同心円文である。

(2)の外表面は、平行線文である。原体陽刻部分は、真ん中が太く両ほそりで、最大幅は4mmである。平行線とは斜め方向に細すじの木目痕が認められる。内表面は、渦巻き状の文様である。中心から見て左回りで陽刻される。平行した柾目状の木目痕がわずかに確認できる。

(3)の外表面は細すじの平行線文である。原体陽刻部分の幅は、約2mmである。内表面はいわゆる「車輪文」と呼ばれるものである。同心円の中心に「⊗」の文様があり、このうち隣り合った2本が放射線状に外方向にのびている。

(4)の外表面は、平行線文である。陽刻部分の幅は約3mmである。平行線文の斜め方向に木目の痕跡がはしる。内表面は同心円文であるが、中心から2重目までは原体陽刻の幅が2mm程度で、3重目からは幅1mmと細くなっている。また、中心から外方に向かって1条の線がのびるが、線ののびが整っていないため木製の原体に生じた「亀裂痕」と考えられる。

(5)の外表面は、平行線文であるが、直交方向に細すじの木目痕が明瞭に残っている。内表面は、(2)と同種の渦巻き文であるが、中心から1条の「亀裂痕」が残る。

以上が、今回の調査で確認した、タタキ痕のパターンである。特に内表面の特殊な当て具痕については、横山浩一氏が指摘したように、須恵器の流通状況を追及する上で重要な視点になり得るものである。^(注24) 今回は、生産地で確認できた点で特に重要である。今後、より注意して消費地での状況を確認していくことによって、阿婆田窯の製品の流通状況を解明する上で大きな手掛かりとなるものである。今後、周辺消費地での確認を行う必要がある。

以上のように、今回の調査では、奈良時代の丹後地域における須恵器生産の実態について、数多くの知見を得ることができた。特に、操業期間中に段階的な画期が存在する点を明らかにでき、その歴史的背景を考える上で重要な視点を提供した。先学諸氏が指摘され

るように、須恵器生産はいくつかの画期を経て地域への拡散・展開をみせる。今回調査を行った阿婆田窯跡群でもその成立が8世紀初頭にあり、生産上の画期を8世紀第3四半世紀頃とみると、その「成立」と「画期」を丹後分国あるいは、国分僧寺・国分尼寺の造営といった律令国家の諸政策に関連するものと想定できるのではないか。丹後地域においても8世紀以降須恵器窯が増加する傾向が認められ、阿婆田窯跡群の諸画期もこれら周辺生産地の動向と連動しているものと考えられる。

(森 正)



調 査 風 景

(2) 大田南・下後古墳群

1. 位置と環境

大田南・下後古墳群は、京都府竹野郡弥栄町大字和田野・小字猪ノ蔵に所在する。大田南・下後古墳群は、丹後半島最大の河川である竹野川中流域西岸に展開する尾根上に分布する。古墳群の分布する丘陵は中郡盆地と竹野郡盆地の狭隘部に相当し、同一丘陵上には、太田古墳群・水晶山古墳群など総数68基を数える古墳が分布している。今回、調査の対象となった下後2・3・5号墳はこの丘陵の北端に位置し、大田南古墳群内の試掘地は竹野川から尾根をひとつ隔てた谷部に向い、北へ派生する支尾根上に位置する。

ここでは、大田南・下後古墳群などの立地する丘陵の土地利用のあり方を中心に、竹野川流域の遺跡について概観する。

この丘陵の土地利用は弥生時代後期から開始される。1989年調査の太田4号墳^(注25)では弥生後期末葉の台状墓の存在が確認されている。また、隣接する丘陵からも弥生土器を表採しており、丘陵一帯が墳墓として利用されていた可能性が示唆される。弥生時代の墳墓として竹野川流域では大宮町帯城墳墓群・丹後町大山墳墓群などが知られる。

古墳時代は前期から後期をとおして墳墓が築造される。前期では、前期前葉から中頃の築造と考えられる大田南2号墳^(注26)が存在する。一辺約20mの不整形な方墳であり、遺物として、土師器・鉄器・画文帯環状乳神獣鏡が出土している。竹野川流域では前期後葉の峰山町カジャ古墳^(注27)をはじめ、丹後町神明山古墳^(注28)などの大型墳が築造されるが、これらに先行する古墳の調査例として注目される。

古墳時代中期では今回調査の下後古墳群をあげることができる。竹野川流域では前期以来の大型前方後円墳の築造が衰退し、丹後町産土山古墳^(注29)・弥栄町ニゴレ古墳^(注30)など中規模古墳が首長墓クラスと考えられる。また、同時期の小規模古墳として弥栄町普甲古墳群^(注31)などが調査されている。

後期になると、太田2号墳^(注32)・4号墳・下後1号墳など木棺直葬形態をとる古墳が丘陵に築造される。2号墳は直径34mを測る円墳であり、埴輪列をめぐらす。この時期の古墳としては大型に属する。同時期の大型墳としては峰山町大耳尾古墳群^(注33)があげられる。出土遺物として多量の須恵器のほか、馬具・玉類・武器類が存在する。小規模古墳の調査例も近年、飛躍的な増加をみせており、横穴式石室を内部主体とする群集積に先行する古墳群として注意される。竹野川流域では弥栄町遠所古墳群^(注34)・大宮町小池古墳群などを代表的なものとしてあげられる。また、遠所古墳群や弥栄町新ヶ尾東古墳群^(注35)では木棺直葬墳に後続す

る古墳の内部主体に堅穴系横口式石室が採用されていることも注意される。その他、畿内的な横穴式石室墳として、丹後町高山^(注36)・峰山町桃谷^(注37)古墳などを代表的なものとしてあげることができるが、この丘陵では現在、横穴式石室の存在は確認できない。



第22図 大田南・下後古墳群周辺主要古墳時代遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1. 大田南古墳群 | 2. 下後古墳群 | 3. 太田古墳群 | 4. 湧田山古墳群 | 5. 大耳尾古墳群 |
| 6. カジャ古墳 | 7. 桃山古墳群 | 8. 新ヶ尾東古墳群 | 9. 黒部銚子山古墳 | 10. 普甲古墳群 |
| 11. ニゴレ古墳 | 12. 遠所古墳群 | 13. 坂野遺跡 | 14. 奈具岡遺跡 | 15. 柿のさが遺跡 |
| 16. 古殿遺跡 | | | | |



第23図 大田南・下後古墳群分布図

1. 太田古墳群 2. 大田南古墳群 3. 下後古墳群 4. 古天皇古墳群 5. 水晶山古墳群
6. 中尾古墳群 7. 矢田城跡 8. 柿のさが遺跡

2. 調査経過

調査は、和田野団地造成工事に伴い先立って行ったものである。

大田南古墳群では、造成工事に伴う道路建設、及びのり切り工事にかかるA～Eの5地点の不自然な平坦面・古墳状隆起について、下後古墳群では昨年度、道路工事にかかる1・4号墳を調査した。今回は沈砂池工事にかかる2・3・5号墳を調査することとなり、大田南古墳群では試掘調査を、下後古墳群では全面発掘を行った。

現地調査は、樹木伐採より開始し、伐採の終了した平成2年4月18日から、地形測量(100分の1、25cm等高線)を行った。掘削作業は伐採の終了した大田南古墳群A地点からE地点へ順次行った。その結果、大田南古墳群ではA～D地点は自然地形であることが明らかになり、E地点では遺物が出土したものの、顕著な遺構を確認することはできなかった。下後古墳群については当初、2・3号墳2基のみを古墳と考えていたが、調査を進めるうちに、新たに埋葬施設を確認したため5号墳として新たに番号を付した。3・5号墳で埋葬施設を確認することができたが、出土遺物が乏しく明確な年代を確定することはできなかった。2号墳については削平が著しく、埋葬施設を確認することはできなかった。遺構実測・写真撮影はその都度行い、平成2年8月4日に関係者に対し説明会を行い、同日すべての発掘器材を撤収し調査を終了した。調査面積は大田南古墳群で約200㎡、下後古墳群では周辺の調査もあわせて行ったため約1,000㎡になった。

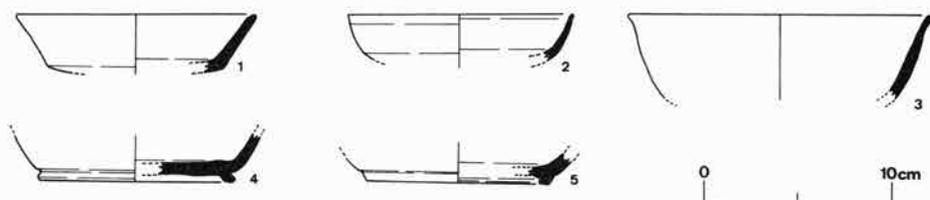
3. 調査概要

①大田南古墳群(第23図) 大田南古墳群では前述のように造成範囲にかかるA～E計5地点の不自然な平坦面、古墳状隆起について試掘調査を実施した。調査前の状況及び調査結果については付表7に示すとおりである。A～D地点では、遺構・遺物を検出することはできず、また、トレンチ断面観察の結果からも自然地形であることが判明した。

E地点は標高約90m付近に位置する東西約4m×南北約20m程度のいびつな平坦面であ

付表7 大田南古墳群調査結果一覧表

調査地	調査前の状況	遺構・遺物など
A地点	平坦面	遺構・遺物なし
B地点	古墳状隆起	遺構・遺物なし
C地点	古墳状隆起	遺構・遺物なし
D地点	平坦面	遺構・遺物なし
E地点	平坦面	遺構削平、土師器・須恵器・鉄釘出土



第24図 大田南古墳群E地点出土遺物実測図

る。平地との比高差は約70mを測り、眺望は非常によく弥栄町全域を一望できる。伐採木の集積所として近年利用されていたため、調査地全面に伐採木の切屑が厚さ約80cmにわたり堆積していた。切屑除去後、トレンチ北端の旧表土直下で須恵器・土師器・鉄釘の出土をみたため部分的に拡張を行ったが、遺構は伐採木の集積所として利用されていたためかすでに削平されており、検出することはできなかった。

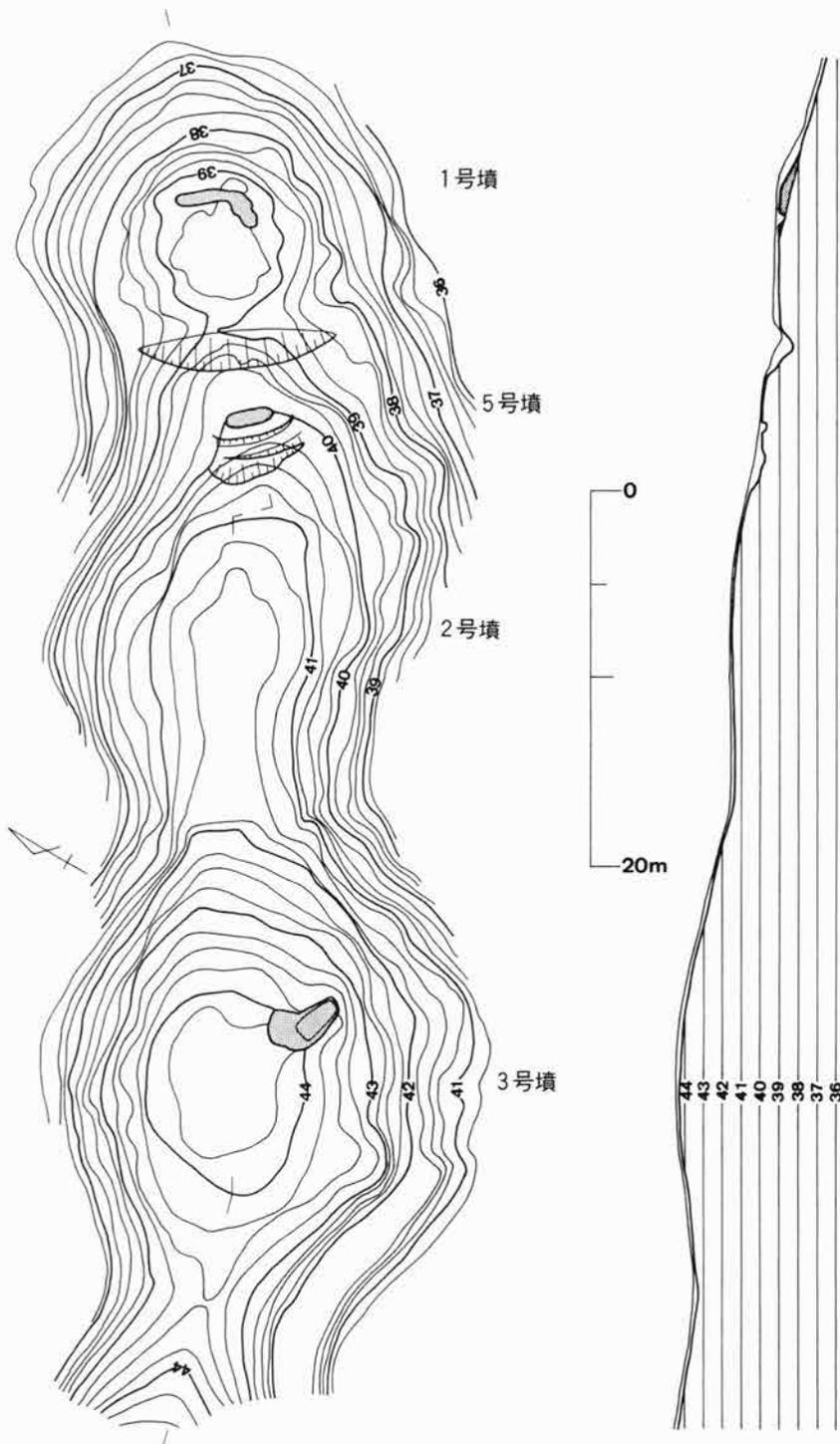
大田南古墳群E地点出土遺物(第24図) 出土遺物として須恵器・土師器・鉄釘がある。須恵器7個体程度、鉄釘2本を数えることができるが、図示できたものはその内5点である。いずれも、形態から奈良時代後半に比定できるものと考えられる。

1～3は杯である。1は平底で、やや厚手の作りである。復原口径12.6cm・器高3.0cmを測る。焼成は軟質で、色調は淡緑灰色である。2は、丸みを帯びた体部から端部を外上方へつまみ出す。内面に面を持つ。復原口径11.6cmを測る。焼成は堅緻であり、色調は暗青灰色を呈する。3は、深い体部を持ち、端部は外上方へつまみ出す。復原口径16.0cmを測る。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。4・5には杯底部を図示した。いずれも輪高台を持つ。4の輪高台は外にふんばる形態を呈し、焼成は1同様、軟質である。5は内傾し、焼成は堅緻である。

②下後2号墳(第25図) 5号墳と3号墳の間に位置する。表土直下が地山であり、かなりの削平を受けていると考えられる。盛土は認められなかった。墳丘規模・形態は地形測量の結果からも判然としないが、直径約15m程度の円墳であった可能性を考えておきたい。遺物・埋葬施設ともに検出することはできなかった。

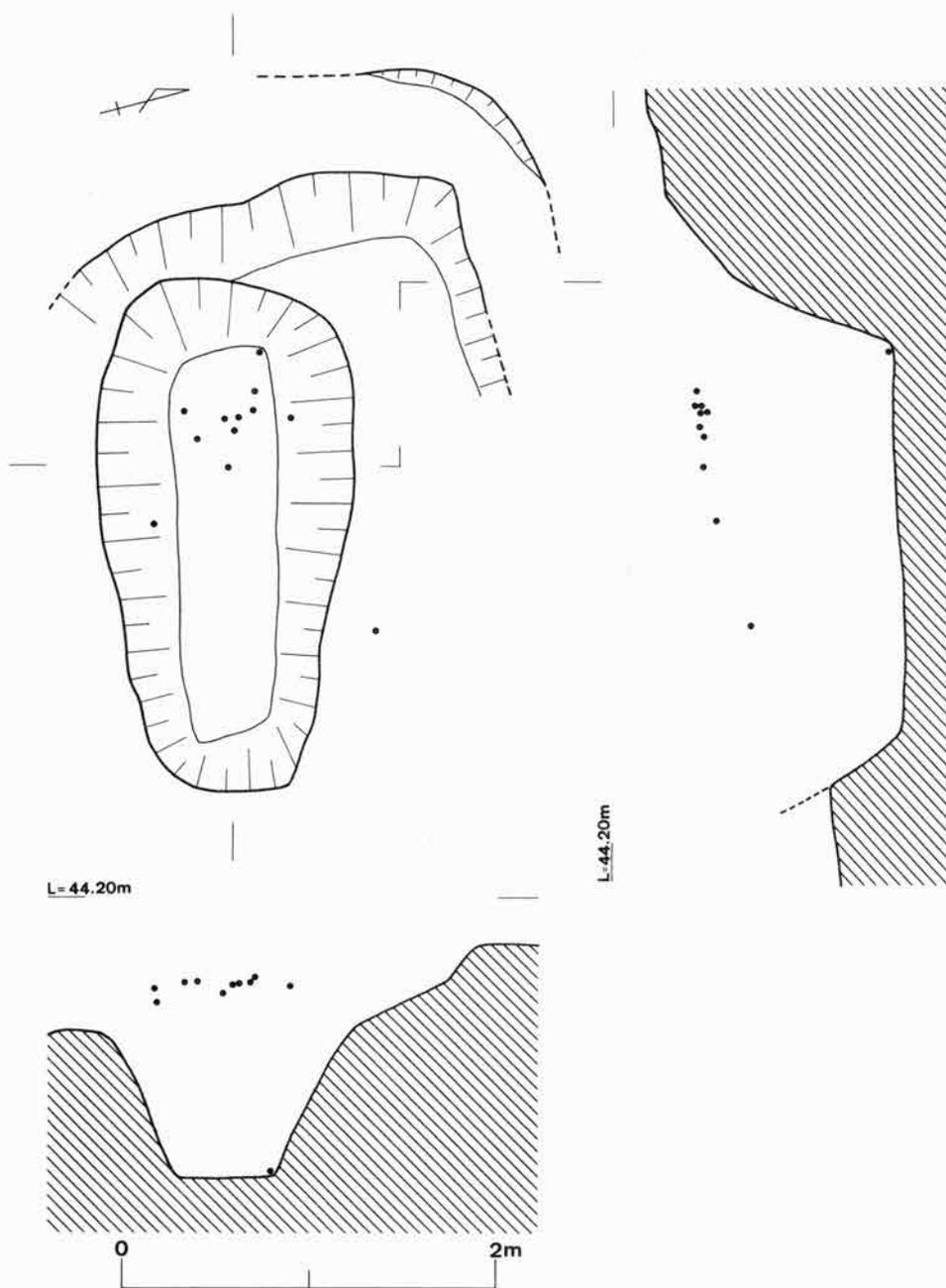
③下後3号墳(第25・26図) 2号墳の高位側に位置する南北約20m・東西約25mを測る東西に長い円墳である。2号墳からの見かけの高さ約2.5m・西側からの高さ約0.8mを測る。墳丘南側では土砂の流失が認められ、また、墳頂部でも表土直下で地山となり、かなりの削平を受けていると考えられる。盛土は認められず、また自然地形と区画するための施設も設けられていないことから、3号墳の墳丘は本来の自然隆起部分を利用して築造されているものと考えられる。

主体部は、墳丘平坦面中央より南東側斜面で1基を検出した。墳丘平坦面中央部からか



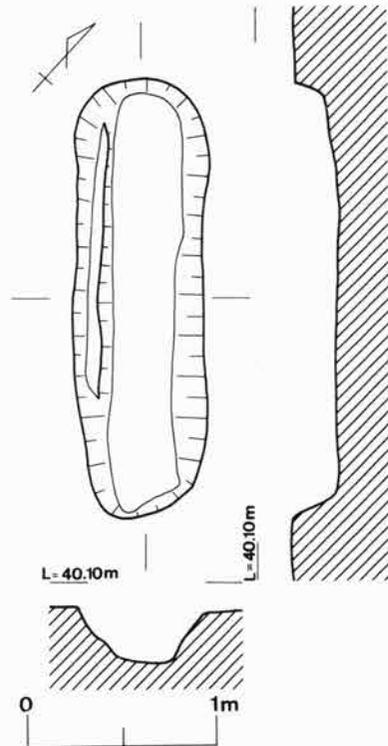
第25図 下後古墳群地形図 (s=1/400)

なり離れたところに位置し、また、かなりの削平を受けていることから、中心的な主体部が削平されてしまった可能性も考えられる。主体部は主軸を尾根直交方向にとる(N-75°-E)。墓壙は東側及び南側部分の削平が著しく、全体の形状を把握することはできなかったが、



第26図 下後3号墳主体部実測図 (●は土師器細片)

三段に掘り込まれる部分が認められる。上段及び第2段目の形態・規模を確定することはできないが、完存する最下段は平面隅丸長方形を呈し、規模は長さ2.7m・幅1.4m・深さ0.8m・最上段からの深さ1.3mを測る。木棺の痕跡は確認できなかったが、墓壇の形状から箱形木棺が使用された可能性が考えられる。遺物として墓壇埋土上層から土師器細片が11点出土している。いずれも同一個体の甕もしくは壺の体部と考えられるが、全体の形状は復原できなかった。出土状況からみて墓壇を埋め戻す過程で破砕されたものと考えられる。また、墓壇底部からも土師器細片1点が出土した。上層で出土した土師器とは別個体である。



第27図 下後5号墳主体部実測図

④下後5号墳(第25・27図)

下後古墳群の存在する丘陵先端部にある1号墳の高所側に位置する。調査前及び地形測量の段階では古墳とは考えられず、新たに5号墳とした。

墳丘は地山成形による東西約5m・南北約7m・1号墳溝からの高さ約2m・2号墳との間の溝からの高さ約0.2mの方墳である。墳丘築造にあたり、丘陵斜面を「L」字状にカットし、高所側に幅1.2m・深さ0.2mを測る緩い弧状の溝を設け区画する。盛土は認められなかった。溝断面は緩い弧状を呈する。また、1号墳の溝で墳丘北東側を一部削平される。

埋葬施設は墳丘中央部の表土直下で1基を確認した。平面隅丸長方形の素掘りの墓壇であり、地山面から掘り込まれている。棺の痕跡は平面・断面からも認めることができなかった。主軸を尾根直交方向(N-42°-E)にとり、検出面での規模は長さ2.3m・幅0.7m・深さ0.3mを測る。出土遺物がなく、築造時期は明確にしがたいものの、6世紀初頭と考えられる1号墳に削平されているため、1号墳に先行することは確実である。

5. ま と め

今回の調査では、2つの尾根にまたがり分布する下後古墳群の東尾根に位置する古墳3

基を調査し、東尾根部分に分布する古墳4基の様相を明らかにすることができた。

下後古墳群では時期を確定できる遺物がないものの、立地、墳丘の切り合いなどから丘陵高所側の3号墳→2号墳→5号墳→1号墳の順に先端に向け築造されていったものと考えられる。築造時期については明確にしがたいが、3号墳の遺物出土状況は、5世紀代の小規模古墳にみられる状況と同じであり、5世紀代の築造と考えられる。下後古墳群の分布する丘陵では、これまでに4世紀代の築造になる大田南2号墳、6世紀代の築造になる太田2・4号墳が調査されていたが、5世紀代のものとしては今回の調査が初例となった。このように、この丘陵は古墳時代前期から後期に至るまで墓域として利用されていたことが明らかとなった。また、墳丘の構築では、6世紀初頭の1号墳が盛土により形成されるのに対し、先行する2・3・5号墳が地山成形によることも、同一古墳群内での墳丘構築技術の発展を考えるうえで興味深い資料を呈示することができた。

一方、墳墓の調査例が飛躍的に増加しているのに対し、集落跡の存在について注意が払われていないことに問題が残る。下後古墳群周辺では柿のさが遺跡で表採した土器のなかに古墳時代の土師器・須恵器がみられた。須恵器のなかにはMT15型式併行のものがみられ、太田古墳群築造時期と併用することが注意される。ただし、柿のさが遺跡の立地は狭長な谷部であり、総数60基を越す古墳群造営の母胎となる集落とは考えられず、今後、古墳群造営集団の居住地についての注意を払う必要がある。

大田南古墳群では顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。唯一、遺物が出土したE地点は、先に述べたとおり、丘陵最高所付近に位置し、通常の遺跡の立地とは大きく様相を異にする。奈良時代後半に何かに土地が利用されたことは明らかであるが、今回の調査では遺跡の性格を明らかにすることはできなかった。今後、同様な立地をとる遺跡の存在に注意する必要があるものと思われる。

(石崎 善久)

(3) 横浦古 墓

1. は じ め に

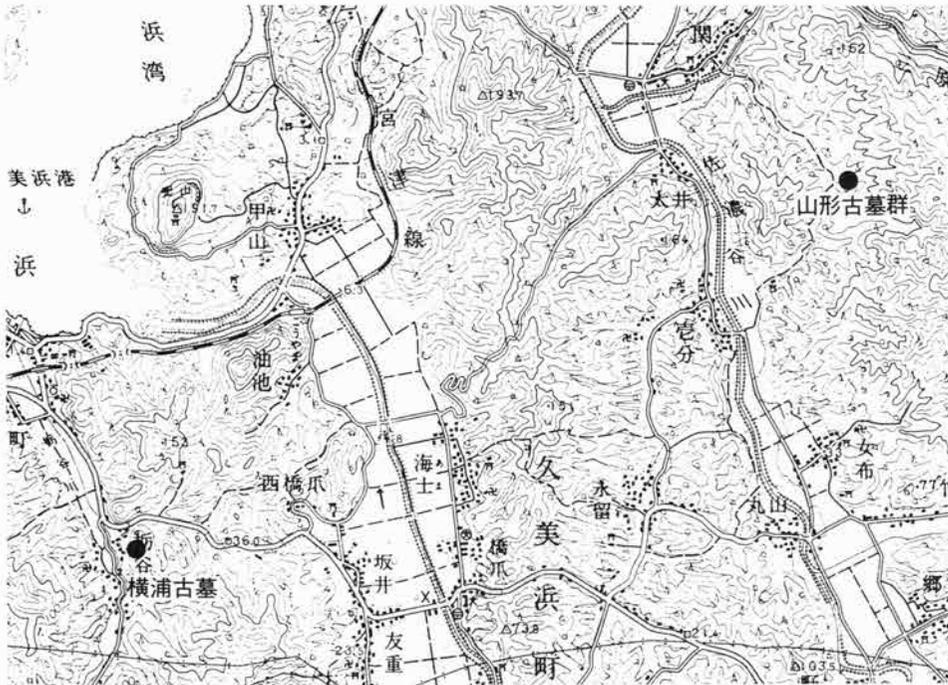
横浦古 墓は京都府熊野郡久美浜町字栃谷小字横浦他に所在し、栃谷集落の東側に接する標高約70mの南北方向の尾根上に立地する。調査前の状況は、尾根の頂部及び斜面にマウンド状の石積み3か所と石畳状の石積み2か所が認められ、古 墓群を形成している可能性が考えられた。また、古 墓の立地するところから鞍部を隔てた、北側の尾根の最高部付近に古墳等の存在する可能性が考えられたために、試掘調査を行った。

2. 調 査 概 要

①古 墓

尾根の肩部から西側斜面にかけて立地する墓で、南北7m・東西5.5mの楕円形のマウンドの西側に、南北3m・東西2.5mの不整形の突出部をもっている。

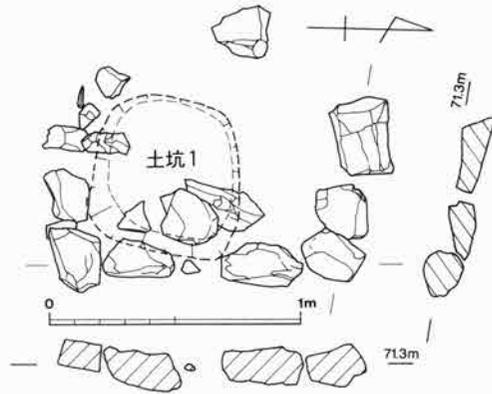
調査の結果、古 墓の築造は、およそ次のような手順で行われていることが判明した。



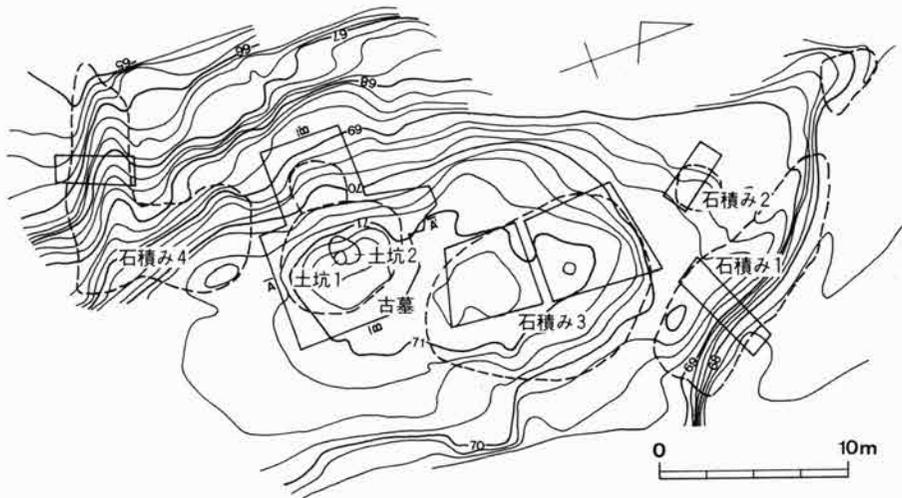
第28図 西部地区関係遺跡位置図 (S=1/50,000)



第29図 横浦古墓位置図(S=1/5,000)

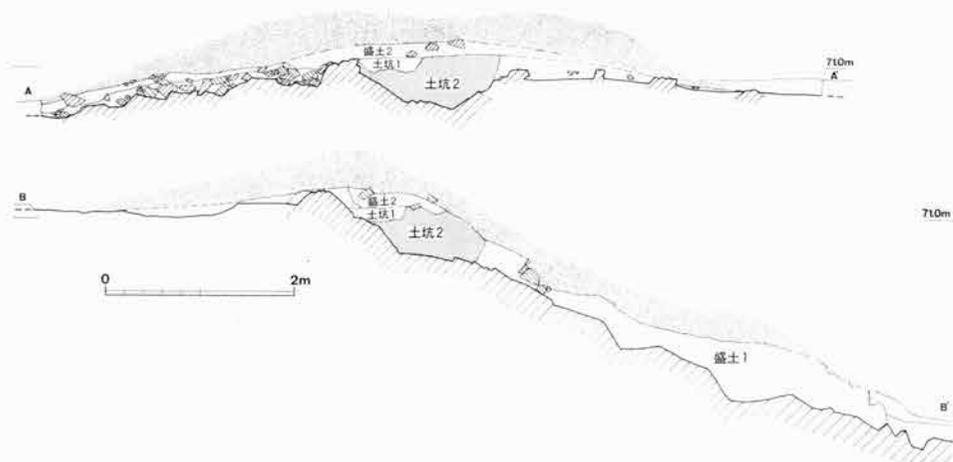


第30図 古墓方形石組平面図・断面図



第31図 横浦古墓平面図

1. 西に向かって傾斜する地山(大半が、岩盤からなる)上に、拳大から人頭大の礫を大量に含んだ土(盛土1)を盛り、マウンドと突出部を成形する。盛土1の厚さは最大70cmにも達する。
2. マウンド中央部に、盛土1を掘り込んで直径約1.6mの不整円形の土坑(土坑2)を作り、埋める(土坑2からは木炭の小片が出土)。
3. 土坑2上面に一辺約60cm・深さ約15cmの土坑(土坑1)を掘り、木箱に納めた火葬骨を埋葬し、湿気取りのために木炭を入れる(土坑1からは火葬骨と木炭、鉄釘9本以上が出土)。
4. 土坑1・2を盛土2で覆い、埋葬施設の位置を明示するために南北1.3m・東西1.1m



第32図 古墓断面図

を測る方形の石組を作る。

5. 最後に全面に礫を積み上げる。礫層の厚さは最大40cmに達する(礫層の中からは肥前陶器が出土)。

②石積み1～4

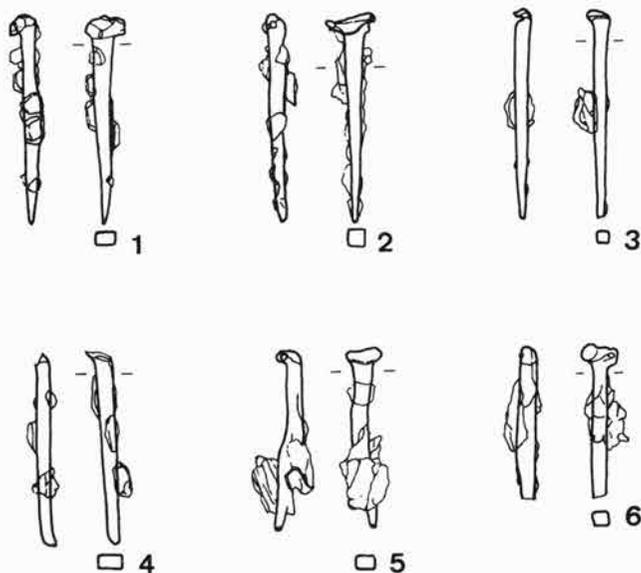
石積み2・3は尾根の稜線上に立地するマウンド状の石積みで、石積み3は長径13m・短径9mの楕円形、石積み2は直径2.5mの円形をしている。ともに約半分を掘削したが、礫石を除去すると、自然の岩盤があらわれた。遺物は出土しなかった。石積み1・4は石塁状の石積みで、それぞれ尾根の北東斜面と西斜面に立地する。石積み4は斜面に直交する方向にのびており、比高差は約5mに及ぶ。石塁に直交する方向に断ち割って掘削したが、礫層と盛土とを除去すると地山があらわれた。遺物は出土しなかった。石積み1は斜面に平行する方向にのびており、比高差は約2.5mを測る。これも石塁に直交する方向に断ち割って掘削したが、礫層を除去すると地山があらわれた。礫層の上面で、肥前磁器を採集した。

③試掘地

北側の尾根の試掘地では、約160㎡を掘削したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

3. 出土遺物

遺物は、肥前陶器、肥前磁器、須恵器、鉄釘が出土しているが、鉄釘以外は小破片である。肥前陶器・磁器は、17世紀後半から明治時代に下るものまでである。須恵器は8世紀代のものが古墓の盛土中から出土している。1～6は鉄釘である。鍛造で、長さは約5.4cm



第33図 出土遺物実測図 (S=1/1)

を測る。土坑1から出土している。鉄釘は9本以上出土しているが、すべて同じサイズである。

4. ま と め

今回の調査では、近世の墓1基のようすが明らかになった。盛土1や最上部の礫層に使われている石材は、付近の岩盤を打ち割ったものであるが、大量の石材を割って積み上げるだけでも相当な労働力の動員を必要

としたものと思われる。また、この墓が、栃谷の村を見おろす西向きの斜面の最も高いところに位置していることも重要である。この位置は、栃谷の村を眼下に見渡せる場所であると同時に、西方浄土に望む場所でもある。埋葬方法が土葬ではなく火葬であることも、被葬者の宗教を表している可能性が高いと考えられる。いずれにしてもこの墓に葬られた人は、栃谷の村の有力者・庄屋クラスの人物であろうと思われる。古墓の造られた時期は、江戸時代前期で、明治時代まで墓前の祭祀が行われていたものと考えている。石積み1～4も古墓である可能性が考えられたが、埋葬施設は検出されず性格を明らかにすることができなかった。

(森島 康雄)

(4) 山形古 墓 群

1. は じ め に

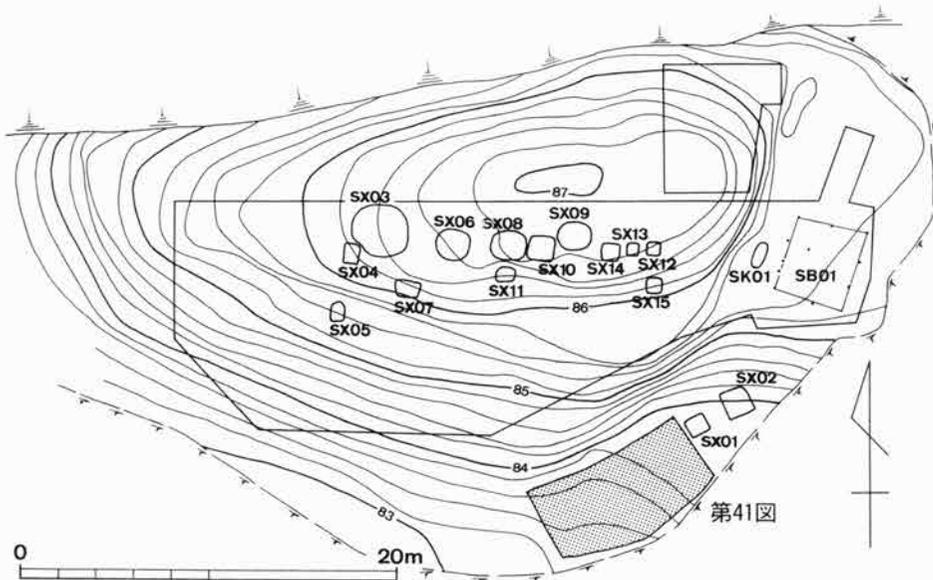
山形古 墓 群は熊野郡久美浜町大字大井小字山形に所在し、近畿農政局の計画する久美浜町大井団地の予定地内にある。この遺跡は、約40m×60mの平坦部の北辺をしめる東西約40m・南北約25m、比高差約5mの独立丘陵とその周辺に位置する。丘陵の最高部の標高は85m前後である。調査着手前の状況は、腐植土の間から2～3の石甕いと、石碑・石仏・五輪塔片などの散乱が認められた。特に南側の斜面地には、人頭大の石が多く散乱し、多くの埋葬施設の存在が予想された。丘陵の東と南の裾にはそれぞれ100㎡足らずの平坦地があり、南側斜面には2～3のテラスがつくられている。

平成元年度の調査は、9基の墳墓と南側平坦地の一部を発掘調査し、加えて表土剥ぎを行って、5基前後の墓を検出した。平成2年度は、前年度未調査の丘陵斜面地及びテラス部を調査し、4基前後の墓及び茶毘跡1基・建物跡1基を検出した。

2. 平成元年度の調査

①調査概要

SX01・02は南側裾部にあり、ともに人頭大の石が散乱していたが、原位置のものを残



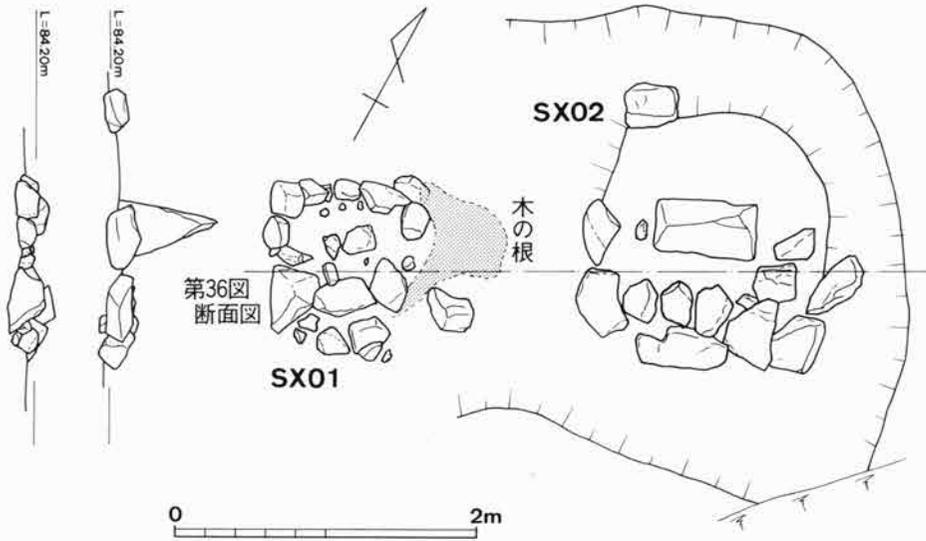
第34図 調査前地形図及び遺構配置図

して整理すると、それぞれ方形の石囲いとなった。

S X01は1.05m×1.1m石組みの中央に石仏状の板石が倒れていた。石列は西・北側は直線的に並べられていた。この下には0.8m×1.4m・深さ82cmの長方形の掘形をもつ土壌を検出した。石組の間から土師器皿小片が出土し、土壌から遺物は出土しなかった。この土壌に重複して北西部分に径28cm・深さ8cmの小ピットを検出したが、その性格は不明である。S X02には1.65m×1.8mの範囲に石が組まれ、中央に0.65m×0.8m・厚さ38cmの石碑が据えられていた。風化のため文字等が刻まれていたかは不明である。S X02の周囲には深さ10~15cmの浅い溝がめぐり、いわば低い「土壇」状になる。下部構造は1.05m×1.25mと1.05m×0.85m以上・深さ1.35mの2基の方形土壇が設けられていた。S X02の下層土壇内から青磁碗小片と煙管・数珠・漆器片・棺材が出土した。数珠・漆器片は網代状に組んだ植物質の上に密着して出土し、煙管は側面に残る棺材木質に密着して出土しており、副葬品と考えられる。S X01は土壇の直上に石を並べているのに対して、S X02は土壇の上に黄褐色土—おそらくは周溝掘削土—を盛り上げて「土壇」を造っている。S X01・02は近世の土葬墓と考えられる。

S X03は径約3mの円形に盛土(最大25cm)を有する墳丘の中央に、30cm×70cmの小石室が造られていた。この石室の上部には1.2m×1.6mの方形の範囲に拳大から人頭大の石が集められていた。その中には五輪塔の地輪(24.5cm×25.5cm・高さ18cm)があった。石室を覆う蓋石はなかった。小石室内には土師器の筒形土器が2個と、それぞれに対応する土師器蓋2が納められていた。他に遺物の出土はない。これらの土師器筒形土器は、通有には銅製経筒を納める外容器として用いられるが、蔵骨器に使用された場合もある。ここでは小石室を設けて埋葬しており、蔵骨器としては「厚葬」すぎよう。S X03を経塚と捉え、経筒外容器として用いられたとしておきたい。小石室は墳丘の盛土と平行して組まれたらしく、小石室の裏込めの土層は認められなかった。当初はこの石室内は空間であったらしく、流入土と思われる土で埋まっていた。小石室南側の小土坑内に陶器(丹波焼)が埋納され、ここから流出したと判断される同一個体の陶器片が墳丘裾南側でかたまて出土した。小土坑は平面形が23cm×35cmの楕円形で、検出した深さは16cmである。土坑底面には壺の底部が径の約半分程度正立して埋置されていたが、その上には底部片や体部片が折りかさなるように出土したので、この土坑内に完形の壺を立てて埋置したのではなく、一度破砕してから破片を埋めたものと推定する。

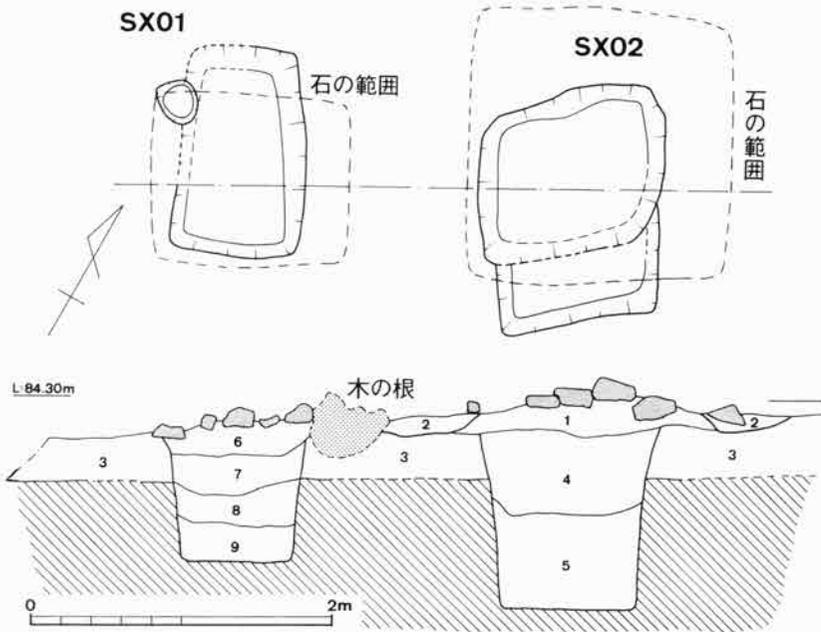
S X04はS X03の南西にあり、表土を剥ぐと1.2m×1.4mの範囲に石が乱雑に集積していた。注意して石を除去していったが、明瞭な石組は認められなかった。ただ、下層で検出した土壇の直上に1m×1mにまとまった集石が認められた。下部には85cm×95cm・深



第36図
断面図

L=84.20m

第35図 SX01・02 検出状況実測図



SX01

SX02

石の範囲

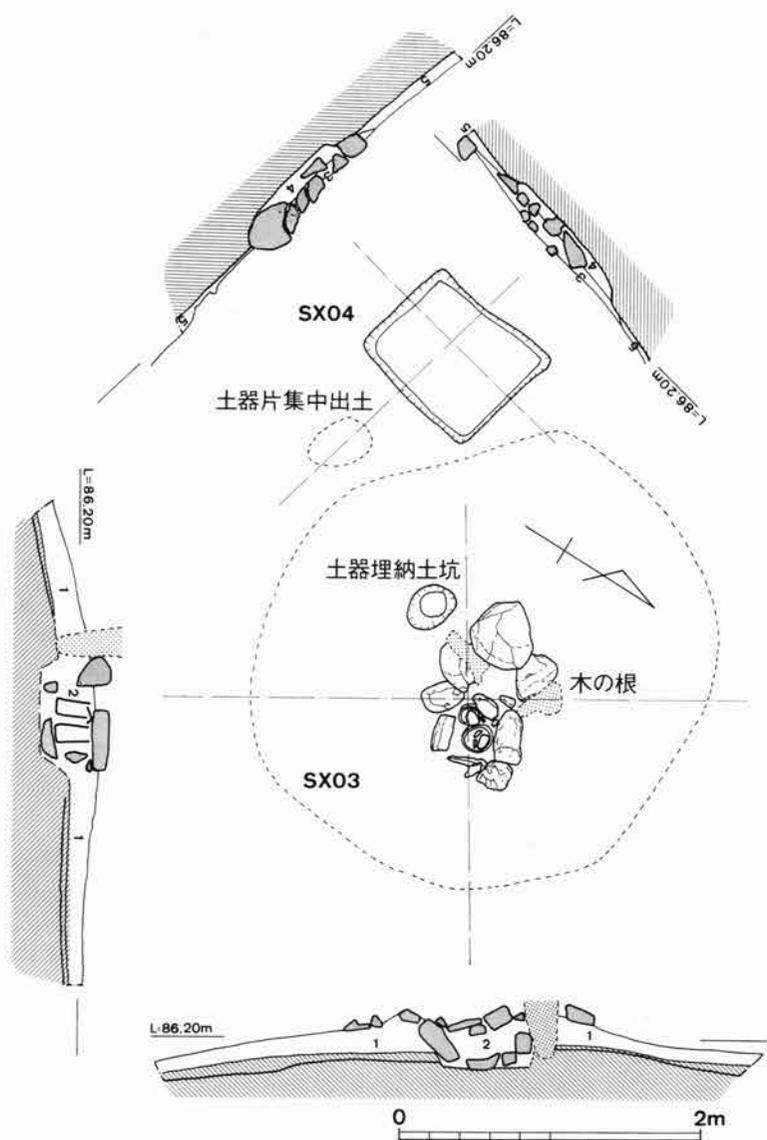
石の範囲

L=84.30m

木の根

第36図 SX01・02 下層遺構及び土層実測図

1. 黄褐色土 2. 褐色土(SX02周溝) 3. 炭混茶褐色土 4. 黄色粘土混暗茶褐色土
 5. 暗褐色粘土混黄褐色粘土 6. 暗黄褐色土 7. 黄色粘土混茶褐色土(黄色粘土多)
 8. 黄色粘土混茶褐色土 9. 暗褐色粘土混黄褐色粘土

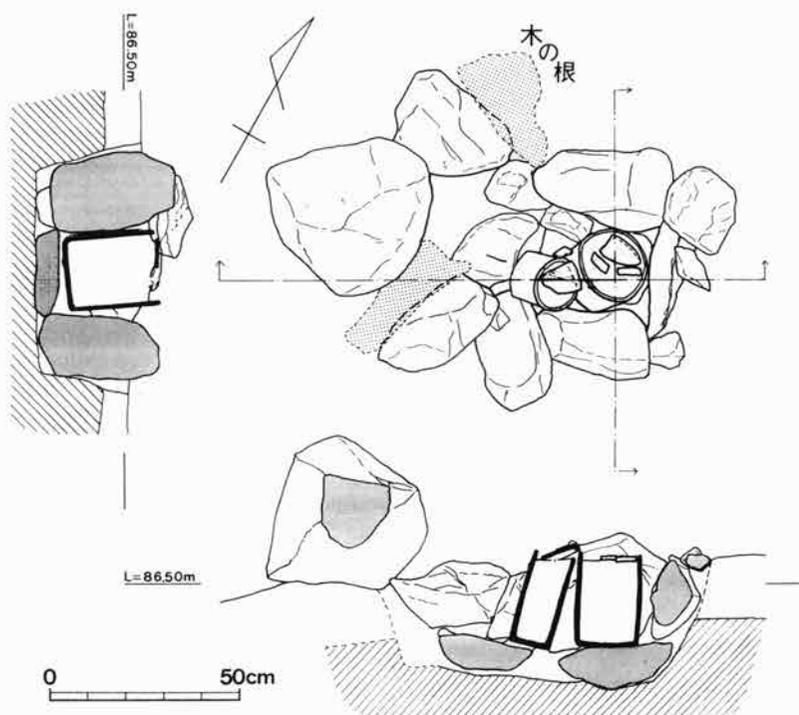


第37図 SX03・04実測図

さ10cmの土層を検出した。遺物の出土はなかった。

SX05はSX04の南側で検出した。0.7m×0.8mの集石であるが、下部には遺構は確認できなかった。人為的な集石かどうかは判断できなかった。SX06はSX03とSX08の間で認められた若干の盛り上がりであるが、調査の結果、人為的なものではなかった。

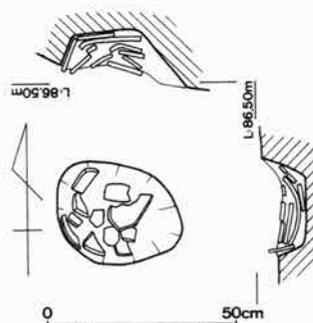
SX07はSX03の南側に位置した盛り上がりで、表土中に石が散乱していた。小さな墳丘と推測して表土と石を除去すると、散乱した石の直下が地山で、何の施設も検出されな



第38図 S X03小石室内遺物出土状況図

かった。斜面に流出した石の散乱であろう。

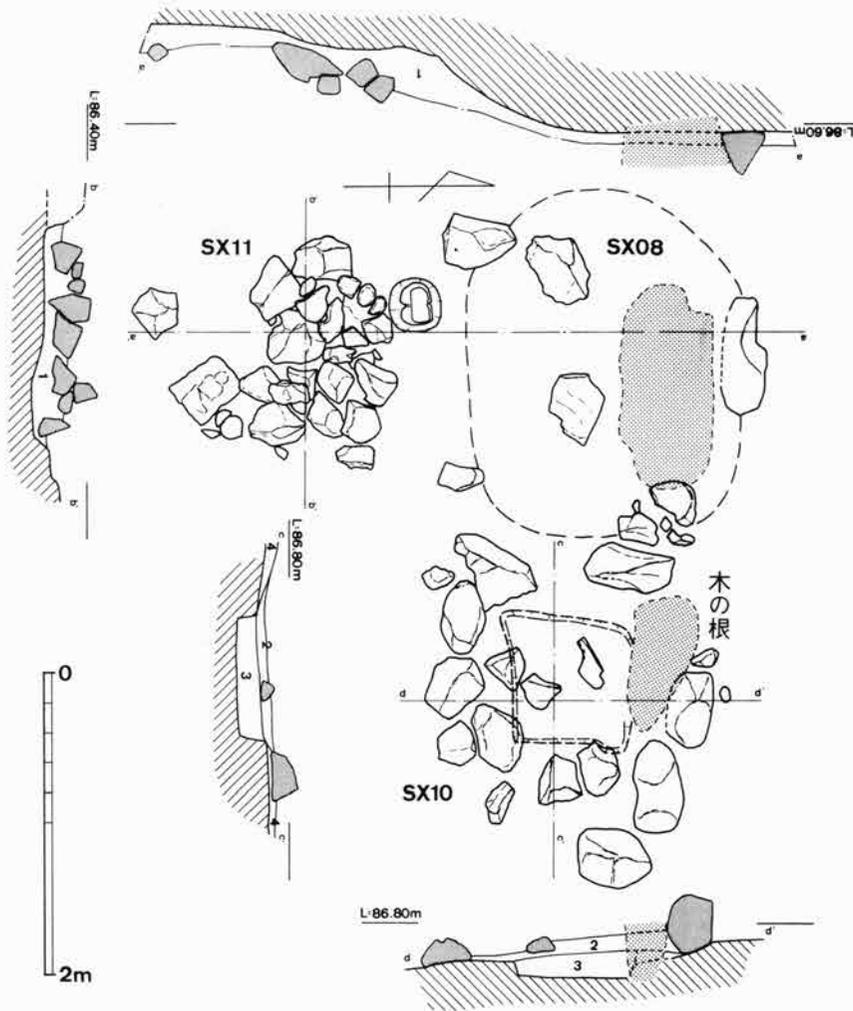
S X08・S X09は、S X03と同様、径2 m程度の範囲に若干の盛り上がり認められた。S X08は1.5 m×2 mの楕円形に約10cmの盛り上がり認められ、表土を剥ぐと数個の石が散乱していた。S X09には約15cmり上がり認められ、断ち割って土層を観察すると、の盛約30cmの盛土があった。石等は表土中のみ認められた。ともに埋葬施設は確認できなかった。ただ、S X08は中央北寄りに松の根株があり、ここに埋葬施設が存在した可能性は否定できない。S X09にも約30cmの盛土があることから、人為的なものには間違いないが、墳墓とは断定できない。



第39図 S X03土器埋納土坑

S X10はS X08とS X09の間に位置し、かなりくずれた石組の中央に0.6 m×0.65 m・深さ20cmの土壇を検出した。石組は復原で1.5 m×1.8 mの方形にめぐる。出土遺物はない。

S X11はS X08南側の比高差約0.3 mの小テラスにあり、0.8 m×1.1 mの範囲に石が集まっていた。この中に石仏と空風輪が各一体あった。上面で検出した集石やや北側の位置

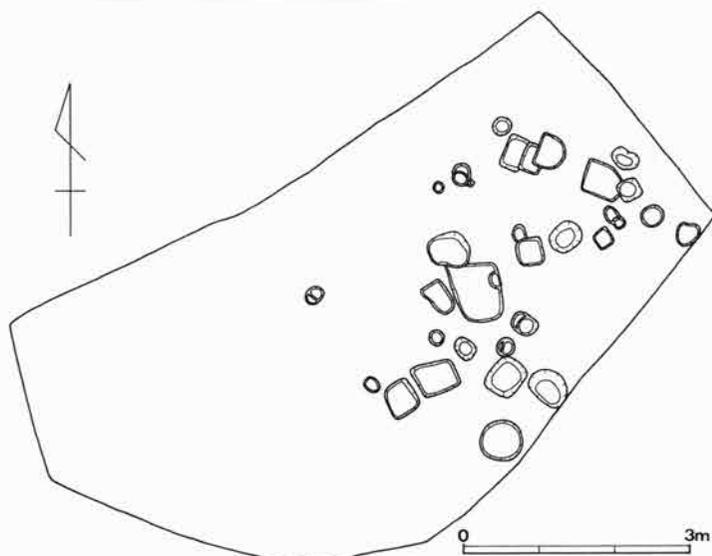


第40図 SX08・10・11 実測図

1. 暗黄褐色土 2. 暗褐色土 3. 明褐色土(炭混じり) 4. 褐色土

の下部で、径15cm・深さ38cmの円形小土壙を検出した。内部から五輪塔の空風輪が出土した。

SX01・02の西南部の平坦地の調査は、約30cmの整地層(15~16世紀の土器を含む)を除去すると、径20~30cmの小ピットや一辺30~60cmの土壙を検出した(第41図)。いくつかの土壙内より、焼土・炭片・土器片が少量出土した。骨片は出土しなかったが、おそらく木櫃・木箱等に火葬骨を納めて埋葬した痕跡と考えられる。これらの土壙・ピットの検出面からの深さは約10cmと浅い。この上に整地層が盛られ、この整地層上面からSX01・02の土壙が掘り込まれている。



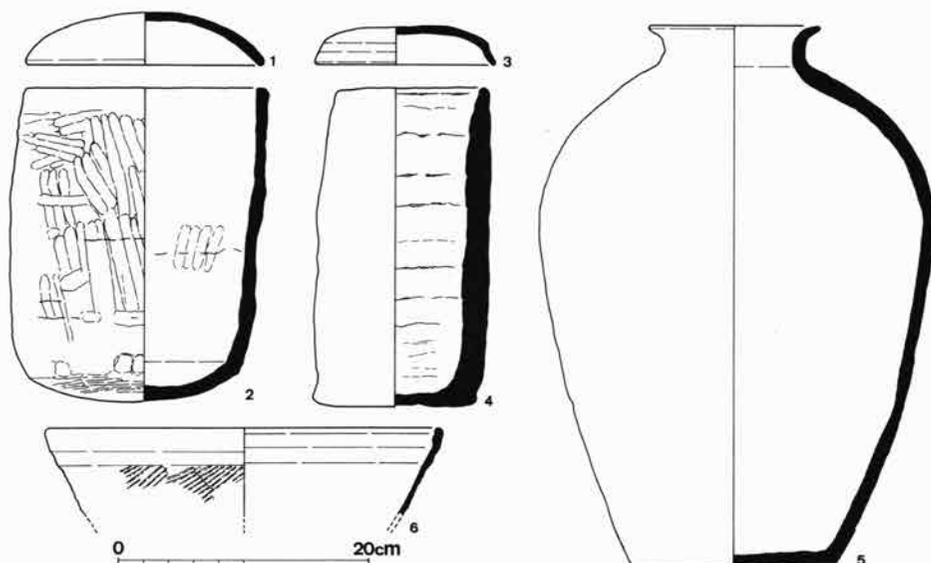
第41図 検出遺構平面図

②出土遺物

第42図は貨幣，第43図は土器，第44図は石製品の実測図・拓本である。第42図はS X06の表土中から出土した。「崇寧通寶」(北宋銭 初鑄年代1102年)で，径34mmである。第43図1～4はS X03から出土した土師器筒形土器と蓋である。2は内外面ともユビナデ調整を行い，底部は横方向のミガキ



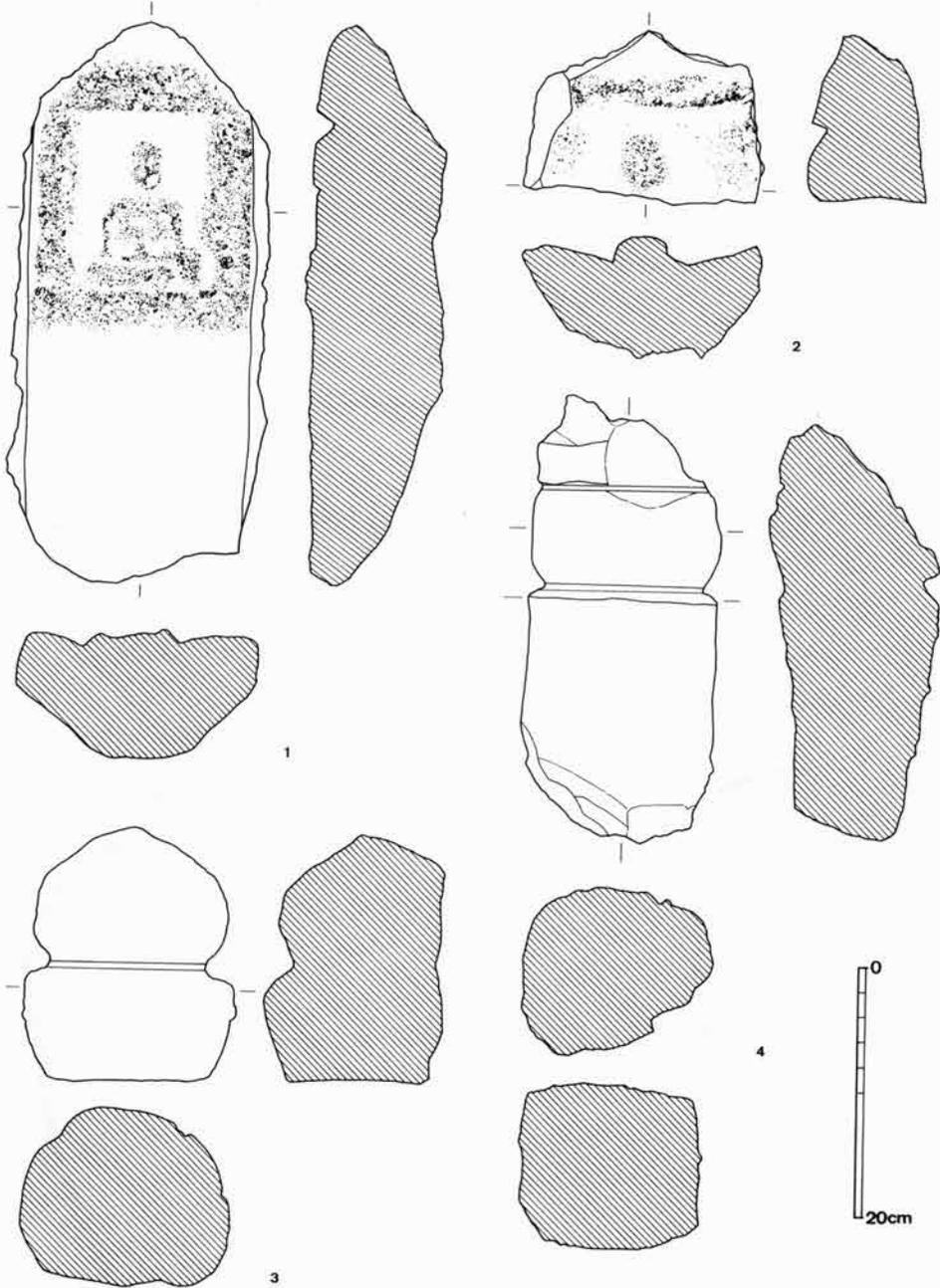
第42図 S X 06表土中出土遺物拓本(S=1/1)



第43図 出土遺物実測図

1～4. S X03小石室内 5. S X03埋納土坑内 6. S X12～15表土内

を行う。4は内面に横方向の粘土紐輪積みの継ぎ目が明瞭で、外面はナデで調整する。5はS X03の小土坑内出土の丹波焼の壺で、15世紀頃の年代観が与えられよう。体部には緑色の自然釉がかかる。6はS X06の表土中出土の瓦質の鍋(または鉢)で、外面にタタキメ



第44図 出土遺物実測図(石製品)
1・2. S X02 3. S X11 4. S X08

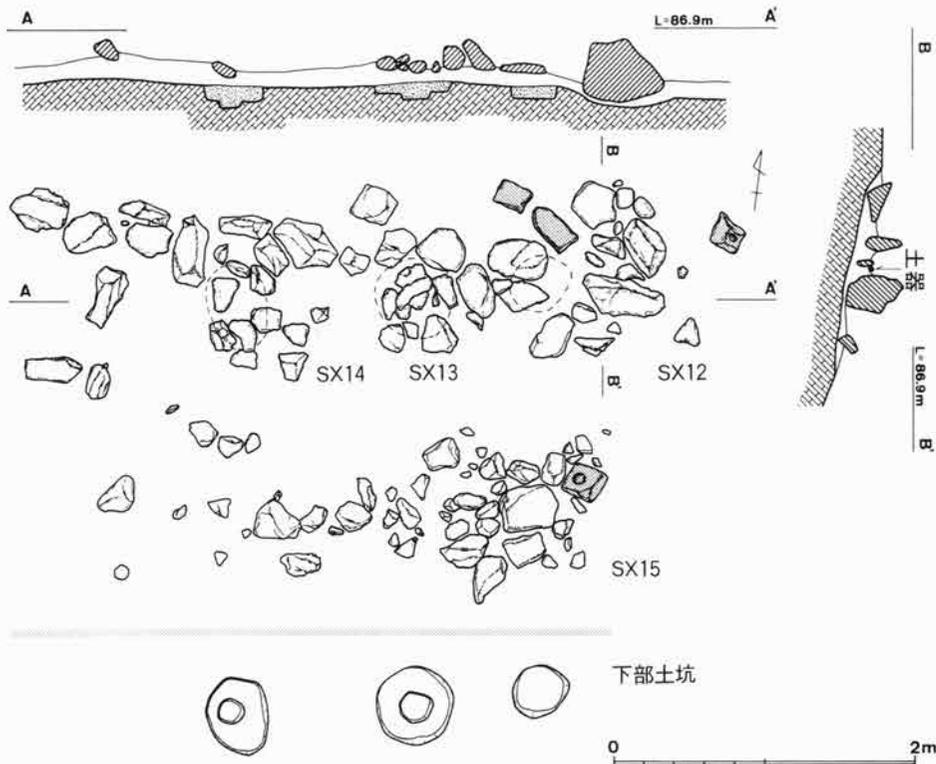
(2.5本/cm)がある。第44図1・2はともにSX02の散乱した石の間から出土した石仏で、周辺からの流入とは考えにくく、おそらくは集石の1つとして用いられたものであろう。3はSX11下層の小土壇から出土した空風輪で、タテ方向に約1/8が割れている。4はSX08の集石中より出土した一石五輪塔で、火輪より上が割れている。

(岩松 保)

3. 平成2年度の調査

①調査の経過

今回は、丘陵の南側斜面に広がる集石が墳墓に伴うと予想されたため、表土除去後に集石を実測し、集石下の調査を行った。集石はかなり原位置を移動していたが、SX12~14では、下部に火葬骨を埋納した小土壇を確認した。順次、集石下を調査したが、その他の地点では、下部に遺構を伴わずに若干の炭片・火葬骨が確認できたにすぎない。また、丘陵の東側平坦地では、元年度に京都府教育委員会が範囲確認のため試掘トレンチを設定していたが、今回新たに掘立柱建物跡1棟と土坑2基を確認した。このうち、土壇SK01は、



第45図 SX12~15 実測図

火葬墓群に伴う茶毘跡と考えられる遺構となった。

以上のような経過を経て、6月14日には関係者への説明会を行い、現地を撤収した。

②調査概要

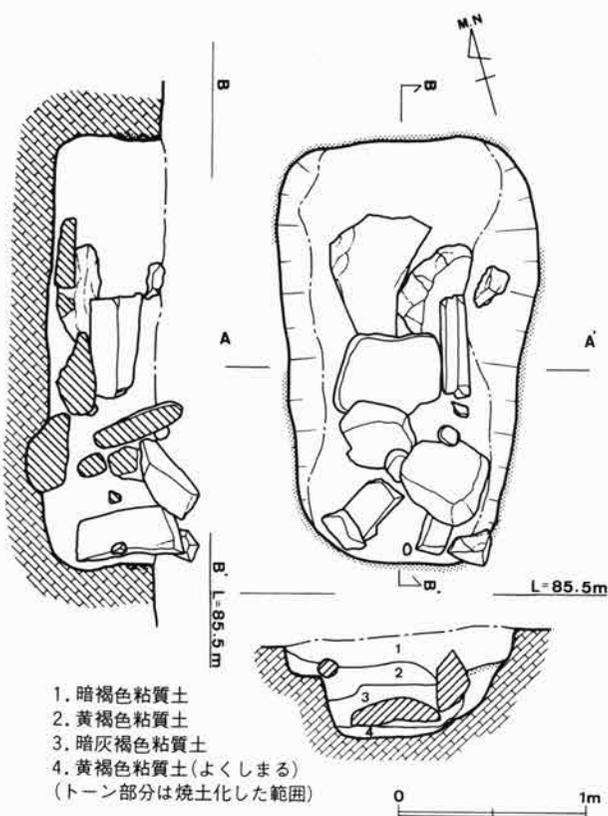
中世墓(第45図) 今回確認した集石遺構のうち、S X12~14の3基については、下部に小土坑を設けているが、これら以外は明確な施設を持たず、若干の炭片・火葬骨が確認できたのみである。特に、西側の集石(東西約5m×南北約2.5m)は、集石の状況からもさらに細かい単位を抽出することができず、集石下の状況もわずかに炭片・火葬骨が出土しただけである。このため、墓として認識できるのかどうか、疑問が残る。

S X12の配石は、やや崩れているがほぼ1mの範囲に拳大~人頭大の石材を置いている。石材の間からは、土師皿2点が重ねられた状態で出土した。集石下部には、径約40cmの不整形円形土坑が設けられる。深さは、8cmと浅い。土坑内埋土中には、若干の炭と火葬骨が混じていた。また、石材の中には、別石造り五輪塔の破片が2点と板碑1点があった。S X13は、石材を約80cm四方の範囲に方形に配している。他に比べ石材の移動が少なく、

土坑上部にまとまっている。下部の小土坑は2段に掘られており、上面での径約50cm、下段は径約20cm・深さ約10cmを測る。S X14もかなり石材が移動しているが、本来は約1m程度の規模を持っていたと考えられる。下部土坑は、S X13と同様に2段に掘られている。平面形は、いびつな円形で長軸50cm・短軸40cm・深さ14cmを測る。埋土中には同じく、炭片・火葬骨が混じていた。

茶毘跡(S K01, 第46図)

丘陵東側の狭い平坦地で検出した小土坑である。平面形は、南北に長い長楕円形を呈しており、北側はやや幅が広



い。断面形は、長軸方向の下方が膨らみ、短軸方向は不整形な段をもち、底面は平らである。その規模は、長軸1.12m・短軸0.6m・深さ約28cmを測る。土坑壁面の上半部は火を受けて焼土化し、赤褐色を呈する。

土坑埋土中では特に、第3層の暗灰褐色粘質土中で、炭・火葬骨が混在する。埋土中にある石材は、土坑埋め戻しの際に入れられたと考えられる。ただし、底面付近にある偏平な石材3石は、上面が熱を受けて赤色に酸化していたため、当初から土坑内部に配置されたものであろう。土器等の遺物は全く出土していない。これは、遺体を火葬にふした遺構と考えられる。骨の

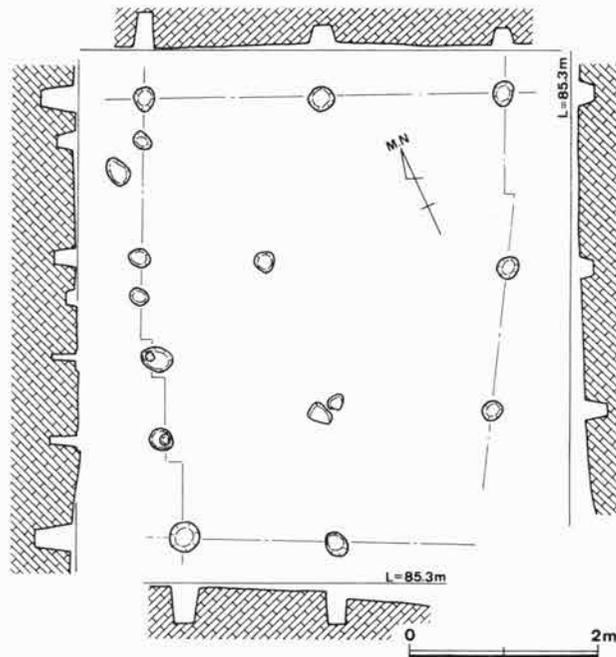
出土が少ないことから、火葬骨は丘陵斜面の火葬墓に葬られたと思われる。

掘立柱建物跡(S B01; 第47図) SK01のある平坦面にある。南西の隅柱を検出できなかったものの、南北3間・東西2間である。ただ、東側の柱穴は7つあり、間隔も並びもそろわない。この建物跡とSK01は近接し、最も近い柱穴との距離は、約80cmを測る。

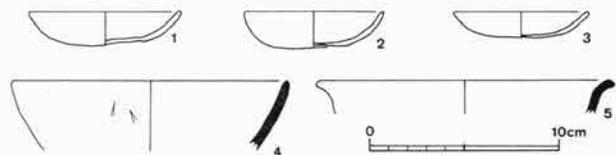
(森 正)

③出土遺物(第48図)

1～3は土師器皿である。1・2はSX12から、3は表土中から出土した。色調は灰黄色で、口縁部の横ナデをはじめ、全体にきわめて雑な作りである。4・5は青磁碗である。いずれもSX02から出土しているが、本来は上方の斜面にある火葬墓に伴うものと思われる。4は蓮弁文を持つもので、釉調はややオリーブ色がかかり、焼成もあまい。5は口縁部が外反するタイプで、釉調は淡緑青色である。4は13世紀後半頃、5は14世紀末から15世



第47図 S B01 実測図



第48図 出土遺物実測図

紀初頭頃のものと考えられる。

4. ま と め

山形古墓群では、丘陵の最高部に位置する経塚S X03と、南の斜面から平坦面にかけて展開する火葬墓群、丘陵東側の平坦部に位置する茶毘跡S K01とそれに伴う建物跡、丘陵南の平坦面に位置する土葬墓群が検出された。このうち、火葬墓群の年代は、S X12から出土した土師器皿や、整地層などから出土した青磁碗からみて、13世紀後半から15世紀前半にかけて営まれたものと考えることができ、茶毘跡S K01とそれに伴う建物跡も火葬墓群と重なる時期と考えられる。経塚S X03は小土坑内から出土した丹波焼壺からみれば、15世紀前半頃の年代が考えられるが、経塚S X03の小石室から出土した土師器製筒形容器は京都府北部における研究によれば、13世紀から14世紀後半の遺跡から出土することが多いといわれている。^(注39)

このように、経塚S X03の時期は確定しがたいが、ここでは経塚S X03が丘陵の最高所に選地していることを重視して、経塚S X03を火葬墓群に先行するものとし、丹波焼壺は後世に供献されたものと考えたい。すなわち、丘陵の最高所に経塚が造営され、それを契機として丘陵斜面に火葬墓が営まれたと考えるのである。

土葬墓は、出土した煙管の形態や、北宋銭が副葬されていることから、17世紀前半頃の遺構と考えられ、火葬墓群とは时期的に隔たりがある。土葬墓は厚さ約30cmの整地層の上面から掘り込まれており、土葬墓造営にあたって整地を行ったものであろう。整地層の下層で検出された小ピットや土壙は、この整地の際に破壊された中世の火葬墓であるとみることができる。

調査地南方の広い平坦地は現在一分区にある泰平寺の旧寺域であったので、調査で検出した土葬墓2基は泰平寺の墓地の一部である可能性が極めて高い。調査地南側の広い平坦地には、泰平寺の堂宇と墓地が展開していたものと思われる。

今回経塚と考えたS X03の性格については異論もあるところであるが、^(注40)2年にわたる調査で中世の火葬墓群とそれに伴う茶毘跡と建物跡などがセットで検出されたことは中世墓地の全体像を理解するうえで極めて重要な調査であったといえる。また、中世墓地に隣接して近世寺院の墓地が検出されたことは、寺院と墓地の関係を考える手がかりとなるであろう。

(森島 康雄)

付記

最後になったが、今回の調査ならびに本概要作成に当たっては、多くの方々からご指導ご協力を得た。記して謝意を表する(順不同・敬称略)。

田中 琢・山田邦和・細川康晴・大崎哲人・佐藤晃一・岡田晃治・安田 章

注1 増田孝彦・三好博喜ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
増田孝彦・森 正・荒川 史ほか「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

増田孝彦・中川和哉・荒川 史・森島康雄「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

増田孝彦・石崎善久・岩松 保・森島康雄「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注2 調査参加者(順不同, 敬称略)

東部地区: 吉岡英一郎・横井川博之・三木英樹・村田文幸・藤原康生・山本克則・高井朋樹・藤田明弘・藤井健介・大橋 敦・山本和之介・山崎 誠・下ノ村 実・佐藤哲也・木全邦之・杉山秀樹・金田晃治・鈴木孝治・赤尾 健・斎藤 優・山田和久・林田登之・斎藤光子・三井小百合・坂井 晶・杉原美加・中前幸子・向井祐子・安井あゆみ・嶋田祐子・針尾紀子・丸谷はま子・森本須都子・山本弥生・小田栄子・西 世津子・高原与作・坪倉勇一・山副同・上田忠志・川戸利雄・和田正之・吉村 保・松村 仁・後藤正一・林 栄三郎・吉岡茂・行待守夫・深田志郎・藤原義夫・米田武志・平林秀夫・山副武志・鈴木 豊・吉岡喜三二・井通敏郎・吉村行雄・今西英二・川竹庄吉・吉岡定一・永島 勉・小牧利男・山添英夫・田中熊治郎・川村義一・山添 均・平井 均・谷口勝江・安達久子・堀江初枝・林 初江・田辺末子・森戸寿美子・平林直美・梅田重子・森野美智代・西村久枝・本城富子

西部地区: 松室孝樹・斎藤 優・林田登之・小笠原順子・岩田典子・中前幸子・杉原美加・安田由美子・山崎とも子・保田栄子・山添圭三・森口敏治・西山辰玉・田中照夫・田中正省・片山道夫・中西 博・秋田義和・野村信夫・山口五郎・竹中仲右エ門・稲葉みね子・松田秋江・西山久枝・岡田桂子・寺下八重子・今井さわ・吉岡喜代子・平林一馬・川岸恵理・山本礼子・新村知世・保田由美・黒田邦夫・杉本 智・谷岡美砂・高岡ゆり子・丹新千晶・林 秀子・溝井麗子

注3 杉原和雄ほか「裏陰遺跡発掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第1集 大宮町教育委員会) 1979

注4 竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 ①正垣遺跡」(『京都府遺跡調

- 査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注5 藤原敏見「府宮ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 ①谷内遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注6 ①岡田晃治・岩月有行・森 正ほか「帯城墳墓群発掘調査概要Ⅰ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』京都府教育委員会) 1985
②岡田晃治・岩月有行・森 正ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔1〕帯城墳墓群発掘調査概要Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会) 1987
- 注7 平良泰久ほか「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983
- 注8 久保哲正ほか「大内1号墳発掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第2集 大宮町教育委員会) 1983
- 注9 奥村清一郎ほか「大谷古墳」(『大宮町文化財調査報告』第4集 大宮町教育委員会) 1987
- 注10 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 ①有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注11 鈴木忠司・植山 茂ほか「京都府中郡大宮町小池古墳群」(『大宮町文化財調査報告』第3集 大宮町教育委員会) 1984
- 注12 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成元年度発掘調査概要〔1〕池田古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1990)』京都府教育委員会) 1990
- 注13 注1に同じ。
- 注14 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔2〕大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会) 1987
- 注15 注10に同じ
- 注16 杉原和雄「新宮窯跡発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』京都府教育委員会) 1974
- 注17 森下 衛・岡田晃治「大宮町三坂谷窯跡の須恵器」(『太邇波考古』第5号 両丹技師の会) 1985
- 注18 山田邦和「京都府下の須恵器窯」(『マムシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校地学術調査委員会) 1983
- 注19 肥後弘幸「シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注20 注1に同じ。
- 注21 窯体内出土須恵器については、細片を除き個体識別を行い、個体数の算出を行った。また、小片については、同一個体の識別が困難な場合があるため、算出した数値は必ずしも実数を示すものとは限らないが、大方の傾向には影響がないと考えられる。
- 注22 口径別個体数の算出に当たっては、以下にあげる算出法を参考にして、口径1cm単位で行った。

- 宇野隆夫「第6章2 (1)考察の方法」(『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京北町教育委員会) 1982, 中谷雅治「第4章 (4)器種別個体数の試算について」(『西櫛窯跡』 加茂町教育委員会) 1981
- 注23 西弘海他「2土器A平城宮Ⅰ～Ⅶの大別」(『平城宮発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所) 1976
- 注24 横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」(『九州文化史研究所紀要』第26号 九州大学九州文化研究施設) 1981
- 注25 増田孝彦・石崎善久「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要 (1)太田・下後古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注26 肥後弘幸「大田南2号墳の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第38号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注27 林 和廣・杉原和雄・坪倉利正「カジャ古墳発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第1集 峰山町教育委員会) 1972
- 注28 注5に同じ。
- 注29 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第20・21冊 京都府) 1931
- 注30 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第5集 弥栄町教育委員会) 1988
- 注31 森 正ほか「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要 (2)普甲・稻荷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注32 堤 圭三郎「太田古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』 京都府教育委員会) 1970
杉原和雄「丹後地方の横穴式石室採用以前の須恵器資料」(小江慶雄先生還暦記念論集『水と土の考古学』 考友会) 1973
- 注33 峰山町教育委員会安田 章氏のご教示による。
- 注34 増田孝彦「遠所古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注35 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要 (3)新ヶ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注36 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要 (1)高山古墳群・高山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注37 樋口隆康「峰山桃谷古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961
- 注38 杉原和雄「経塚と墳墓―丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について―」(『考古学雑

誌』第74巻第4号 日本考古学会) 1989.3

注39 杉原和雄「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」(『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会) 1981.3, 注38に同じ。

注40 注39に同じ。

2. 千代川遺跡第16次発掘調査概要

1. はじめに

千代川遺跡は、京都府亀岡市千代川町に所在する縄文時代後期から中世にいたる周知の複合遺跡で、丹波国府推定地や桑寺廃寺をも含んでいる。遺跡の範囲は、行者山北東麓に形成された扇状地のほぼ全域、千代川町一帯に及んでいる。

千代川遺跡の調査は、国道9号バイパス(京都縦貫自動車道)建設、府道千代川・北ノ庄線拡幅工事、宅地造成等により、過去15次にわたる調査が行われている。特に丹波国府推定地の西限を縦貫する国道9号バイパス路線内の調査では、国府と直接関連する遺構は検出されなかったが、緑釉陶器・墨書土器・石帯等、官衙や寺院にしか使用されない土器類や、建築部材とみられる加工木が多数出土した。

今回の千代川遺跡の発掘調査は、国道9号線バイパス以西の府道千代川・北ノ庄線が北ノ庄集落の北を迂回する目的で計画された「一般地方道北ノ庄・千代川停車場線道路特別改良事業」に伴うものである。当該地は千代川遺跡の範囲内にあたり、縄文時代から中世にかけての遺構の有無を確認するとともに、国府推定地の西方でこれを見渡せる高所でもあるところから、国府に関連する遺構の存在も想定されたため、事前に調査を実施するところとなった。

調査は、京都府土木建築部の依頼を受け、道路延長約550m・幅12mを対象に試掘調査(1,500㎡)・一部分的調査(1,000㎡)と分けて実施した。平成元年7月21日から15か所の地点で試掘調査(1,100㎡)を実施したところ、掘立柱建物跡の柱穴や溝・土坑等の遺構を検出し、縄文時代後期から中世にかけての遺物が多数出土した。この試掘成果から、京都府教育委員会・京都府土木建築部と再三にわたる協議を行い、遺構・遺物の集中する4地点(A～D)について約2,000㎡の面的調査を実施し、総調査面積は3,100㎡となった。

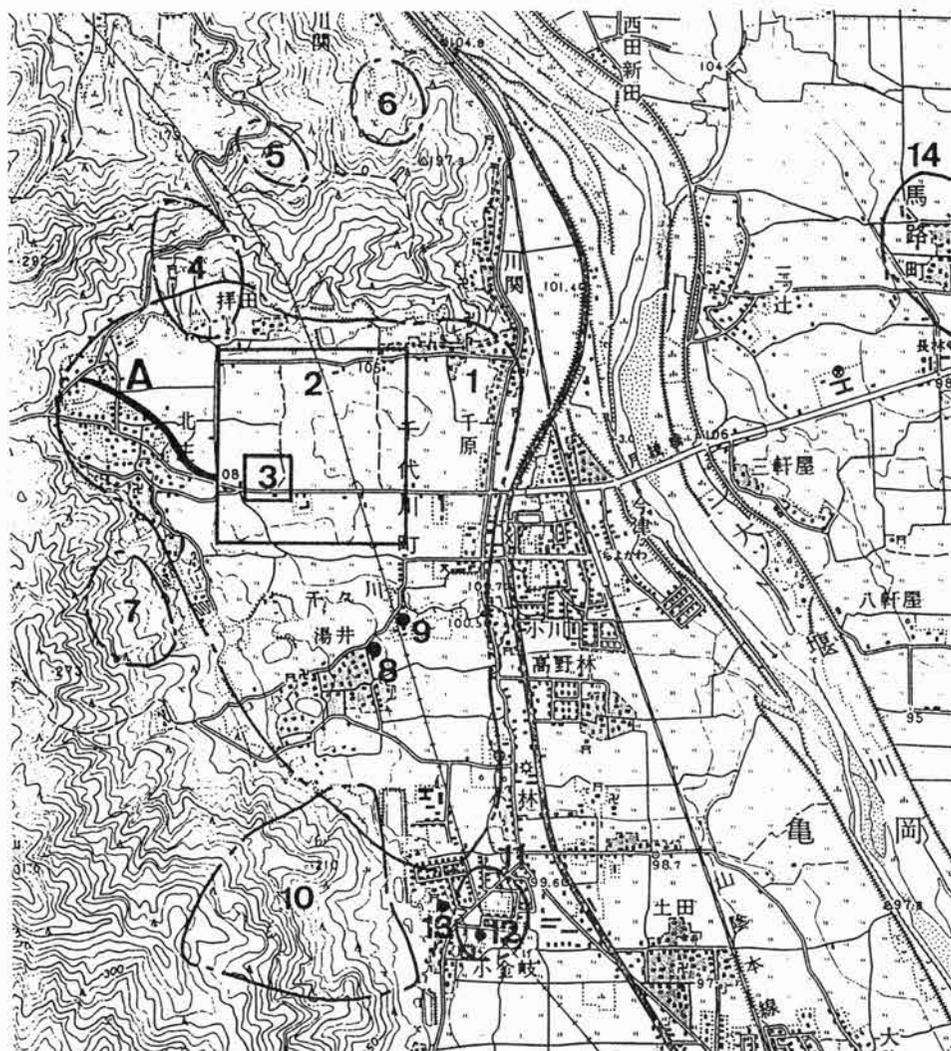
現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克と同調査員竹原一彦が担当し、平成2年2月28日にすべて終了した。

調査中は亀岡市教育委員会をはじめ、多くの関係諸機関から協力を得た。また、現地調査には真夏の酷暑、真冬の酷寒の中、学生諸氏・地元有志の方々の協力を得ることができた。記して感謝したい。^(注1)

2. 位置と環境

亀岡盆地は、古くより口丹波とよばれ、南は老ノ坂を介して山城国、西は清坂峠等を介して摂津国と接するなど、畿内と山陰を結ぶ交通(山陰道)の要衝としての位置を占め、丹波国府・国分寺等が置かれている。

千代川遺跡は、丹波高原の東南端に開けた亀岡盆地の北西部にあり、盆地を二分して南流する大堰川の西岸、JR千代川駅の西に広がる水田地帯、東西約1.4km×南北約2km



第49図 調査地周辺遺跡分布図

- A. 千代川遺跡16次 1. 千代川遺跡 2. 丹波国府推定地 3. 桑寺廃寺 4. 拝田古墳群
 5. 大法寺古墳群 6. 上川関古墳群 7. 北ノ庄古墳群 8. 丸塚古墳 9. 丸塚西古墳
 10. 小金岐古墳群 11. 馬場ヶ崎遺跡 12. 馬場ヶ崎1号墳 13. 馬場ヶ崎2号墳 14. 馬路遺跡

の範囲が遺跡と認識されている。遺跡は千代川町全域に広がる、旧石器～鎌倉時代にかけての大規模な複合集落遺跡である。

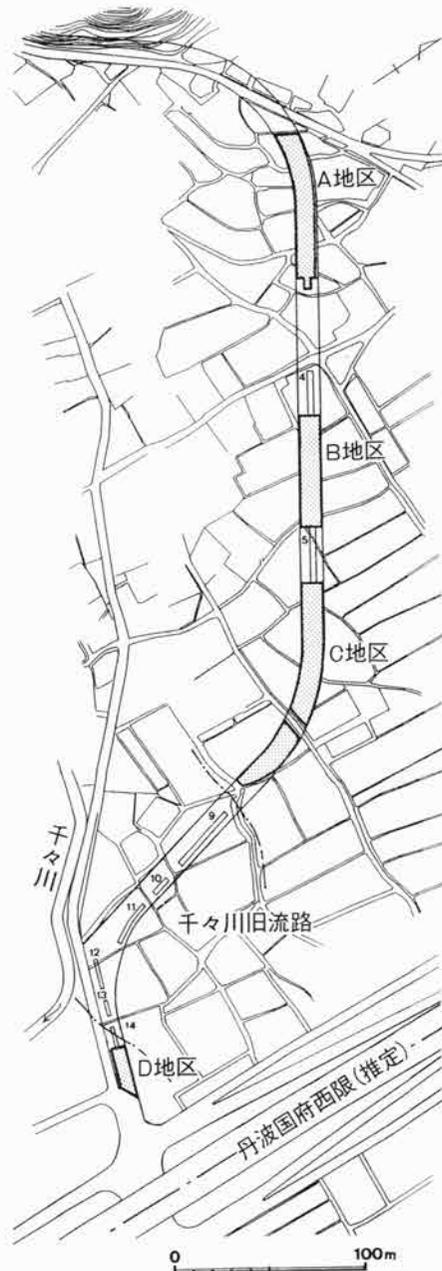
千代川遺跡周辺の遺跡について概観すると、旧石器時代では千代川遺跡のほかに、曾我部町南条遺跡、篠町篠窯跡群の西長尾A地点からナイフ形石器・有舌尖頭器が出土した。

縄文時代では千代川町拝田古墳群下層、大井町北金岐遺跡・小金岐古墳群下層から、後・晩期の遺物が断片的に出土している。同時期の遺構の検出は、現在のところ千代川遺跡第11次調査の溝跡例のみである。

弥生時代では、前期の拠点的な大集落として位置付けられる太田遺跡が千代川遺跡の南約3kmにある。太田遺跡は、推定直径約160mの大環濠をもつ環濠集落と考えられ、50数基の土墳墓がまとまって検出されたほか、無文土器や石戈など他地域との交易を物語る遺物も多数出土している。

古墳時代では千代川遺跡の北の丘陵部に、17基からなる拝田古墳群(古墳時代後期)が存在する。このうち9号墳では石室内に石障、16号墳では石棚・石障を設けている。石障あるいは石棚を設ける横穴式石室墳は行者山山麓に集中し、遺跡南部では小金岐76・77・112号墳で石棚、小金岐1号墳に石障、両方を合わせもつ鹿谷18号墳がある。これらはいずれも和歌山県や九州地域に多く見られるものである。

歴史時代では、千代川町に丹波国府が置かれたほか、桑寺廃寺も建立されている。亀岡盆地は、条里地割りのよく残った地域でもあり、千代川町付近でも条里界線・坪界線がほぼ東西南北方向に通されている。千代川町には、「国司牧・国主ヶ森・学堂・桑寺」など



第50図 調査区・試掘トレンチ配置図

国府にからむと思われる小字名が今に残り、方六町域が丹波国府と推定されている。

3. 調査概要

調査対象地は、西の丘陵裾部から南東方向に下がる延長約550m・幅12mの範囲が対象となり、東西両端部での比高差は約14mを測る。

試掘調査は、幅約3mのトレンチを対象地内の田畑15か所に設けて実施した。試掘トレンチ9～13の間では、中世遺物を含む砂礫層や泥質土層が広く堆積するところから、当該地区は千々川の旧流路と判断した。その他の試掘トレンチでは柱穴・溝跡等の遺構と遺物が存在したことから、遺構・遺物の集中するトレンチを中心に4か所で面的調査を実施した。調査区は、西部丘陵裾部をA地区とし、条里地割りの西限道路の東をB地区、更に東方に下った東西条里地割りの農道を跨ぐC地区、調査対象地の東端部をD地区とした。A・B両地区はすでに側溝工事が終了し、調査地内を横断するコンクリート製暗渠がA地区で2か所、B地区で1か所に認められた。

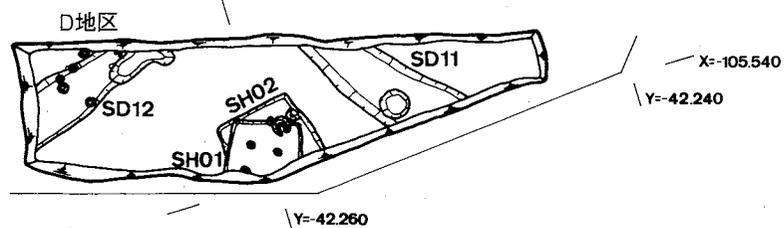
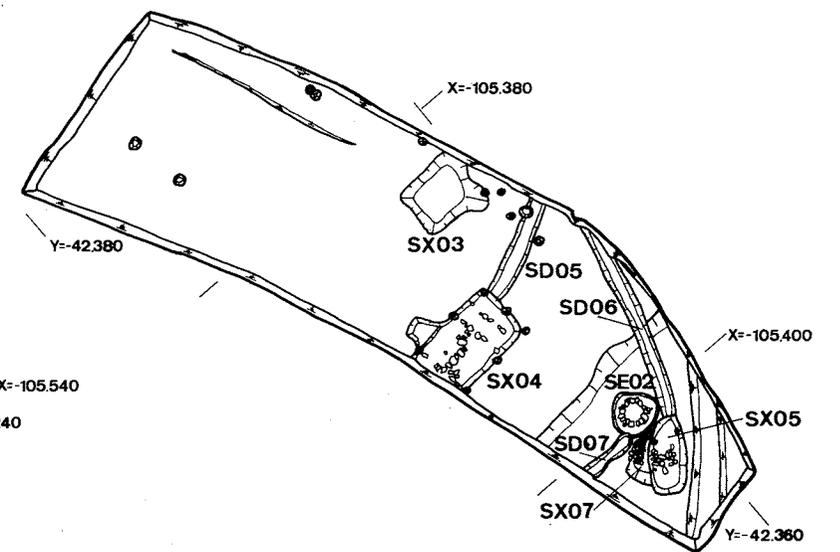
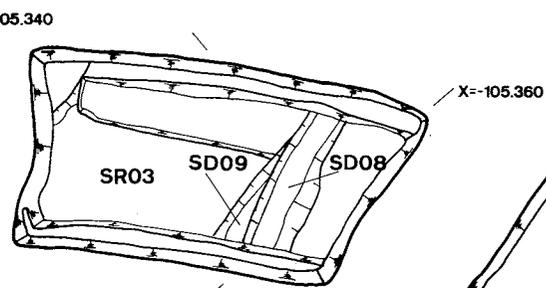
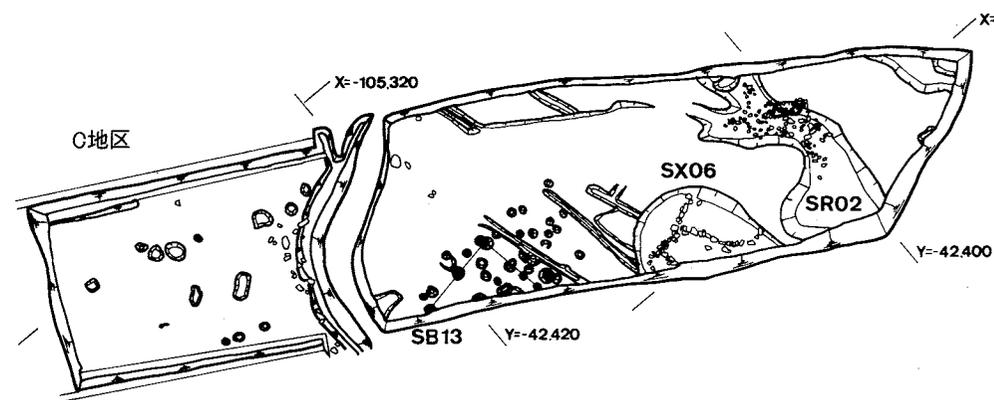
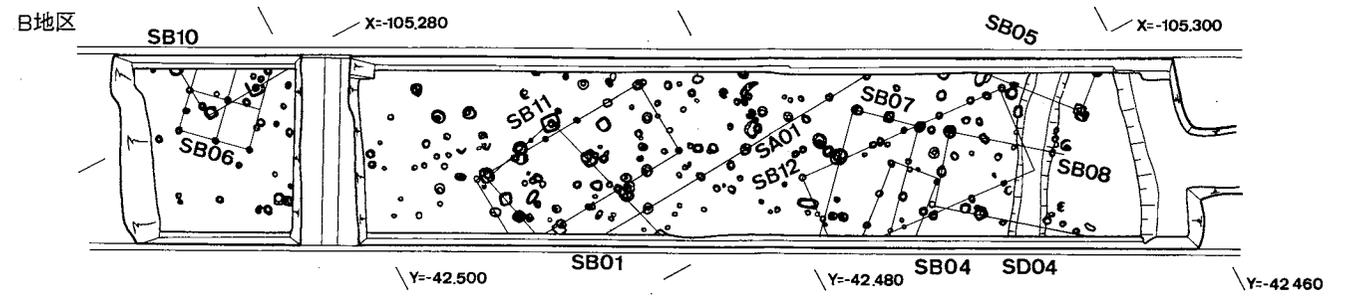
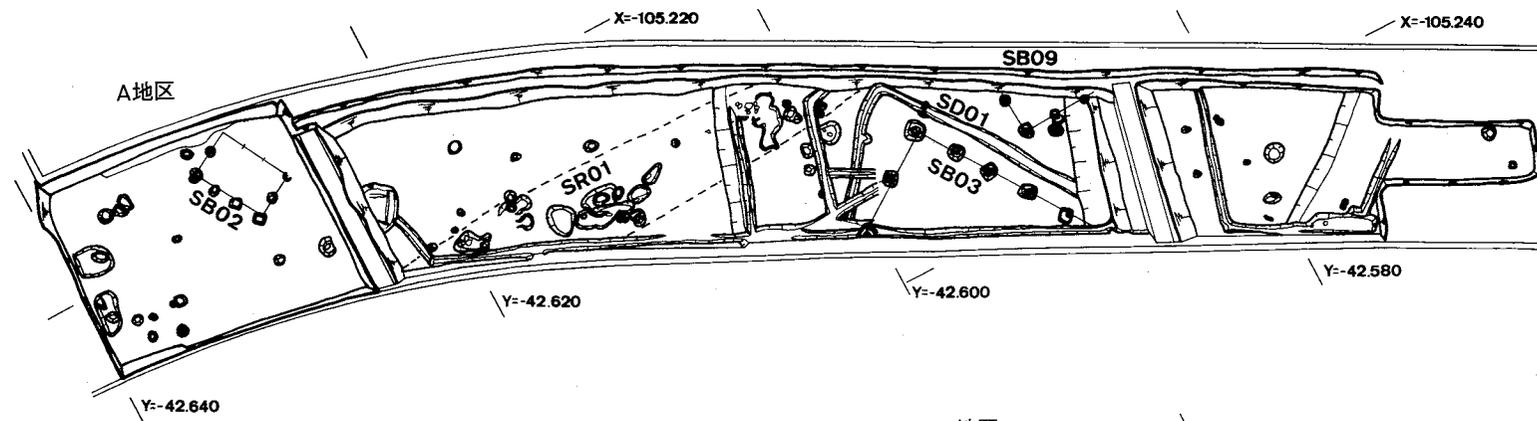
(1) 検出遺構

①A地区

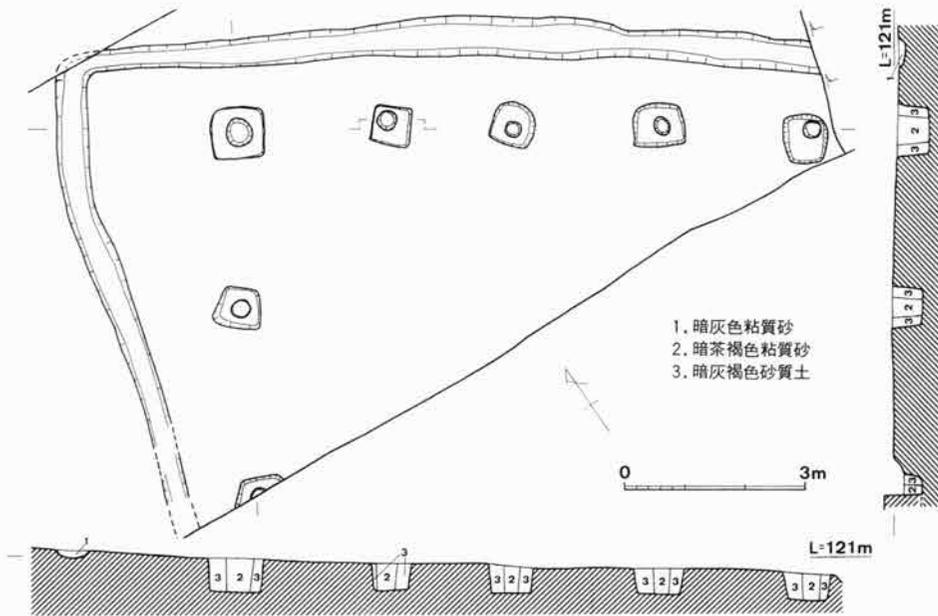
A地区は、丘陵の裾部に位置するところから、西から東方向へ4段に渡って急激に下がる階段状の地形が現在に残る。この階段状地形は調査で検出した地山面にも残り、各テラス部分には柱穴等の遺構が存在した。主要な検出遺構として、掘立柱建物跡3棟(SB02・03・09)、井戸跡2基(SE01・03)、流路跡(SR01)等がある。この調査区では、検出遺構が少ないものの、遺物の出土は豊富であったことから、上部遺構が後世に削平されている可能性が高い。

建物跡SB02 調査地西端部の最上段テラス、標高約123.8m付近から検出した掘立柱建物跡である。建物跡の規模は梁間2間(約3.0m)×桁行3間(約4.2m)とみられる。柱穴掘形は円形で、直径約40～50cm・深さ約15cmを測る。各柱穴間の心々間は、梁間が1.5m(5尺)、桁行は1.4mの等間隔を測る。建物跡の主軸方位はN-31°-Wを測る。出土遺物として、柱穴掘形内の須恵器小破片があるが、時期を確定するには至らない。建物跡の東側桁行柱穴列は、暗渠の攪乱によって一部が失われている。

建物跡SB03(第52図) 調査区中央部の下部テラス、標高約121m付近から検出した大型の掘立柱建物跡である。建物跡の南半部分が調査地外にのびるところから、全容は不明であるが、梁間2間(約6.0m)×桁行4間(約9.5m)以上の規模を持つものとみられる。検出した柱穴掘形は、一辺が70～90cmの方形プランをもち、深さは40cm前後を測る。各柱穴間の心々間は梁間が3.0m(10尺)の等間隔、桁行は2.2～2.5mの間隔でやや乱れている。



第51图 調査区平面図



第52図 A地区SB03実測図

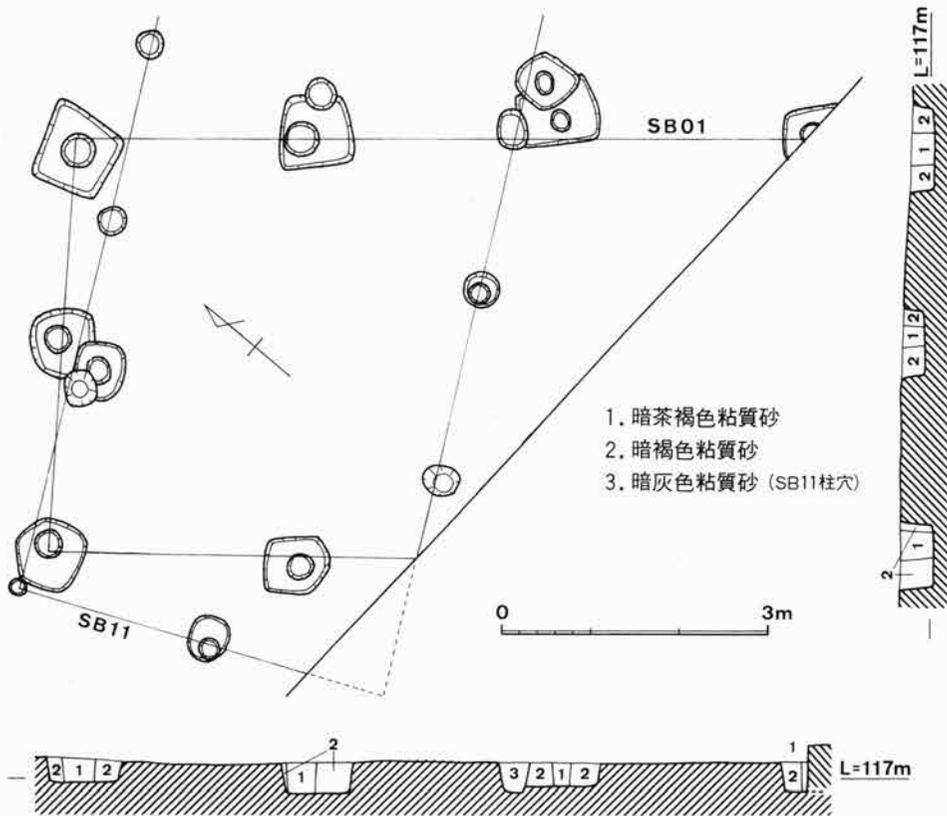
建物跡の主軸方位はN-34°-Wを測る。建物跡の周囲には幅約40cm前後の浅い素掘り溝が存在する。この溝は、北側の桁行柱穴列では約1.4mの間隔を置いて並走状態にあるが、西の梁間部分では1.4~2.4mの間隔を測る。この溝は、雨落ち溝とするより、上部テラスからの水の流入を防ぐための溝とみることができよう。出土遺物として、柱穴掘形内から須恵器片、溝SD01から須恵器(第61図3・11・12)がある。

建物跡SB09 調査区中央の下部テラス、SB03の北側で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の北部が調査地外にのびることから、東西2間(3.8m)×南北1間(2.0m)分を検出するに留まる。柱穴掘形は、一辺が50cm前後の方形掘形をもち、深さは約30cm程度である。建物跡の方位はN-3°-Wを取る。柱穴内からの出土遺物は見られない。

井戸SE01 調査区東部で検出した中世以降の野井戸跡である。プランは円形で直径約90cm・深さ約50cmを測る。出土遺物は見られない。

井戸SE03 調査地中央部西端で検出した井戸状遺構である。遺構の上部は攪乱によって大きく壊され、基底部付近の一部が辛うじて残っていた。検出した掘形は円形で、直径約2.5mと推定される。底部には直径約20cm・全長1.8mの丸太材が井桁状に組まれている。時期を確定する遺物はないが、中世以降の井戸跡と考える。

旧流路SR01 調査区中央部で東西に横断する旧河道の痕跡を検出した。河道幅は4m前後と推定する。この河道底には大小の不定形な凹みが随所にみられる。この凹みは水流



第53図 B地区SB01実測図

によって掘られたとみられ、一部の凹み内には土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・石製品など多数の遺物とともに、大小の花崗岩礫が落ち込んでいた。

②B地区

A地区の東、条里地割り西端の道路を越えた水田に設けた調査区である。試掘調査(第5トレンチ)では、トレンチ西端付近は砂礫が厚く堆積し、遺構・遺物はみられなかった。この砂礫層は堅く締まり、砂礫層が途切れる東部には黄褐色系のバイラン土が堆積している。柱穴・溝等の遺構は、このバイラン土上面で検出した。B地区は西から東に緩やかに下がり、標高は西部で117.5m・東部で116.3mを測る。調査区東端は後世に大きく削平を受けたとみられ、一段下がる東部は試掘調査で無遺構であることを確認している。

建物跡SB01 調査区中央部で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の南半は調査地外にのび、東西梁間2間(4.4m)×南北桁行3間(8.6m)分を検出した。柱穴掘形は方形で、一辺60~80cm・深さは30cm前後を測る。柱穴掘形の埋土は茶灰色系粘質土であり、柱痕跡(直径約30cm)部分はやや暗色の粘質土が認められる。柱穴掘形内から土器片

が出土したが、時期確定に至らない。建物跡の主軸方位は、N-13°-Wを取る。

建物跡 S B04 調査区東部で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の南半は調査地外にのび、東西梁間2間(2.7m)×南北桁行3間(3.7m)分を検出した。柱穴掘形は直径が30cm前後の不正円形で、深さは15cm程度である。柱穴掘形の埋土は暗茶褐色系の粘質土である。建物跡の主軸方位はN-40°-Eを取る。出土遺物はみられない。

建物跡 S B05 調査区東部、S B04の北側で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の北半は調査地外にのび、南北梁間1間(2.3m)×東西桁行3間(7.7m)分を検出した。柱穴掘形は方形で、一辺約50cm×深さ約15~20cmを測る。掘形の埋土は暗茶褐色系の粘質土である。建物跡の方位はW-50°-Nを取る。南側の桁行柱穴列では、重複して切り合う柱穴が存在することから、建て替えられた可能性がある。

建物跡 S B06 調査区西端で検出した総柱の掘立柱建物跡である。建物跡は、東西2間(4.0m)×南北2間(4.4m)の規模をもつ。柱穴掘形は円形で、直径約40cm・深さは20cmを測る。柱穴掘形の埋土は暗茶褐色系の粘質土である。建物跡の方位はN-44°-Eを取る。

建物跡 S B07 調査区東部で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡は南半部が調査地外にのび、東西梁間2間(3.3m)×南北桁行3間(6.2m)分を検出した。柱穴掘形は、一部に不正円形プランを認めるが、基本的には方形プランで、一辺40~60cm・深さ30cmを測る。柱穴の掘形埋土は黒褐色系粘質土である。建物跡の主軸方位はN-42°-Eである。

建物跡 S B08 S B07に接する東側で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡は、南北梁間2間(4.2m)×東西桁行4間(7.9m)分を検出した。建物跡の東部は後世の削平で柱穴を失っている。柱穴掘形は、S B07とほぼ同一の内容をもつ。建物跡の主軸方位はE-40°-Sである。

建物跡 S B10 調査区西端で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の南端隅を検出したのにとどまり、東西1間(2.8m)×南北1間(3.0m)分を測る。柱穴掘形は方形で、一辺が60~80cm、深さは20cm前後を測る。出土遺物はみられない。建物跡の方位はN-3°-Wである。

建物跡 S B11 調査区中央付近で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。南北梁間2間(4.3m)×東西桁行5間(10.3m)の規模を測る。柱穴掘形は円形で、直径は30cm前後、深さは20cmを測る。大部分の柱穴掘形の埋土は淡灰色系の粘質砂である。柱穴掘形内から瓦器碗片が出土している。建物跡の主軸方位はE-3°-Nである。

建物跡 S B12 調査区東部、S B11の東で検出した掘立柱建物跡である。建物跡は南北梁間2間(4.8m)×東西桁行6間(11.7m)の規模を測る。柱穴掘形は、S B11とほぼ同一の内容をもつ。建物跡の主軸方位はW-3°-Nである。

S A01 調査区の中央部を東西に横断する掘立柱の柵列である。柵列の各柱穴間は均等でなく、2.4～3.2mの間隔をおいて5間分を検出した。柱穴掘形は円形で、直径約30cm・深さ20cm前後である。掘形埋土は淡灰色系の粘質砂である。方位はE-3°-Nである。

S D04 調査区東部で検出した幅約1.8m・深さ約60cmの素掘り溝である。溝底は南から北に緩やかに下がり、調査地北端部で東に曲がる状況がみられたが、排水溝の存在により詳細は不明である。溝内から多量の土器の出土をみている。出土土器には第61図4・5・13～15・21にみる須恵器・土師器等がある。

③C地区

B地区の西、調査対象地が大きく南に振り、東西方向条里の農道を跨ぐ調査区である。調査区は畦畔・農道により3か所にわかれ、西からC-1・2・3と小区分する。この調査区では古墳時代前期と平安時代後期～鎌倉時代の遺構を検出している。C-1地区の標高は114.5m前後、C-3地区では113.0m前後を測る。

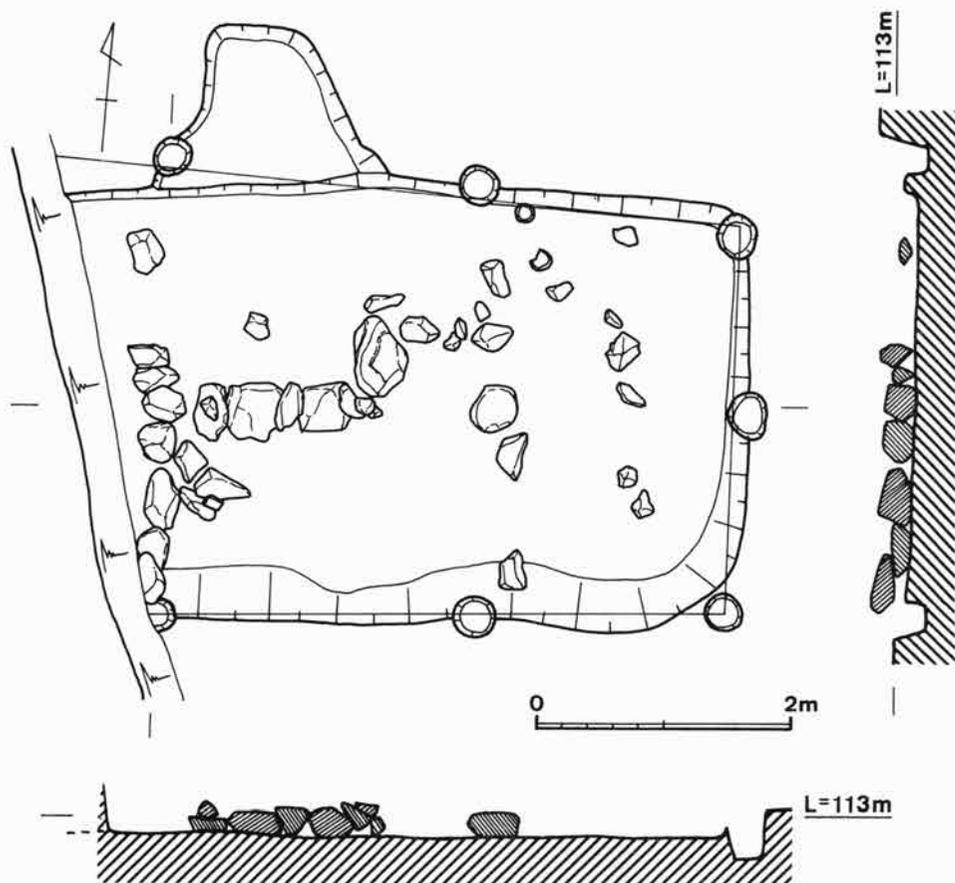
C-1地区では主な検出遺構として、掘立柱建物跡1棟(S B13)・配石遺構(S X06)・旧流路(S R02)、C-2地区では溝(S D08・09)・旧流路(S R03)、C-3地区では溝(S D05～07)・井戸(S E02)・配石遺構(S X03～05)がある。

建物跡S B13 C-1地区中央部で検出した掘立柱建物跡である。建物跡の南半は調査地外にのび、東西2間(4.7m)×南北2間(3.8m)分を検出した。柱穴掘形は円形で、直径約30cm・深さ約20cmを測る。建物跡の方位はN-9°-Wである。

配石遺構S X06 S B13の東で検出した配石を伴う大型土坑である。土坑は南北に長い楕円形を呈するが、南部が調査地外にあるところから詳細は不明である。土坑の検出分では、南北約7m・東西約6m・深さ約60cmを測る。土坑底は平坦で、3列の配石が認められる。北端部の東西方向の石列は直線的であり、人頭大かやや大型の河原石を2・3段、石垣状に積み上げている。この石列の北部では土坑ラインが円弧を描き、平坦な土坑底は浅く、10cm前後の深さで終わる。土坑底の2列の石列では石の積み上げがみられない。東側の石列は南部で東に振り、東端は土坑壁に接して終わる。遺物の出土は少ないが、中世に属する土器の出土をみた。

旧流路S R02 S X06の東で検出した南流する河川跡である。流路の北半は幅も狭く、数条の小規模な流れである。対する南半部は幅も広く、中央付近から急激に南へ下降し、北端と南端では約1.4mの比高差を測る。

溝S D08 C-2地区南端で検出した東西方向の素掘り溝である。溝幅は東部で2.2m、西部で3.2m、深さは90cmを測る。溝の西部は中央付近からやや南に振り、緩やかな円弧を描く。この円弧の状況は南の農道と並走する関係にある。溝の中層(第56図第7・8層)



第54図 C地区 SX04 実測図

から土師器(第61図22・25)の出土をみた。

溝SD09 SD08の下層から検出した東西方向の素掘り溝である。溝の東部はSD08と同位置にあり、西部ではSD08の北に位置する。溝の北肩は直線的であり、溝底での方位はE-9°-Nである。溝の堆積土の状況からみて、SD08と09はもともと同一の溝であり、SD09が埋まっていく段階で流路が南に振ったと考えられる。溝の下層(第56図第21層)から須恵質壺(第61図10)・土師質皿(第61図26)が出土した。

旧流路SR03 C-2地区の大部分が旧河川跡である。SD08・09は、この河川の埋没後、河川の南岸部に掘られている。河川幅は約14m、深さは1m程度である。下層から古式土師器(第60図1～4)が出土した。

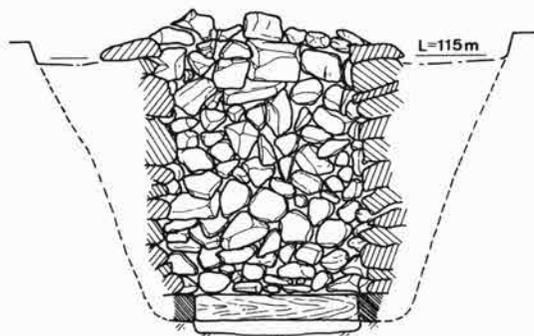
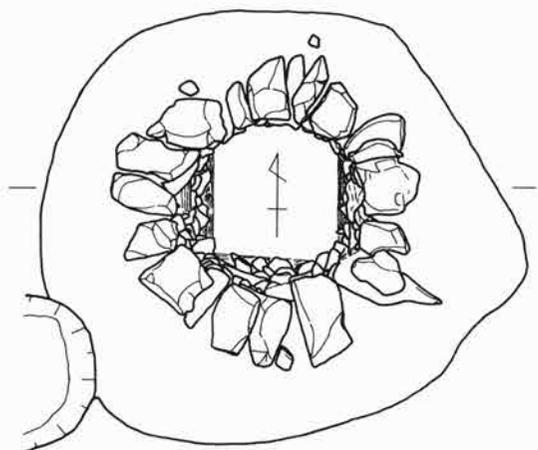
配石遺構SX03 C-3地区中央で検出した土坑状の遺構である。土坑掘形は方形を呈し、東南隅は外方に張り出す。東西約4.2m・南北約3.0m・深さ約20cmを測る。土坑底は中央付近がやや下がり、壁面はやや外上方に立ち上がる。土坑内には人頭大の河原石と瓦器

碗(第61図20)が各々数点存在していた。

配石遺構 S X04(第54図) S X03の南西約4 m付近で検出した、柱穴と石列を伴う方形土坑である。土坑の西部は調査地外にのびるが、東西約5.4 m×南北約3.5 m・深さ約20 cmを測る。土坑の中央北側に、長さ約1.2 m×先端部幅約0.8 mの浅い方形の土坑が取り付く。中心となる土坑の外淵部には、直径約30 cm・深さ約40 cm前後の円形柱穴が存在する。この柱穴は土坑を覆う建物跡に伴うものであり、南北梁間2間(約2.5 m)×東西桁行2間(2.5 m)以上の規模をもつ。土坑底は平坦で、拳大から40~50 cm大の河原石が4列に配されている。土坑底の東部に南北2列、西部で南北1列、中央部に東西1列の配石状況が認められる。土坑内から瓦器碗・土師質皿(第61図19・24)が出土した。

井戸 S E02(第55図) 調査区南部で検出した石組の井戸跡である。S X04の南6 mに位置する。井戸掘形は直径約2.5 mの不正円形プランであり、井戸底は検出面より約1.7 mの深さを測る。井戸本体は、坑底に一辺約15 cmの角材を方形に組み、その上の人頭大の河原石を円形に積み上げている。井戸の内矩は、底の胴木部分では85 cm、石組部分では90 cm

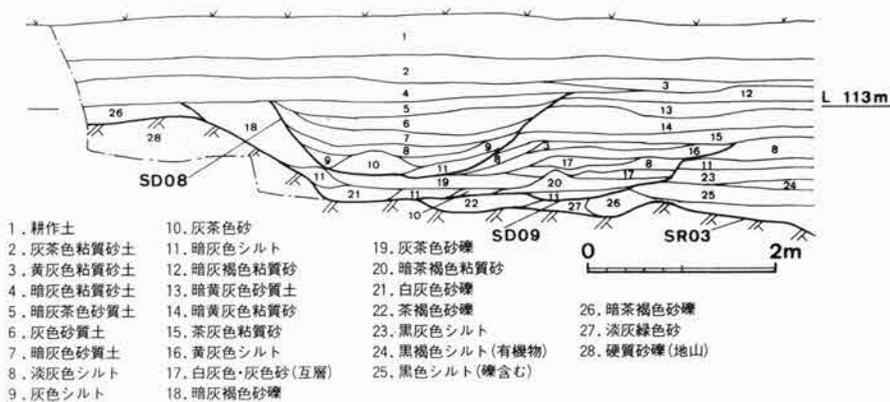
前後を測る。井戸内から瓦器碗・土師質皿(第61図19・23)、木製下駄(第63図2)等が出土した。



第55図 S E02 実測図

墓 S X05(図版第42-(2)) 調査区南端で検出した集石を伴う墓墳である。墓墳掘形は長楕円形を呈し、全長約4.2 m×幅約2.3 m、深さは約40 cmを測る。墓墳壁はなだらかに立ち上がる。墓墳の上面には、拳大~人頭大の河原石が方形に集積されていた。集石は、北東隅が失われているが、長さ約2.6 m×幅約1.6 mの規模を測る。墓墳東部の下層から鉄製釘(第62図11~14)・鉄製鎌先(第62図10)が出土した。

溝 S D05 S X04の東で検出した幅約1 mの浅い素掘り溝である。溝の西部はS X04に切られる。出土遺物はみられない。



第56図 C-2地区西壁南部土層断面図

溝SD06 SE02の東で検出した幅約1mの浅い素掘り溝である。溝の南部はSX05に切られる。瓦器椀・土師器の細片が出土した。

溝SD07 SE02の西で検出した幅約80cmの浅い素掘り溝である。溝の東部はSE02に切られる。出土遺物はみられない。

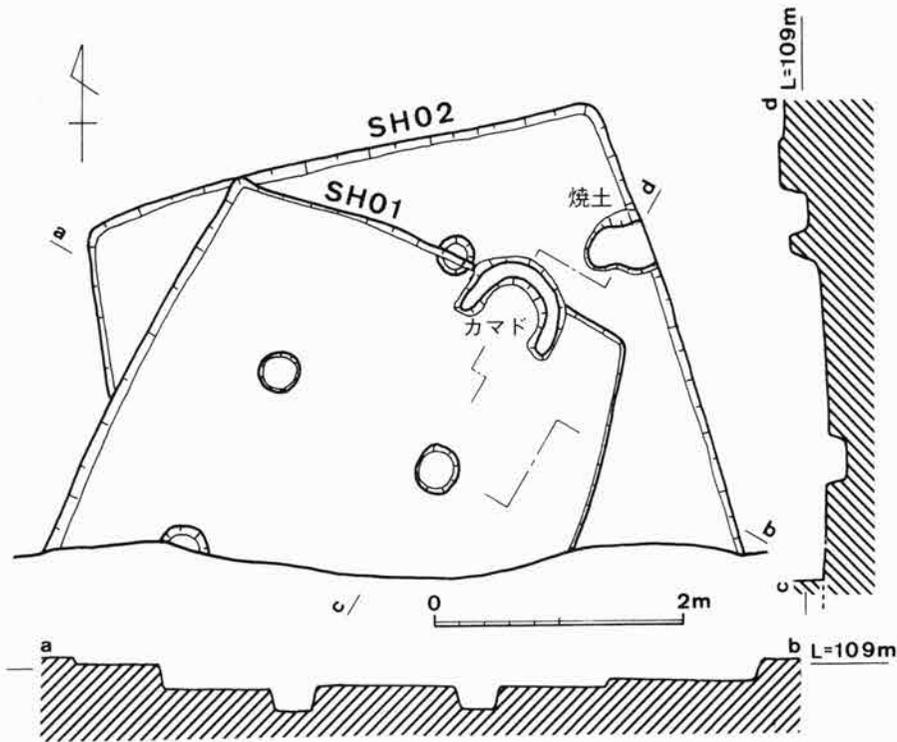
④D地区

調査対象地の最東端の調査区である。この調査区では、竪穴式住居跡(SH01・02)・溝(SD11・12)を検出したほか、縄文時代後期の遺物包含層(黒褐色粘質土層)の広がりを確認した。検出遺構は、縄文時代の遺物包含層を切って存在し、遺構検出面の標高は109.1m前後である。縄文時代の遺物包含層は5~10cmと浅く、下層には堅く締まった礫層が広がる。

竪穴式住居跡SH01(第57図) 調査地中央で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡の南部は調査地外にのび、全容は不明であるが東西約3.4m×南北4m前後(推定)の規模と考えられる。深さは約25cmを測る。主軸はN-23°-Eであり、北東壁の中央やや東に造り付けのカマドが存在する。住居跡の中央で3か所の柱穴を検出した。住居跡内の埋土から縄文土器片・古墳時代後期と見られる須恵器片等が出土した。

竪穴式住居跡SH02(第57図) SH01とほぼ同一場所で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡の南部は調査地外にあり、住居跡の大部分はSH01に切られる。方位はN-14°-Wであり、北壁は一辺約4.2m・南北約3.9m分を検出した。東壁の北隅付近に焼土が存在する。この焼土はカマドの痕跡の可能性が高い。

溝SD11 調査区東部で検出した南北方向の素掘り溝である。幅約3m×深さ約40cmを測る。溝中埋土から縄文土器・石器剥片(第62図3~5)に混じって古式土師器(第60図6~9)が出土した。



第57図 D地区 SH01・02実測図

溝SD12 調査区西端で検出した東西方向の素掘り溝である。幅約2～3m×深さ約20cmを測る。溝中埋土から縄文土器・弥生土器(第58図5)が出土している。

⑤ 試掘トレンチ

ここでは拡張調査(A～D地区)を行った試掘トレンチを省いて簡単に述べる。

第9～13トレンチ C～D地区間に設けた試掘トレンチである。耕作土下には暗灰色・青灰色系の砂層・シルト層が広がり、多量の湧水が各所でみられた。このことから当該地は大規模な自然流路跡と判断した。砂層及びシルト層中には摩滅した中世土器のほか、木製遺物(第63図1・3～6)・石器(第62図2・7・9)が出土した。

第15トレンチ A地区の東に設けた試掘トレンチである。遺構の検出はなく、出土遺物もわずかであった。

(2) 出土遺物

今回の調査では、縄文時代後期～中世の多種・多様な土器のほか、瓦・木製遺物・石製品等の出土をみている。

縄文土器(第58・59図) B・D地区から縄文時代後期の土器の出土をみた。B地区での出土は少なく、大部分はD地区の包含層中からの出土である。それらは磨消縄文系・沈線

文系・無文系・縄文系・条痕文系にわけられる。数量的には無文系が多数を占める。

磨消縄文系土器 口縁端部が肥厚し、波状口縁を呈する深鉢型土器であり、瀬戸内地方の中津式に相当する土器群である。口縁に沿って数本の沈線が描かれ、沈線間には帯状の縄文が残る。1は幅広の口縁端部が縄文帯となるが、口縁端からやや下がったところに縄文帯をもつもの(2・4・6・8)が大部分を占める。7は口縁端部外面に、不規則な刺突が施される。8は波頂部に尖孔し、周囲には縄文を施す。

沈線文系土器 10・12・15・16は、口縁部が「く」字状を呈し、肥厚した口縁部に施文する縁帯文土器である。10は山形口縁をもつ深鉢型土器であり、肥厚した口唇部に刻み目を施した後、太い沈線を配する。11は口縁内側を肥厚させ縄文を施した後、太い沈線を巡らせる。外面も縄文の後に沈線を配する。これは鳥取県布施遺跡に類例がみられる。12は口唇部と頸部に沈線を巡らせ、口唇部には縄文を施す。外面は縦の条痕調整の上に3本一組の沈線を配する。これは縁帯文土器の初期段階と考えられ、福田KⅡ式に属するとみられる。15は大型の波状口縁をもつ深鉢型土器である。「く」字状の口縁に太い沈線を配し、沈線内に刺突が施される。口縁外面には数本の沈線が垂下される。京都北部の平遺跡に類例がみられる。

無文系土器 内外両面とも無文で、多少とも表面に研磨がみられる深鉢形土器である。口縁部でみると、わずかに外反させるもの(19)、「く」字状に大きく外反させるもの(20・24)、端部を内傾させるもの(21)、端部をやや内湾させるもの(25)、端部を肥厚させるもの(23・27)がみられる。

条痕文系土器 37・41・44・46は外面のみ縦方向に条痕文を施す。38・39・43・47は横方向に条痕文を施す。40・42・45では外面縦方向、内面は横及び斜め方向に条痕文を施す。このうち45では外面の条痕に6本1単位の工具で、波状文的な条痕を描いている。

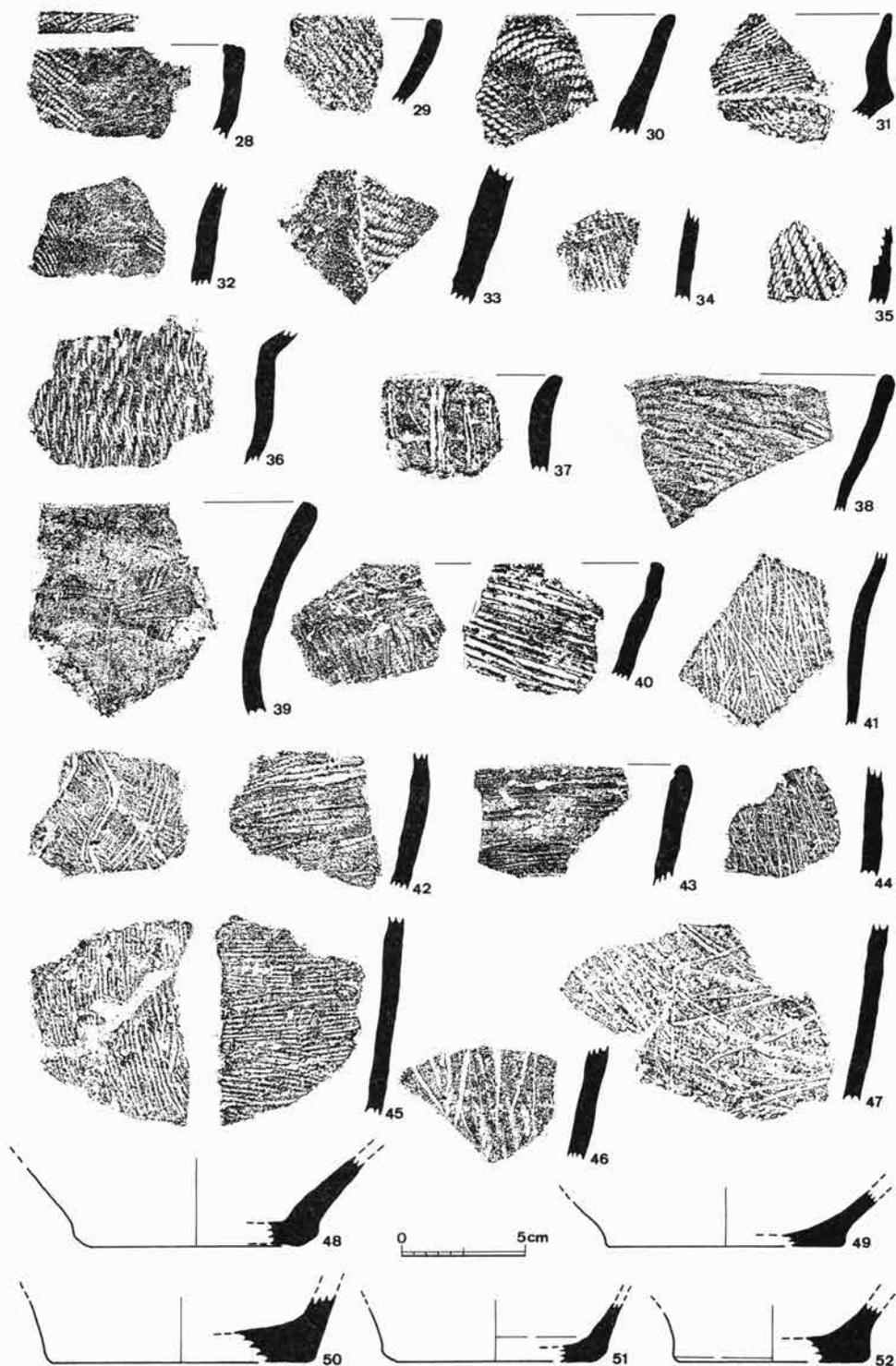
底部 断面形でみると、底部下端に面をもち、内湾ぎみに立ち上がった後外反するもの(48・51)、やや内湾ぎみに立ち上がった後外反するもの(49・52)、底部から直接外反するもの(50)がある。

弥生土器・古式土師器(第60図) 今回の調査では、布留式土器がC地区SR03(1~4)とD地区SD11(6~9)から出土したほか、D地区の包含層から弥生時代中期の壺(5)の口縁が出土している。

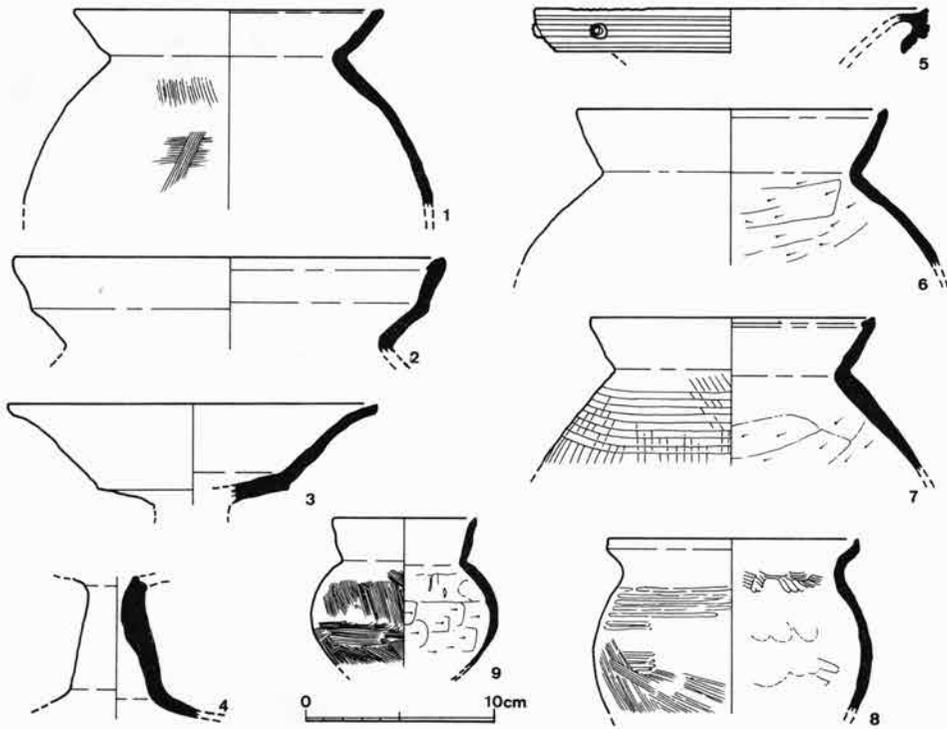
壺 1・6・7は、口縁端が「く」字に外反し、端部は内側に肥厚させる。いずれも体部下半を欠くが球形に近い体部であり、外面はハケ目調整をする。2は二重口縁をもつ壺である。口縁端部は内側に肥厚する。3・4は高杯の杯部と脚部である。杯部は、底部と口縁部の境に明瞭な稜線をもち、口縁部は大きく外反する。脚部はアクセントをもって外方



第58図 縄文土器拓影(1)



第59図 縄文土器拓影(2)

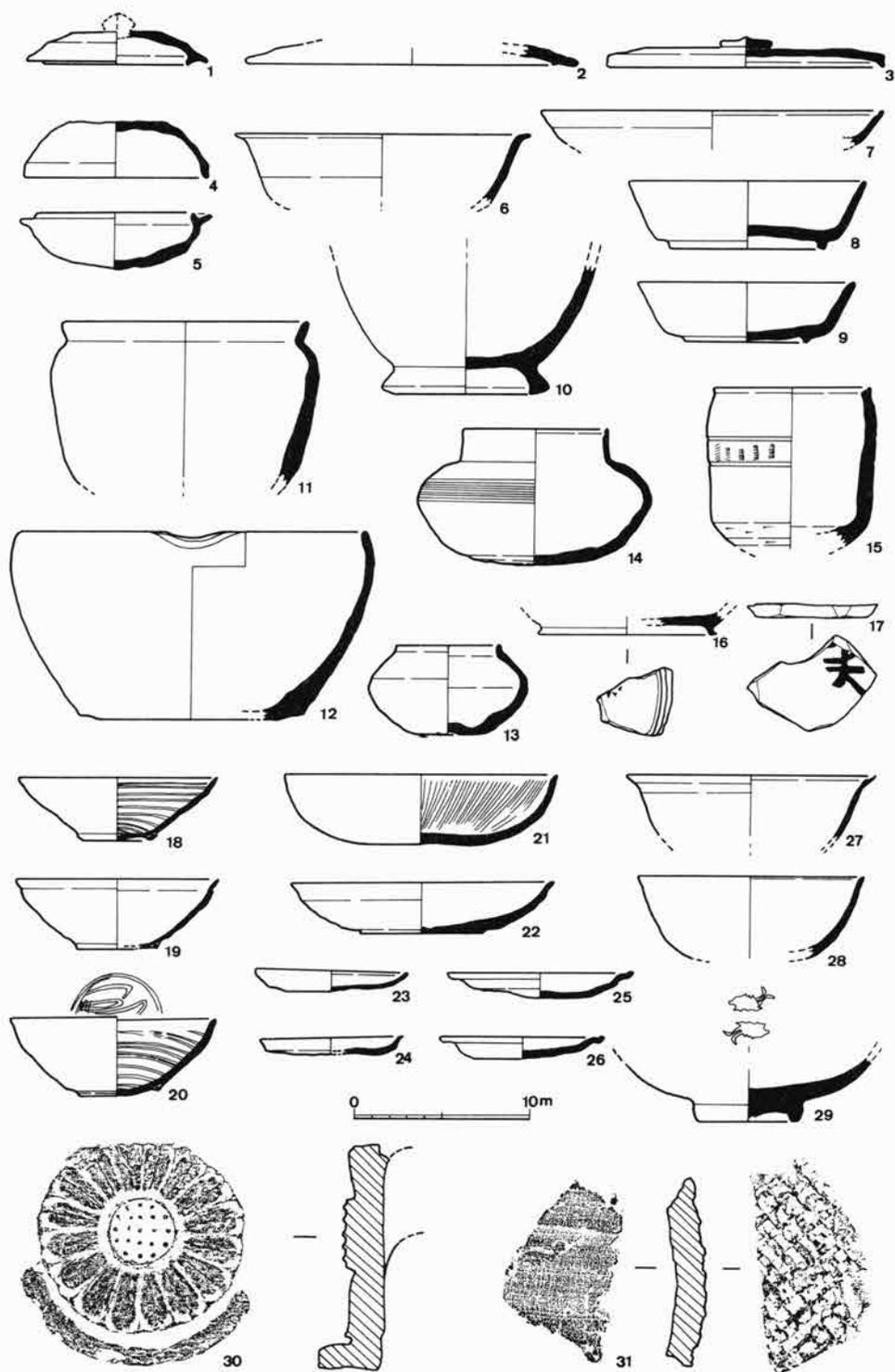


第60図 出土遺物実測図(1)

に大きく開く。8は小型の甕である。頸部がなだらかに外反する口縁の端部は、上方へつまみ上げ、とがりぎみに終わる。9は小型丸底壺である。球形の体部に直立ぎみな口縁が付く。外面上半はタテハケ、下半はヨコハケである。

5は、広口壺の口縁である。口縁端部は上下に肥厚させ、幅広の端面には4条の擬凹線を施す。また、この端面には竹管を押した円形浮文をもつ。

須恵器(第61図1~17) 1~3は、宝珠形つまみ、擬宝珠様つまみが付く蓋である。このうち、1・2には内面に返りが付き、1では返りの先端が接地する。1はB地区S B01付近の包含層、2はA地区包含層、3はA地区S D01の出土である。4・5は杯身と杯蓋であり、4はB地区S D04下層、5は上層からの出土である。6は高台の付く椀である。口縁端部は外方に屈曲して丸く終わる。皿(7)は、口縁端部内側に沈線状のアクセントをもつ。この皿は、土師器を模倣したものとみられる。8・9は高台が付く杯である。直立する短い高台が、底部端の内側に貼付される。6~9はA地区中央の包含層からの出土である。壺(10)は、底部に「ハ」字状の高台が貼付され、高い高台は内端面で接地する。C地区S D09下層の出土である。壺(11)は肩の張った体部に短く外反する口縁をもつ。鉢(12)は内湾する口縁に片口がつくられる。この壺と鉢は蓋(3)と供伴する。13・14はB地区S D



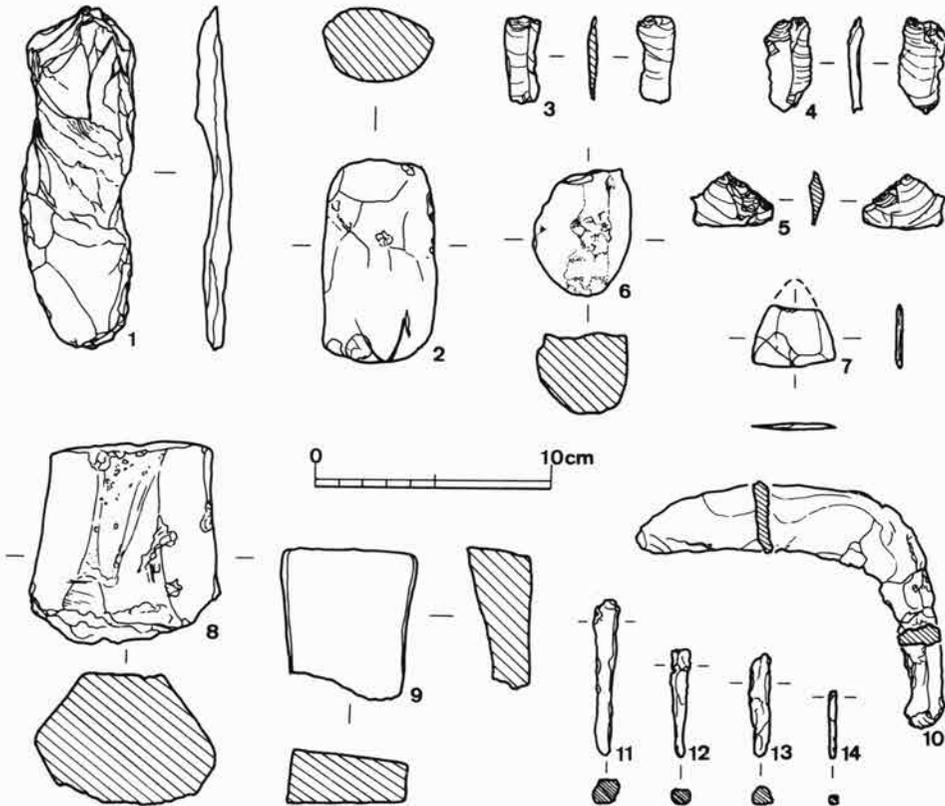
第61図 出土遺物実測図(2)

04出土の短頸壺であり、13は有蓋である。ともにB地区S D04出土であり、13は中層、14は上層の出土である。15は、筒状の体部とやや内湾する口縁部をもつ。体部中央外面には2条の沈線に画された文様帯があり、刺突文が施される。底部外面はヘラケズリを行う。B地区S D04下層の出土である。杯(16・17)には、底部外面に墨書がみられる。いずれも破片であるため文字の判読は難しいが、17では「□夫」と読み取れる。

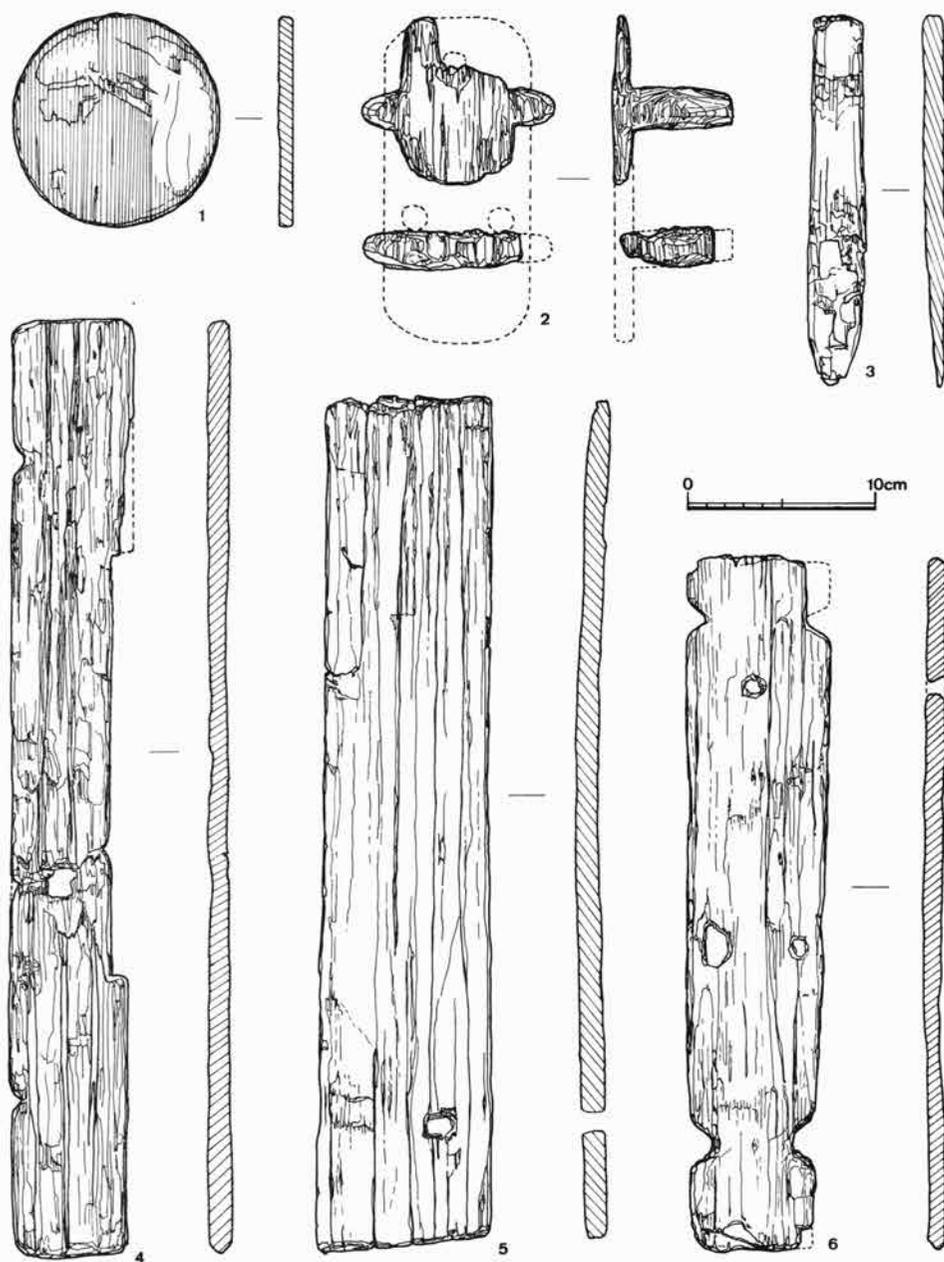
土師器(第61図21~26) 椀(21)はB地区S D04の中層出土である。口縁端部は尖りぎみに終わり、内面には放射線状の暗文を施す。椀(22)は、糸切り底である。C-2地区S D08より出土した。皿(23~26)のうち、25・26は「て」字口縁をもち、直径は10cm前後である。25はC-2地区S D08、26はS D09からの出土である。

瓦器(第61図18~20) C地区出土の瓦器椀である。丸底の底部に断面三角の張り付け高台をもつ。内面には荒い暗文が施される。18はS E01、19はS X04、20はS X03からの出土である。

輸入陶磁器(第61図27~29) いずれも包含層出土の青磁椀である。29の見込みには2匹



第62図 石製品・金属製品



第63図 木製遺物実測図

の魚の印刻があり、龍泉窯の製品とみられる。この他にも同窯産とみられる青磁碗の破片が10数点出土している。今回の調査では、白磁の出土はあまりみられない。

瓦(第61図30・31) 今回、A・B両地区から数点の瓦の出土をみた。30は単弁16葉蓮華文軒丸瓦である。中心部には、21個の小さな蓮子が直線的に配されている。平瓦(31)は、

桶巻き造りであり、内面には細かい布目、外面は細かい格子目のタタキを行う。

石製品(第62図1～9) 少量であるが、石器・石製品の出土をみた。1は、B地区包含層出土の、粘板岩製の打製石斧である。一部に細部調整を加えるが、全体的には荒い調整のみで、未完成品とみられる。2は、第10トレンチ出土の蛤刃石斧である。3～5は、D地区縄文土器包含層から出土したチャート製の剝片と削器である。3・4は縦長剝片で、細部調整はみられない。5は、横長剝片の片側縁に裏面からの細部調整によって、刃部を作り出した削器である。6は、B地区S D04出土の敲石である。7は、第11トレンチ出土の磨製石鎌である。8はA地区S R01, 9は第9トレンチ出土の砥石である。

鉄製品(第62図10～14) C地区S X05出土の鎌先(10)と釘(11～14)である。鎌は、刃部に対して柄がやや外に開き、柄の先端は刃部方向へ鈎状に小さく折れる。釘は、身部が角柱状であり、厚みにおいて大小2種がある。

木製品(第63図) 1は、第9トレンチ出土の曲物の底板である。片方の板面の周縁部には、側板(厚さ5mm)を乗せた痕跡が残る。底板と側板の結合法は不明である。2は、C地区S E02出土の連歯下駄である。鼻緒孔の前壺はやや左によせられている。3は、第9トレンチ出土のヘラ状木製品である。4は、第11トレンチ出土の用途不明の木製品である。全長49.7cm・幅6.2cm・厚さ1.2cmを測る。一方の側縁中央部には、長さ22.3cm・幅約1cmの仕口をもつ。もう一方の側縁には、2か所に山形の切り込みが、34cmの間隔をおいて存在する。板面には、中央からやや偏って、方形の穴が開けられる。他の部材と組み合わせて製品を構成するものであろう。6は、第9トレンチから出土した田下駄である。全長37.0cm・前部幅7.4cm・後部幅6.5cm・厚さ1cmを測る。両端の小口は未調整で、切り折りの痕を残す。足板の両端の左右に三角形の切り欠きをもつ。3か所の鼻緒孔は、前方に偏って存在する。

4. ま と め

今回の調査では、縄文時代から中世に至る複数の時期の遺構・遺物が検出され、大きな成果が得られた。この成果は、これまでの15次にわたる千代川遺跡の発掘調査と同様に、域内に推定される丹波国府を考える上で、大きく寄与するといえる。特に、国府域外からまとまった建物跡群を検出したことは、少なからず貴重な資料となる。しかし、各資料は多くの示唆を含むだけに、検討課題も多い。今後、各方面から検討されることを期待して、ここでは過去の調査成果とあわせ、遺跡の変遷を追いながらまとめとしたい。

縄文時代 今回の調査では遺構の検出はなく、後期前葉頃を中心とするまとまった土器が出土した。土器分布の中心はD地区にあるが、B地区でもわずかながら認められる。千

代川遺跡では、^(注2)第2・^(注3)第9・^(注4)第11・^(注5)第13次調査で縄文土器等が出土しているが、遺構検出は第11次調査の溝(後・晩期)だけである。縄文時代後・晩期に、当地に集落が存在したことはほぼ確実であるが、住居跡が検出されていないことから、集落の立地場所を特定できていない。D地区出土の土器は、表面の摩滅がほとんどみられず、出土量も多いところから、集落は今回の調査地周辺に存在するともみられよう。さらに、中期初頭の土器片が出土したことは、更に遡る時期の集落が存在する可能性をもつ。

弥生時代 これまでの調査で前期～後期の土器が出土しているが、主な遺構としては第2次調査で後期の竪穴式住居跡1基、第6・^(注6)第7・第11次調査では中期後半の方形周溝墓を検出している。同時期の集落については、おおよそ丘陵裾部に存在し、集落から下がった平地に墓域がつくられたとみれよう。

古墳時代 古墳時代の遺構としては、C-2地区検出の自然流路(S R03)とD地区の2基の竪穴式住居跡(S H01・02)だけである。遺物面では、包含層・遺構混入物としての土器が出土したが、量的には少ない。S R03は古墳時代前期の河川跡であり、出土した布留式土器には畿内系と在地系の2種が混在する。比率の上では、畿内系が大部分を占めるが、二重口縁をもつ甕(第60図2)に代表される在地系の土器はわずかである。竪穴式住居跡は、一度建て替えられたものであり、住居跡にはカマドをもつ。

周辺の調査では、第2次調査で古墳時代前期～後期の竪穴式住居跡4基、第13次調査で前期の自然流路・土坑を検出している。第2次調査の竪穴式住居跡のうち1基がカマドをもち、S H01・02は時期的にみても同じ後期と考えられる。

これまでの調査では、千代川遺跡内でも比較的高所となる丘陵の裾部から住居跡が検出されている。このことから、歴史時代以前では、遺跡の北及び西に広がる丘陵裾部付近が集落の場として選地されたものとみれよう。

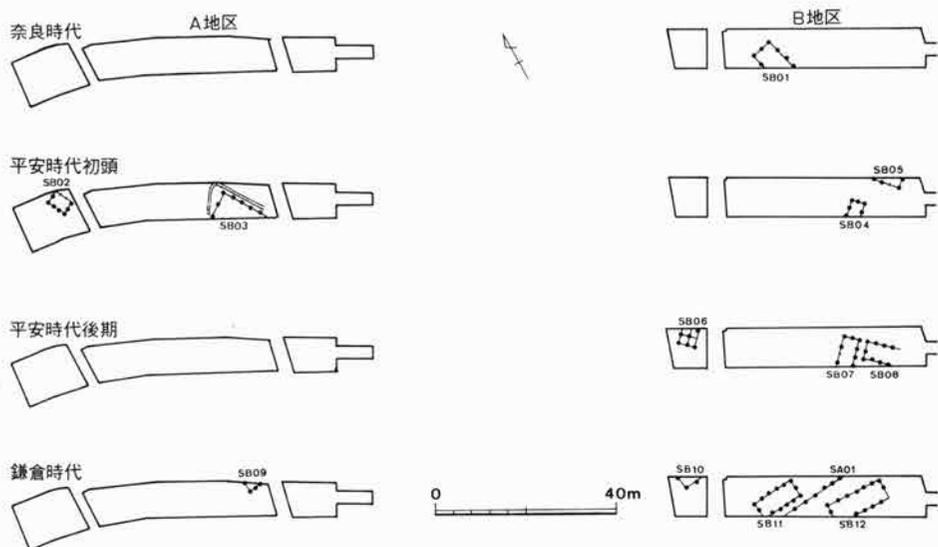
奈良時代 A・B両地区から同時期に属する土器が出土したが、遺構としてはB地区で建物跡1棟(S B01)、溝(S D04)を検出しただけである。S B01は、全容は不明であるが、今回検出した建物跡のなかでは、大型の建物跡である。柱穴内から時期確定できる遺物は出土していないが、丹波国府西限部での調査となった第12・^(注7)第13次調査検出の建物跡群とはほぼ同じ方位関係にあることから、8世紀中葉頃の建物跡とみることもできようが、詳細は不明である。S D04は、出土土器の年代観から、6世紀末～7世紀後半とみれよう。この溝と同時期の遺構は他にないが、溝の北端が東方へ曲がる可能性があることから、この溝は集落内を区画する溝とみられる。溝の東部に何らかの遺構が存在したと考えられるが、現在の地形は後世に大きく削平を受けていることから、確認することができない。

今回の調査では、瓦を葺いたとみられる建物跡を検出していないが、包含層から白鳳時

代の軒丸瓦(第61図30)のほか、平瓦片の出土をみている。この軒丸瓦は、桑寺廃寺の調査(第6・7次調査)でも出土していることから、当該地周辺に桑寺廃寺に関連する何らかの施設が存在する可能性もあろう。

平安時代 今回の調査では、A・B両地区から建物跡群を検出したほか、C地区から条里に関連する溝を検出することができた。建物跡群は、主軸方位から大きく2群にわかれ、時期差を反映したものであろう。平安時代初頭とみる建物跡群には、A地区のSB02・03、B地区のSB04・05の4棟である。SB03は大型の建物跡であるが、他の3棟は比較的小規模な建物跡である。平安時代後期の建物跡は、B地区で検出したSB06~08の3棟だけである。SB06は倉庫とみられ、各時期を通じて唯一の検出例である。SB07・08は近接する建物跡であり、東西棟(SB08)と南北棟(SB07)にわかれる。SB07の北側梁間柱穴列とSB08の北側桁行柱穴列は一直線に通り、建物跡が方形区画的に配置されている状況がみられる。このような整然とした建物跡の配置状況は、一般集落ではみられないことから、官衙的な要素の強い建物跡とみれよう。

丹波国府西限部で実施した第12~15次調査^(注8)では、多量の墨書土器・石帯が出土するとともに、国府域外にあたる地点(西部・西端部北域)から建物跡群が検出されている。まだ、国衙の建物跡とみられるものの検出はないが、ほぼ国府跡の存在は確実視されている。今回を含め、方六町の国府域外にも多数の建物跡群が存在することから、国府域外には国府に関連した建物跡群が広範囲に存在したことが確実となった。今後、国府域内外での調査が進むことにより、今回検出した建物跡群の詳細な性格が判明していくものと期待する。



第64図 A・B地区掘立柱建物変遷図

C-2地区のS D09は、直線的に東西にのびる溝であり、その延長線上には現在に残る条里地割りが存在する。出土した土器から、平安時代後期の年代観が得られる。付近には「出口」の地名が残ることから、国府から西へ向かう古丹波道が存在した可能性があり、S D09は、この道路の北側側溝とみることもできる。南のC-3地区では砂礫層が広がり、溝を検出することがなく、南側溝は現道路下に存在するものと推定される。

鎌倉時代 調査対象地全域で遺物が出土したほか、主な遺構として、A～C地区から掘立柱建物跡群(S B09～13)・柵列(S A01)、井戸(S E02)・墓(S X05)・配石土坑(S X03・04・06)を検出した。また、検出したこれらの遺構はその主軸方向を、東西南北に取っている。このことから、当該地付近ではほぼこの時期から、建物跡の配置等に条里地割りの規制が入ったものとみれよう。建物跡のS B11とS B12の間には敷地内を区画する柵列(S A01)が東西に走り、この柵列によって両建物跡は南北にわかれる。C地区でみられた配石遺構は、詳細は不明ながら、半地下式の貯蔵施設とみることもできよう。C-3地区S X04では、上部施設としての建物跡が存在しており、土坑の一部には入り口とみられる浅い土坑状の施設が付けられている。また、C-1地区S X06では、土坑壁の一部に石垣状施設がみられる。土坑内の配石は、貯蔵物の間仕切り施設とみれよう。井戸・配石遺構から出土した土器は、13世紀中頃の年代観を持ち、B地区等で出土している輸入陶磁器類もほぼ同時期のものである。

この時期に属する建物跡群等の検出遺構は、現在のところ丹波国府と密接に関連する可能性は低い。承安4(1174)年の神護寺領『吉富庄絵図』に「国八町」の記述や建物跡が描かれているところから、丹波国府は平安時代末頃には千代川の地から大堰川対岸の屋賀へ移っていたとみられている。このような状況等から、今回の調査で検出した鎌倉時代遺構は、それまでの国衙関連の集落から、一般的な集落へと変容した時期の遺構とみられよう。

以上、縄文時代から鎌倉時代の千代川遺跡を、今回の調査結果をもとにしてまとめてみたが、調査範囲が限られていたため、個々の遺構に関して不明な点を残したままの報告となった。当該地の調査では、国府に関連する成果の期待が高くとともに、国府域内での調査が望まれているところである。今回、国府に関連した建物跡群の配置状況を、国府域外の西部で広範囲にわたって調査できたことは、今後、丹波国府を解明していく上での手がかりとなる。

(竹原 一彦)

注1 調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。

俣野ふじを・俣野利江・山内きくの・山内タカ子・山本美代子・野々村礼子・松本はつる・松本菊栄・高橋一義・八木きみ・俣野静子・田畑光雄・松本芳雄・俣野和子・俣野たか子・松本

文代・長田康平・藤本城次・山本正敏・郡司佳代子・田鶴谷京・白井真澄・山口浩章・入舟弘幸・廣瀬由美子・岡本竜之・水口清文・山本和之介・中岡和男・小関裕之・堤 詔康・武田晴樹・高木優子・横川早苗・本田 香・中尾友子・福田倫子・三澤繁忠・南 彰・香川英知・福田美枝・牧澤直也・和田法明・恒松 理・山本浩史・長関達哉・橋本正博・荻野富紗子・牧野當子・横谷領子

- 注2 村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注3 森下 衛ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注4 樋口隆久ほか「千代川遺跡第11次発掘調査概報」(『亀岡市文化財調査報告書』第15集 亀岡市教育委員会) 1987
- 注5 鶴島三壽「昭和62年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注6 森下 衛ほか「千代川遺跡6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注7 森下 衛「昭和61年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注8 ①鶴島三壽ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
②鶴島三壽ほか「国道9号バイパス関係遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

3. 伏見城跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都市伏見区毛利長門西町に所在する京都府総合教育センターの講堂棟(仮称)の建設に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて実施したものである。調査は、平成2年10月29日から平成3年2月27日まで行った。調査面積は約1,000㎡である。現地調査は当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美と同調査員柴 暁彦が担当した。発掘調査を実施するにあたっては、京都府総合教育センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所の方々の協力を得た。また、調査期間中は調査補助員、整理員の援助があった。^(注1)記して謝意を表す。なお、調査に要した費用は全額京都府教育委員会が負担した。

2. 調査経過

発掘調査は、表土及び近・現代の整地土を除去したのち、遺構検出作業に入った。調査対象地は昭和初期に菊花女学校の敷地になっていたため、調査前から攪乱が及んでいることが予想された。調査地東半部では、校舎の基礎による攪乱で遺構が削平されていたが、西半部分は東山丘陵の傾斜面の約1mの堆積土によって保護されていた。

3. 歴史的環境

伏見城は豊臣秀吉により文禄3(1594)年から造営が始まった。しかし、文禄5(1596)年に伏見一帯を襲った大地震により崩壊したため、秀吉は伏見城を木幡山に急ピッチで造営し、政治・文化・軍事の中心となる城とした。これが世に知られる伏見城である。^(注2)その後、慶長3(1598)年には秀吉は同城で他界し、同5(1600)年には関ヶ原の合戦で西軍方の攻めにより落城、焼亡するが、この合戦で勝利をおさめた徳川家康がすぐに城を再建する。しかし、元和元(1615)年から始まる大坂冬・夏の陣で豊臣氏が滅亡すると伏見城の重要性は失われ、同5(1619)年には廃城が決定された。同9(1623)年3代将軍家光により廃城された。廃城後、その跡地に桃の木が植えられ



第65図 調査地位置図 (1/75,000)

たことから、後世に伏見城約30年間の栄華の時期を「桃山文化」と呼ぶようになった。^(注3・4)

現在、伏見城下を記した「桃山城下地図」が伝世している。江戸時代に描かれたと言われている。もう一つ天明元年の紀年銘が入ったものがある。それらを現在の地形に対照させてみると、松平、島津、毛利、堀尾氏などの大名の名前があがってくる。しかし、絵図の縮尺は不同であり、発掘調査によって確定した例はない。また、付近の町名に冠されている毛利長門、筑前などは明治時代に付されたものであり、必ずしもその場所に大名が住んでいたとは言えない。今回の調査地は絵図面によると毛利氏の下屋敷の想定地にあたる。

4. 調査概要

(1) 基本層序(第66図)

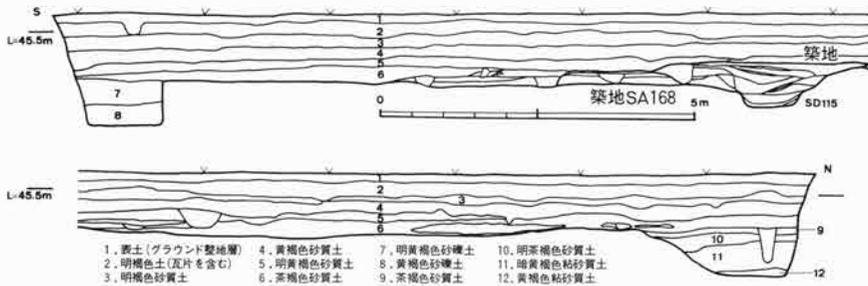
調査地は東山丘陵の一角に位置する。基盤層は大阪層群である。調査区東側は、約5cmグラウンド整地土を除去すると、直下に桃山時代の遺構面が広がっている。調査区西側は、グラウンドの整地層下に近・現代の層が約40cm堆積しており、第6層以下が桃山時代の整地層となっている。この時代の整地層は調査区全体に一律に堆積せず、また場所によっては整地土の違いが窺える。部分的に整地には下層の白色粘土を利用し、約10cmの厚さで盛土している。焼土層は第6層上面で確認されたにすぎない。

(2) 検出遺構(第67図及び第68図)

今回の調査では、第67図及び第68図で扱う遺構以外に上層の検出遺構があるが、共伴遺物はなかったため割愛する。遺構番号は検出した遺構順に001から通し番号を付した。なお、礎石建物跡関連遺構は、便宜上001から通し番号を付したが、一部番号が重複する。

検出した遺構は調査区南西部に集中し、大きく2時期に分けられる。Ⅰ期は礎石建物跡S B003を、Ⅱ期は築地S A168を中心とする。以下に主要な遺構について述べる。

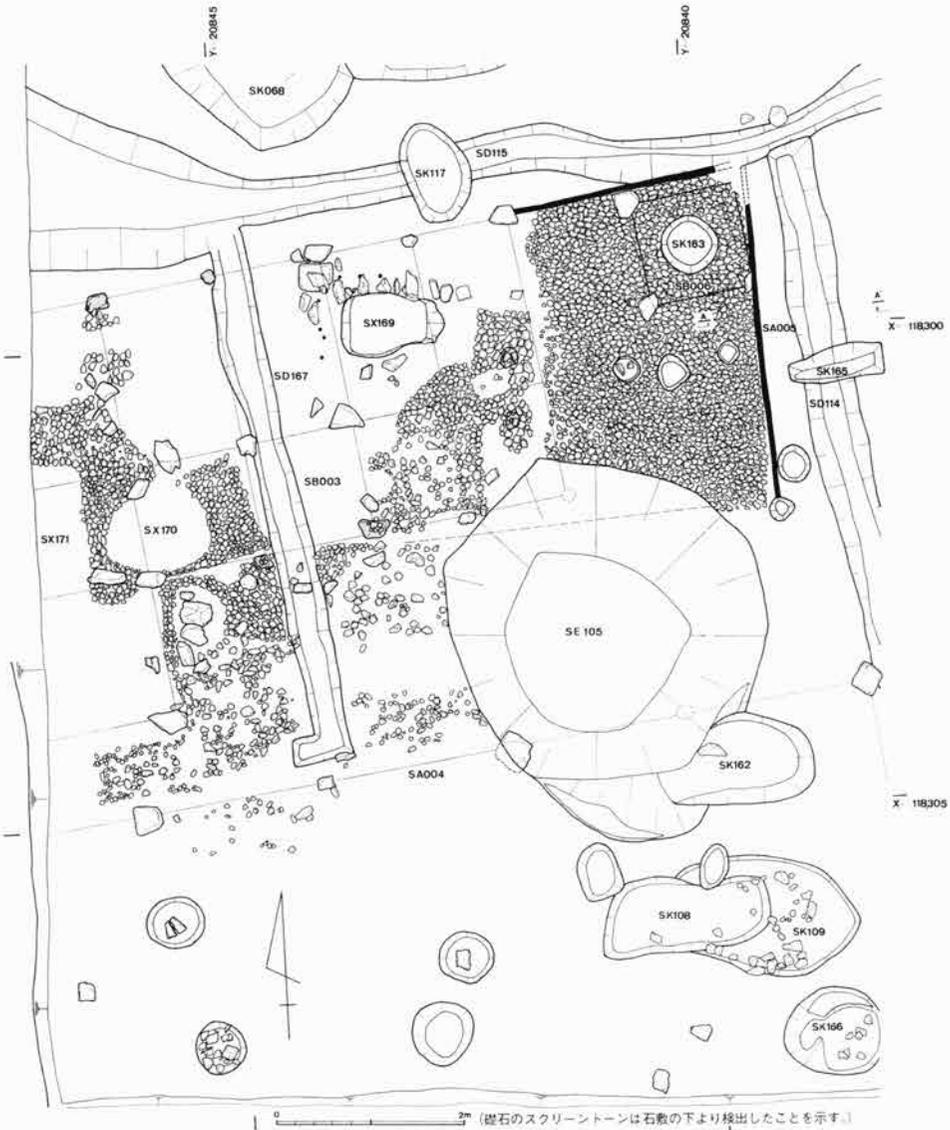
礎石建物跡S B003 柱間2.04mを測る「L」字形の礎石建物跡である。礎石は1間ごとに人頭大の平石を用いており、半間部分には拳大の石を配している。調査地西方に展開



第66図 調査地西壁断面図 (第6層が遺構検出面)

するため、全体規模は不明である。竈 S X 169、溝 S D 167 部分を除き玉石が全面に敷かれている土間をもっている。礎石は整地面に置かれており、後の整地、または建て替え等で礎石がそこなわれたり位置の逸しているものもある。建物跡の主軸は真北に向く。

この建物に伴う石敷の欠落した不明遺構 S X 170 と、不明遺構 S X 171 がある。円形と方形の平面をなし、甕または桶が置かれていたと思われる。この建物跡には、井戸 S E 105、竈 S X 169 が伴うことから、台所と思われる。



第68図 礎石建物跡 S B 003 周辺遺構平面図

礎石小建物跡 S B006 四隅に人頭大の平石を置いた一辺約1mの建物跡である。この建物跡の中央には、直径約60cm・深さ約20cmを測り、底面が平坦となる土坑 S K163がある。水溜めの小屋などが考えられる。周囲は玉石を敷いた上に黄褐色砂が均一に敷かれており、S B003とS B006の間は露地である。この小建物跡は、板塀 S A005の北側と東側の角に納まり、礎石建物跡 S B003と方向が一致することから一連の施設と考える。

土坑 S K068 溝 S D115の北側で検出した長軸4.3m・短軸1.9m・深さ61cmを測る不正楕円形土坑である。土坑の堆積は2層の炭化物層が明確で、人為的に埋められている。遺物には多量の土師器皿や宝輪文の金箔瓦(第72図57)、丸瓦等があり、ゴミ穴と思われる。

土坑 S K086 長軸3.9m・短軸2.85m・深さ82cmを測る不正円形の土坑で、土坑 S K068と土坑 S K116より新しい。出土遺物には土師器皿、瀬戸焼灰釉皿、備前焼すり鉢、漆器碗、サザエの貝殻などがある。これらの遺物の大半は炭化物層から出土した。土師器皿はほとんど時期差は認められない。この土坑も土坑 S K068同様にゴミ穴と思われる。

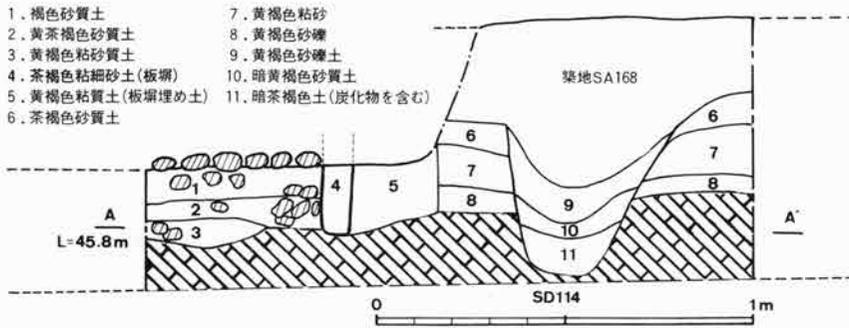
土坑 S K116 残存部の長軸2.1m・短軸1.8mを測る。土坑 S K086に切られている。土坑 S K068・S K086が検出面からの深さが60～80cmあるのに対し、この土坑は残存部の深さが25cmと浅い。出土遺物は土師器皿などがある。

溝 S D114 礎石建物跡 S B003の東を画する南北溝である。溝の総延長は11m・幅45cm、検出面からの深さは40cmを測り、断面「U」字形を呈する。溝の底面は北に向かい低くなり、溝 S D115に流れ込むようになっている。途中でわずかに東におれ、また南へ向かうが、何らかの施設に規制されたかは不明である。溝の埋土からは土師器皿と印花文の入った瀬戸焼の灰釉菊皿片(第71図14)、巴文金箔押軒丸瓦(第72図57)などが出土した。

溝 S D115 礎石建物跡 S B003の北を画する東西溝である。溝の総延長は11m、幅は40cmを測る。S D167との合流部から幅が急に広がり、調査区外へとびていく。溝の底面のレベルは東側が高く、西流する。出土遺物には土師器皿などがある。

溝 S D167 総延長距離5.65m・深さ5cmを測る。北側は溝 S D115に合流し、南端は西側に屈曲する。この溝から土師器皿が出土している。建物跡 S B003の石敷土間に伴う排水溝と思われる。

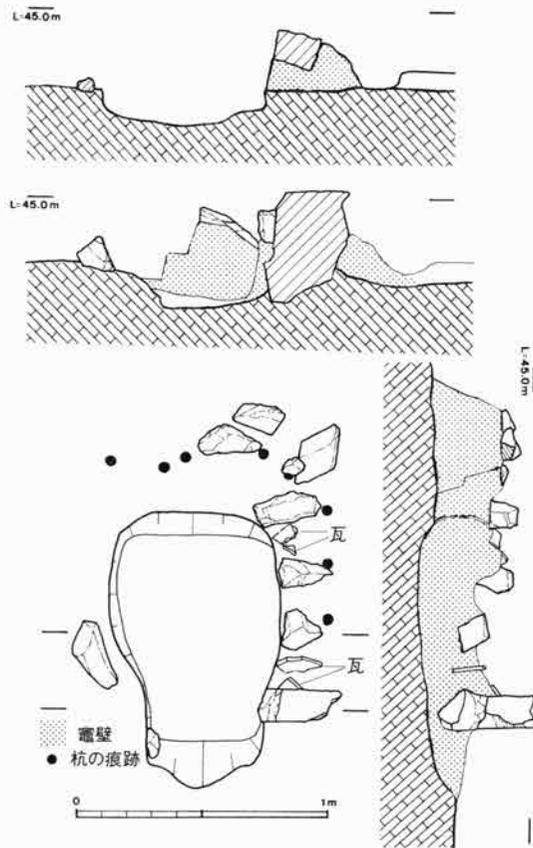
井戸 S E105 長軸4.1m・短軸3.15mの不正円形で、断面漏斗状の井戸である。調査では危険防止のため、約3.5mまで掘削して作業を中止したので、底部には達していない。遺物には土師器皿をはじめ、軒丸瓦・軒瓦・平瓦や菊花文などの飾り瓦の破片・鯨瓦、美濃・瀬戸・唐津・備前などの国産陶器や明代の染付などがある。また、サザエ・アワビなどの貝殻も出土した。この井戸から出土した遺物には、17世紀第2四半期に下るとと思われる天目茶碗もあるが、石敷を切っている井戸の掘形は礎石建物跡 S B003の廃絶後、井戸



第69図 石敷及び板塀痕跡断面実測図

枠を抜くために掘られたものと考え、この井戸は礎石建物跡S B003に伴うと考える。

板塀 S A 005(第69図) 東西160cm・南北240cmを測る礎石建物跡S B 003の北東端を示す板塀である。南北方向の板塀はかなり内側に入り込んでおり、鋭角である。板塀の幅は8cm・深さは18cmである。石敷はこの板塀の手前でとまっている。この板塀の構築には、板を据える位置の約20cm外側までの範囲を掘り下げ、板を据え、埋め戻して固定している。板塀の内側は3層に分けて埋め戻し、玉石を敷いている。板塀の北東角には、先に述べた礎石小建物跡があり、この目隠し塀も兼ねていると思われる。



第70図 竈 S X 169 実測図

竈 S X 169(第70図) 礎石建物跡S B003の中にある。掘形の長軸110cm・短軸67cm・深さ10cmを測る。今回検出したものは1基で独立する。竈の北側の壁は築地S A 168の中に取り込まれていたために、比較的良好に残っていたが、南側の壁は築地を作る際に取り壊されたと思われる。竈の構築

状況は、上部構造を安定させるために、掘り込みの周囲に杭を打ち込み、人頭大の角礫を据えながら粘土を貼りつけ壁を造っている。焚き口は東に向き、焚き口部分には10cm×30cm×40cmの割石を用いている。内壁は赤く焼け、しまっているため、実際に使用されたものであろう。井戸にS E105とともに礎石建物跡S B003が台所跡と考える根拠となる遺構の一つである。

礎石建物跡S B002 調査区南側の断ち割り部分にかかって東西4間を検出した。東端の礎石1石が残存しており、短径35cm・長径60cmを測る。柱間は197cm(6尺5寸)で主軸はほぼ磁北に向いている。他の建物跡の礎石より大きいため大型の建物の可能性がある。

築地S A168 東西の長さ29m・幅1m・高さ0.3mを測る。この築地は版築により造られている。第66図の土層断面図では北側に屈曲する状態が一部であることが確認できる。

(2) 出土遺物(第71・72図)

出土遺物には土師器皿、国産陶器、輸入陶磁器、瓦などがある。遺物の全体量から見ると瓦片が89%と多く、土師器皿9%、国産陶器1%、輸入陶磁器0.5%と土器類はかなり少ない。なお、本概報では、器種ごとの概要を記すにとどめる。

1) 土師器皿

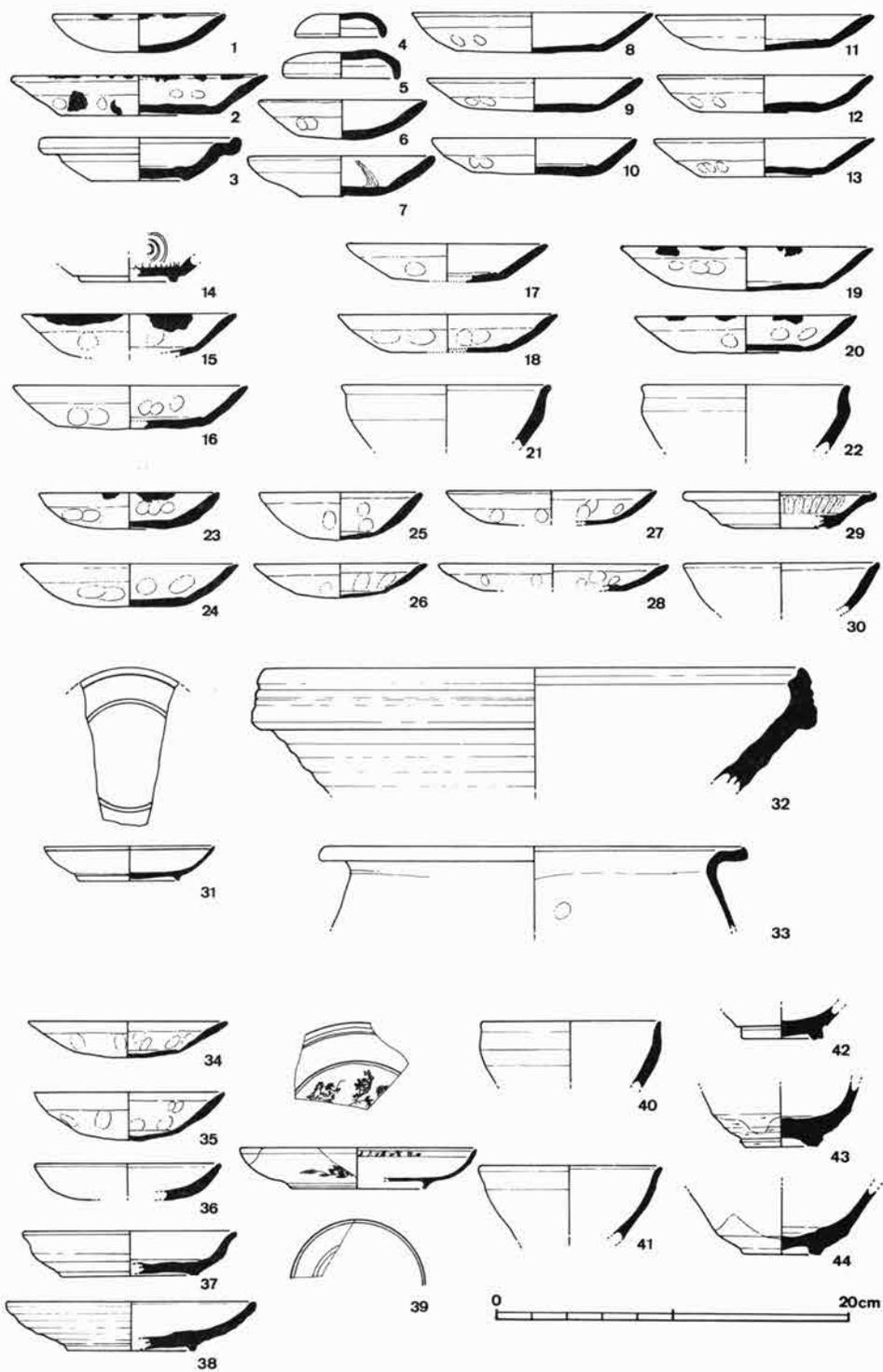
口縁部直径10.0cm前後のもの、12.5cm前後のもの、14.5cm前後のもの3種に分類できる。表面が磨耗し明瞭に内面の調整のわからないものが多いが、7のように底部を一周シナデあげているものが大半である。中には口縁部内外面に煤の付着しているもの(1・2・15・19・20・23)があり、灯明皿として利用していたものと思われる。土師器皿はいずれも16世紀末～17世紀初頭に編年されるもので、同一型式内におさまるため、これをもって遺構の前後関係を決定することはむずかしい。

2) 国産陶器

国産陶器の中には美濃灰釉折縁皿、瀬戸灰釉菊皿、備前焼すり鉢・大皿、志野無文皿、瀬戸灰釉皿、美濃天目茶碗、唐津碗などがあるが、大半が井戸S E105から出土した。

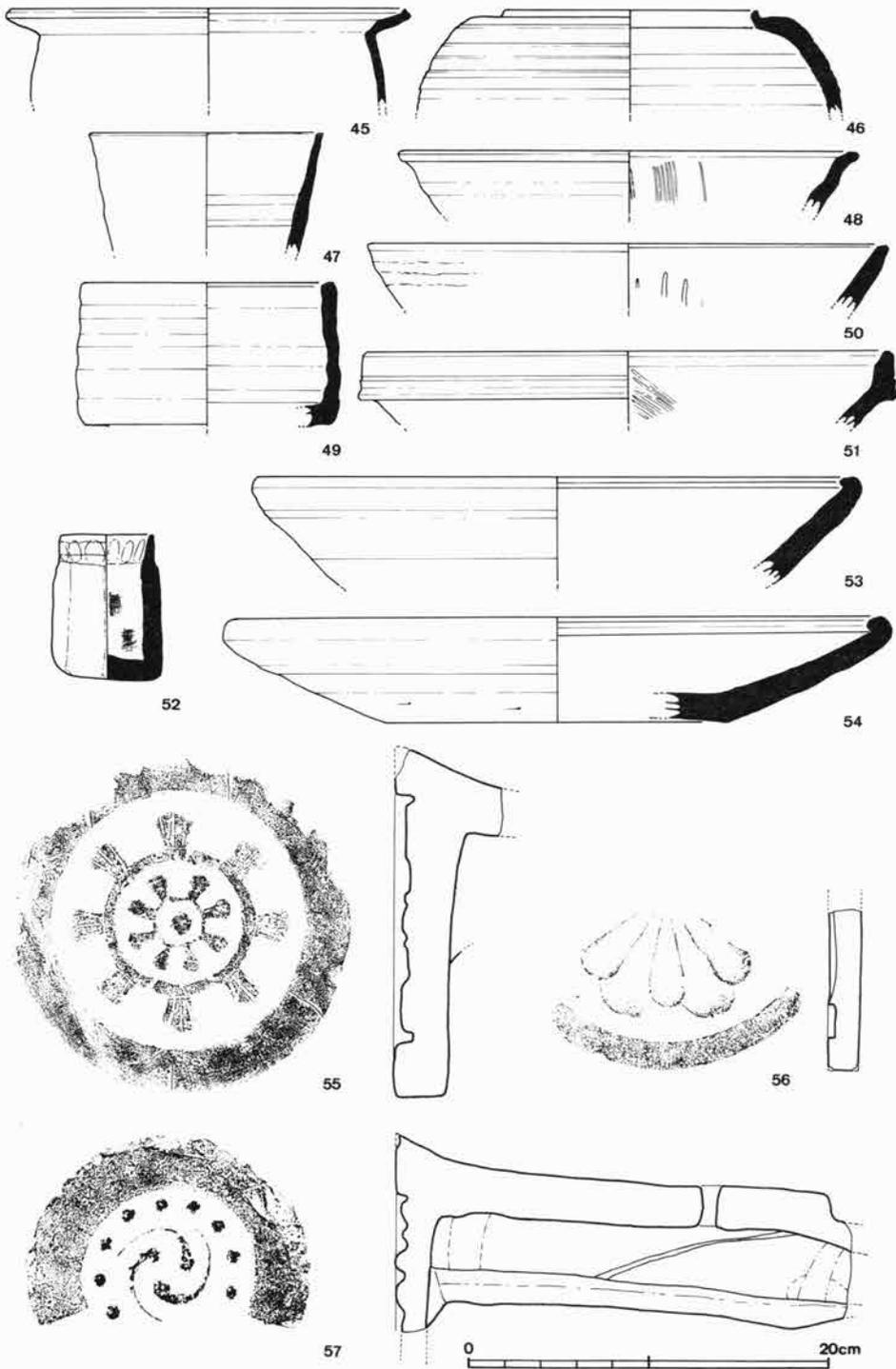
美濃灰釉折縁皿(第71図3) 復原口径は11.2cm・器高2.3cmを測る。底部より斜めに立ち上がり、口縁部で真横に外反し端部を軽く折り曲げ、玉縁とする。釉調は火災で二次焼成を受けたためか、光沢はなく淡黄褐色を呈する。焼成方法は重ね焼きしており、見込み部分は無釉となる。高台の内側は焼成時の輪トチンが高台の内部に一部溶着している。

瀬戸折縁菊皿(第71図14・29) 溝S D114、礎石建物跡S B003石敷下面から出土している。14は底径5.6cmを測る。見込み部分に印花文が認められる。29は復原口径11cm・残存高2cmを測る。体部は斜めに立ち上がる。口縁部で真横に外反し端部を折り曲げ丸くおさめる。体部内面は丸ノミによる削ぎを菊花状に施す。17世紀初頭に比定できる。



第71図 出土遺物実測図(1)

1~3・32. SX019 4~13. SK068 14~16. SD114 17・18. SD115 19~22. SX017
 23・24・33. SX103 25・26. SX169埋土 27・28・31. 石敷上面 29・30. 石敷下面
 35~44. SE105



第72図 出土遺物実測図(2)
45~54・56. S E105 55. S K068 57. S D114

志野無文皿(第71図37) 復原口径12.2cm・器高2.6cmを測る。底部から斜めに立ち上がり、口縁部をわずかに外反させ、端部は丸くおさめる。古い様相を残す皿で釉の表面は溶着している。

瀬戸灰釉皿(第71図38) 口径14cm・器高2.8cmを測る。底部からわずかに内湾させながら立ち上がる。外面は口縁までケズリを施し、内面はナデている。焼成時の溶着を防ぐために施釉後、釉を拭き取り輪ハゲにしている。

美濃天目茶碗(第71図21・22・40・42) いずれも破片は小さく、完形になるものはない。21・22・40は美濃大窯の第V期(16世紀終末)に属する。42は底径4.6cmを測る。削り出し高台は面取り整形されており、連房式登り窯のⅡ期(17世紀前半)のものと思われる。

備前焼大皿(第71図54) 口径36cm・器高5.9cmを測る。扁平な広い底部から大きく外反し、口縁端部を折り返しつまみあげる。底面及び外面をヘラケズリする。内外面に火漉が確認できる。

3) 瓦(第72図55・56・57)

掲載した以外に鯉瓦や金箔押菊花文の入った獅子口瓦片などが出土した。55は土坑SK068から出土した宝輪文金箔瓦である。瓦当面の直径は19cmを測り、瓦当面はほぼ完全な形で残るが、丸瓦部分は欠損する。外縁と文様の突出部分に金箔を押す。金箔の残存は悪いが、金箔の押し方が観察できる資料である。他の軒丸瓦に比べて肉厚が大きく、軒丸瓦ではなく使用部分の異なる可能性がある。56は井戸SE105出土の菊花文飾り瓦である。直径は約20cmとなる。花卉と外縁部分の間の凹面に釘穴をもつ。57は溝SD114出土の巴文金箔押軒丸瓦である。瓦当面の直径は15.6cmある。胴部端から14.5cmのところ釘穴がある。瓦当面の外縁・朱文・巴文に金箔を押すが、55に比して金箔の残りは悪く、接着剤とした朱漆面にわずかに確認できる程度である。朱文は9つが現存し、全部で12個と思われる。瓦当面は1/3が欠損するが、丸瓦部分はほぼ残り、内面には縄状の圧痕がある。

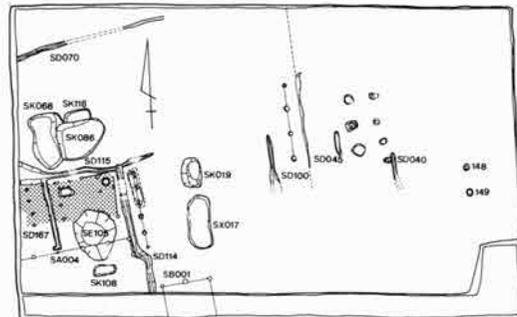
5. 小 結

今回扱った検出遺構のなかで、礎石建物跡SB003と溝SD115の一部分に広がっていた焼土をもとに、下層をⅠ期、そして焼土の上層をⅡ期の遺構とした。これに遺構の向きを、基準に主要遺構を分類すると、第73図の遺構変遷図となる。今回は井戸SE105をⅠ期として扱っているが、出土遺物に17世紀の第2四半期に比定しうる天目茶碗の破片もあるため、Ⅱ期に含まれる可能性もある。

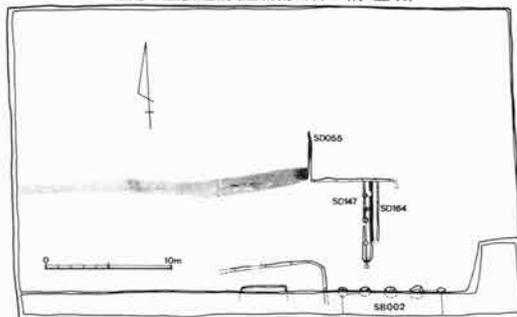
Ⅰ期の遺構には礎石建物跡SB001, SB003, 溝SD040, SD070, SD100, SD114, SD115, 土坑SK019, SK068, SK086, SK108, SK116, 井戸SE105, 不明遺構

S X017である。また、これらの遺構に伴って、溝S D100と溝S D045の間に比高約30cmで南北に続く地山開削の段差が存在する。建物跡の主軸は真北を向き、礎石建物跡S B003の柱間寸法は1間＝6尺5寸(約197cm)をもとにしている。これを念頭に置いて遺構を見てみたい。礎石建物跡S B003は、南北溝S D114と東西溝S D115、石敷土間に伴う排水溝S D167、そしてS B003の南側を画する柵S A004は一辺3間の区画となる。次に礎石建物跡S B003の東西溝S D115・南北溝S D114を起点に地割りを見る。溝S D115と溝S D070の距離は10間ある。また溝S D114と土坑S K019、不明遺構S X017の関係はそれぞれ2間半、溝S D114の東に位置する溝S D100までの距離は6間、同じく溝S D114と地山を開削した南北方向の段差の間は7間半ある。以上、I期の遺構は6尺5寸を基準に、溝と段差による地割りが存在することは明らかである。また、I期の遺構で台所部分と考える礎石建物跡S B003に伴う土坑にはS K068、S K086、S K116がある。これらは検出遺構で述べたとおり、多量の土師器皿、焼塩壺の蓋、瀬戸灰釉皿、備前すり鉢、金箔押瓦や漆器椀、サザエの貝殻など日常生活の廃棄物を建物のすぐ脇に分けることなく捨てたゴミ穴で、地割りと関係なく建物跡に近接して設けられている。

II期の遺構には礎石建物跡S B002、溝S D055、S D147、S D164、築地S A168がある。そのほか築地S A168の東に続く段差と、築地の南に位置し平面形が「L」字状を呈する段差が存在する。地割りはI期と同様に1間＝6尺5寸を採用し、真北から東に約9°振っているが、おおむね磁北を基準としている。II期は築地と複雑な雑壇状の造成に特徴がある。次に築地S A168と溝S D055をもとに地割りを見ていく。築地S A168は半間幅で溝S D055から西へ11間半延長して北側へ屈曲する状況が第66図の土層断面図で確認できる。また、築地の東に続く段差は、溝S D055から東へ3間半のびて南側へ屈曲する状況を呈する。溝S D



建物跡：SB001・SB003 井戸：SE105 不明：SX017
溝：SD040・SD045・SD070・SD100・SD114・SD115・SD167
土坑：SK019・SK068・SK086・SK108・SK116
I期 主要遺構(建物跡・井戸・溝・土坑)



建物跡：SB002 溝：SD055・SD147・SD164 築地：SA168
II期 主要遺構(築地・建物跡・溝)

第73図 主要遺構変遷図

055と溝S D147の間は2間ある。礎石建物跡S B002は築地に続く東西方向の段差から南へ5間、築地に平行する「L」字状の段差との東西の間隔は半間ある。

以上の事実関係からⅠ期・Ⅱ期の遺構をまとめてみる。Ⅰ期・Ⅱ期の実年代を比定する考古学的な資料は今回の調査では得られなかった。しかし、Ⅰ期の遺構は最高約40cmの整地層によって完全に覆われている。その上にⅡ期の遺構が存在している。また、遺構の向きはそれぞれ真北と磁北に向く相違があることなど、Ⅰ期とⅡ期の間には隔絶した変化が見られる。この伏見城のある丘陵地において大規模な地業をなし得たのは、豊臣氏と徳川氏である。これを遺構の検出状況にあてはめて考えてみると、Ⅰ期を豊臣期、Ⅱ期を徳川期の遺構ととらえることができよう。Ⅰ期の遺構が比較的良好に遺存している理由は、慶長3(1598)年の秀吉の死、そして同5(1600)年の関ヶ原の合戦で家康が勝利を治め、政権が豊臣氏から徳川氏に移行した。そのため、徳川氏は豊臣氏の遺構をすべて整地により埋め戻し、新たな地割りを実践したためと思われる。この改変がⅡ期の状態である。しかし、元和元(1615)年から翌年にかけての大坂冬の陣・夏の陣で豊臣氏が滅亡すると、伏見城で政務を執る必要が薄れた。そこで同9(1623)年、家光が3代将軍となると伏見城廃城の厳命が出された。この厳命は「一木一草たりとも破壊せよ」という内容で上部構造をもつ建物はすべて壊したと思われ、あとにはⅡ期のような築地と籬壇状の段差が残ったと考えられる。

今回の調査では屋敷建物跡の一部が確認されたにすぎず、それらの資料から多くを語ることはできない。伏見城跡の調査は、小規模な調査が多いために遺構の実態はつかめていない。過去の京都市埋蔵文化財研究所の伏見城関連調査では、16世紀後半から17世紀初頭の遺構を桃山・江戸時代と一括して扱っており、伏見城の地割りがこの時期でどのように行われていたのかはこれまではまったく不明であった。^(注5)こうした状況下で一部なりとも性格の判明する建物跡、地割りの変化を確認したことを考えれば大きな成果である。今後資料の蓄積を待って本資料の再検討をしたい。

(柴 曉彦)

注1 補助員及び協力者(敬称略)

田中あゆみ・塚本映子・長田康平・前田暁宏・山本紀子・西川悦子・和田正子
現地においては、(財)京都市埋蔵文化財研究所の吉村正親氏よりご教示を頂いた。

注2 竹岡 林『日本城郭大系』11 京都・滋賀・福井 新人物往来社 1981

注3 櫻井成廣『豊臣秀吉の居城』伏見城・聚楽第編 城郭資料館出版会 1971

注4 中野種一郎『京都府伏見町誌』京都府郷土誌叢刊 第2冊 伏見町役場 1929

注5 原山充志・小森俊寛『京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988

圖 版



(1) 調査地遠景（北東から）



(2) 調査地全景（南東から）



(1) C-1号窯全景(東から)



(2) C-1号窯遺物出土状況



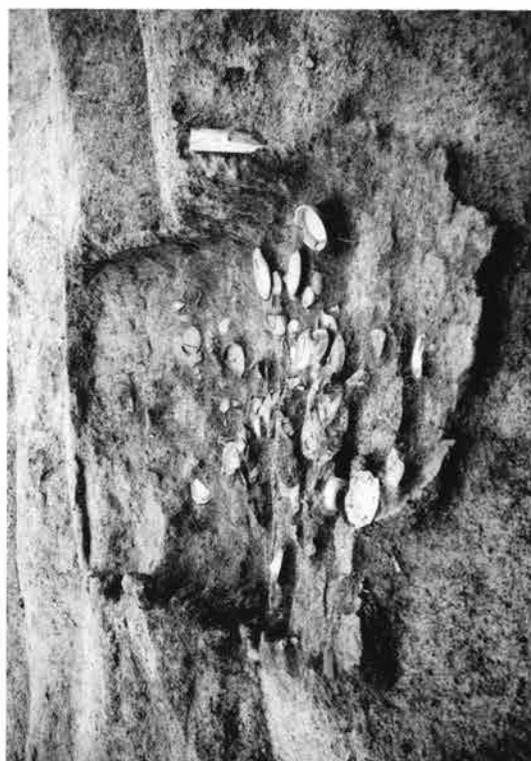
(1) C-2号窯崖面露出状況(東から)



(2) C-2号窯全景①(東から)



(1) C-2号窯全景② (東から)



(2) C-2号窯下方窯体 (東から)



(3) C-2号窯下方窯体遺物出土状況



(1) C-2・3号窯体と下方窯体（北東から）



(2) C-3号窯全景（東から）



(1) C-3号窯舟底状土坑



(2) 舟底状土坑と最終床面



(1) C-4号窯検出状況



(2) C-4号窯全景 (東から)



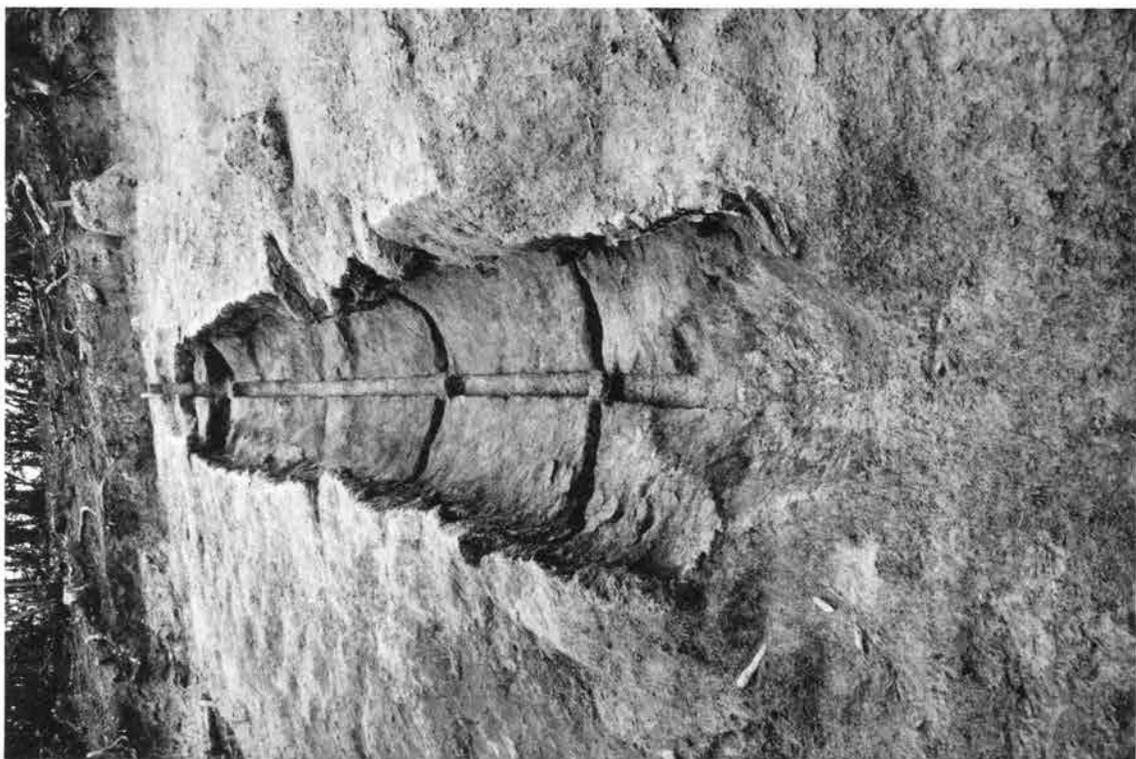
(1) C-5号窯全景 (東から)



(2) SK01全景 (南から)



(1) C-6号窯全景(東から)



(2) C-6号完掘状況



(1) C-6号窯窯体内土層断面



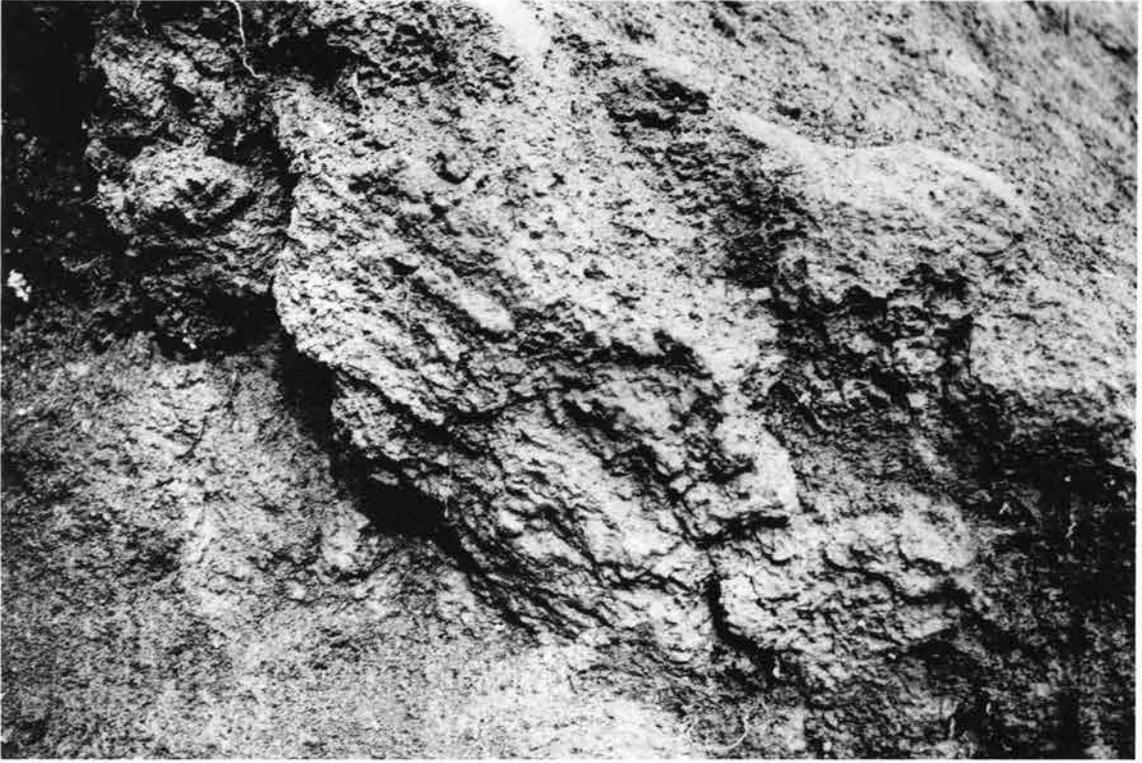
(2) C-6号窯遺物出土状況



(1) C-6号窯舟底状土坑と最終床面



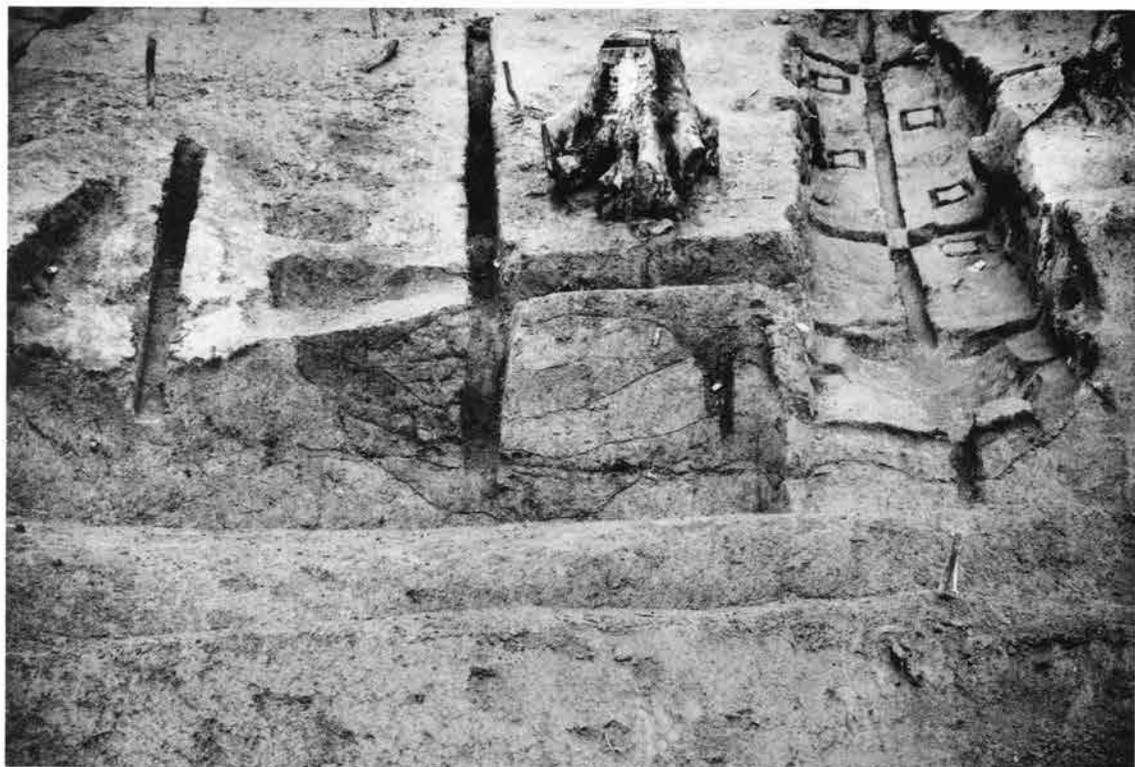
(2) C-6号窯舟底状土坑完掘状況



(1) C-6号窯燃焼部壁面補修痕跡



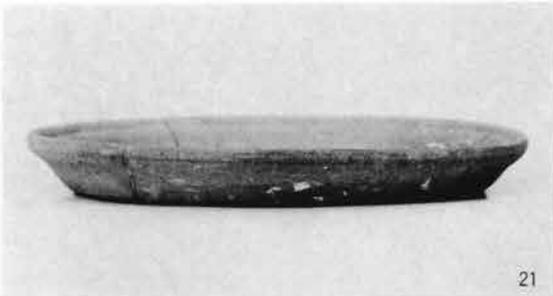
(2) C-6号窯煙道部の状況



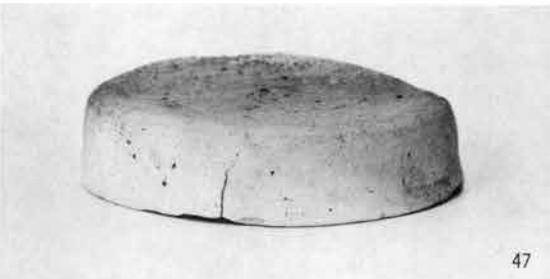
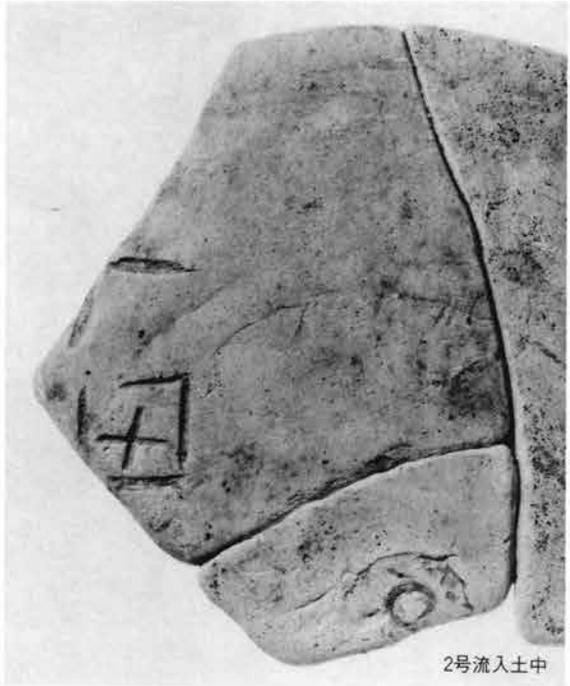
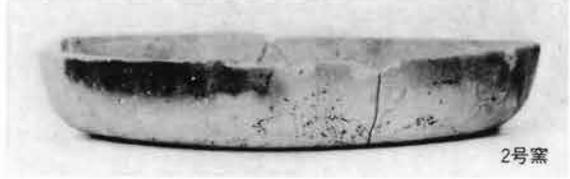
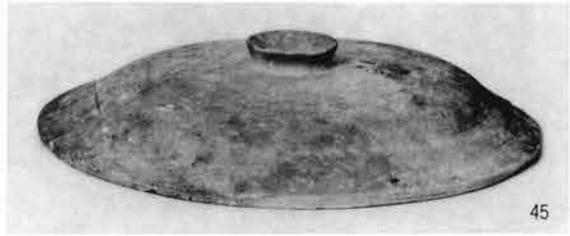
(1) C-3・4号間土層堆積状況(東から)

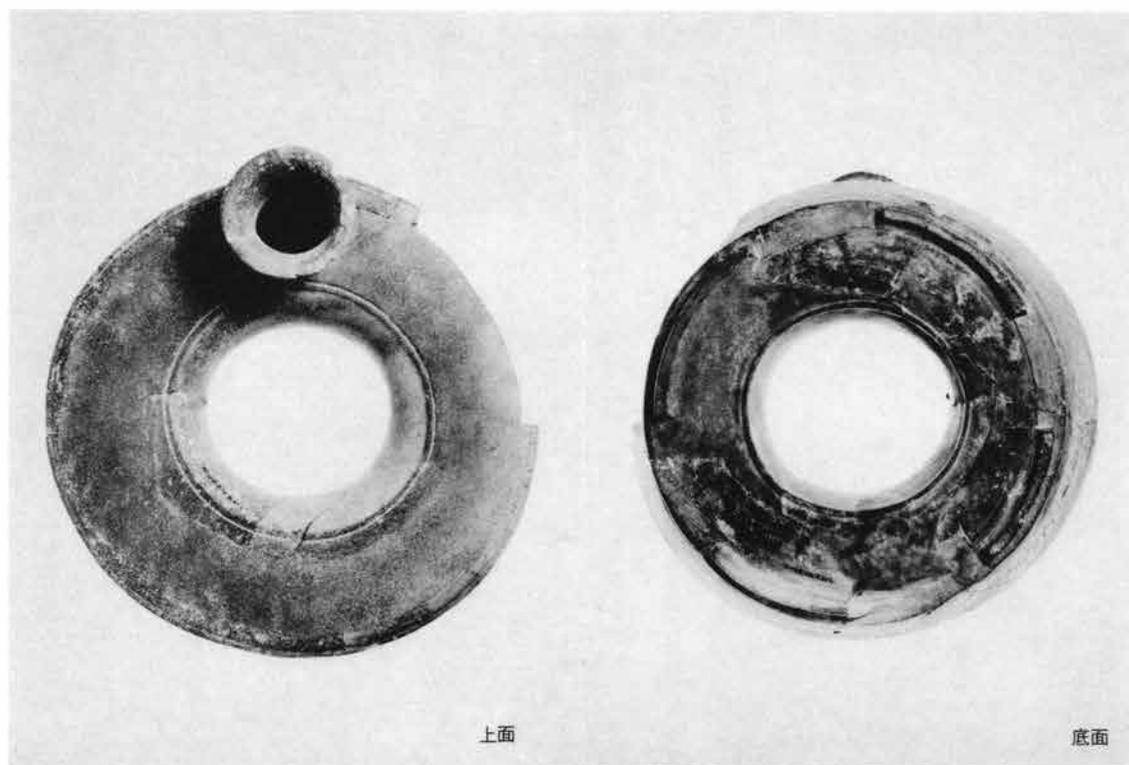


(2) 尾根上部試掘トレンチ(北から)

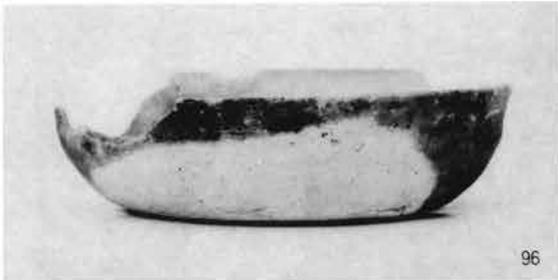
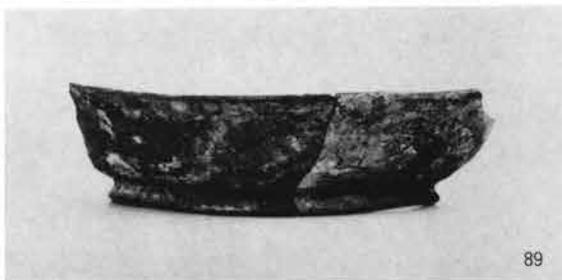
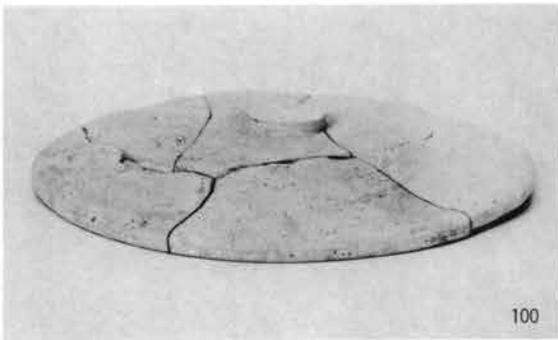
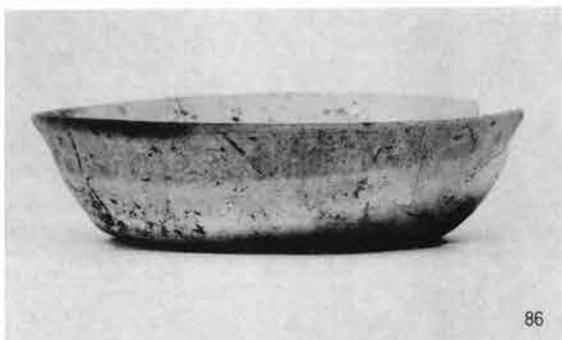
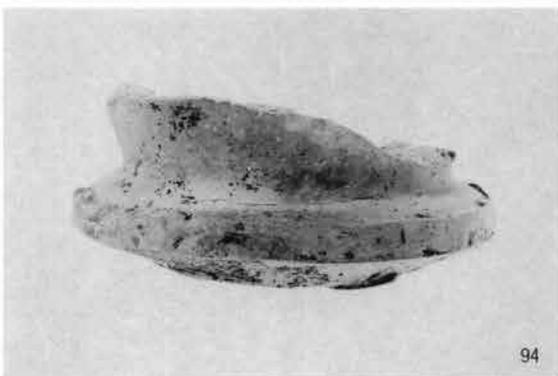
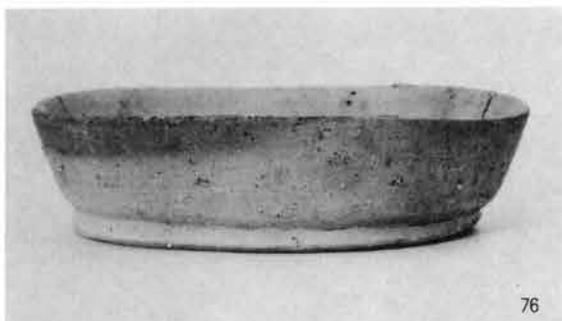
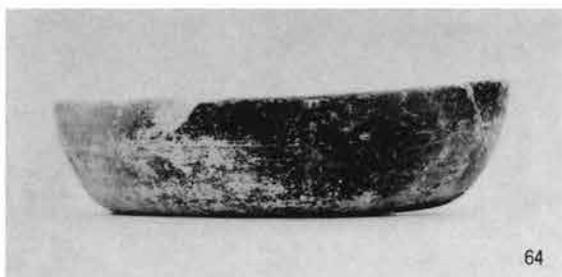


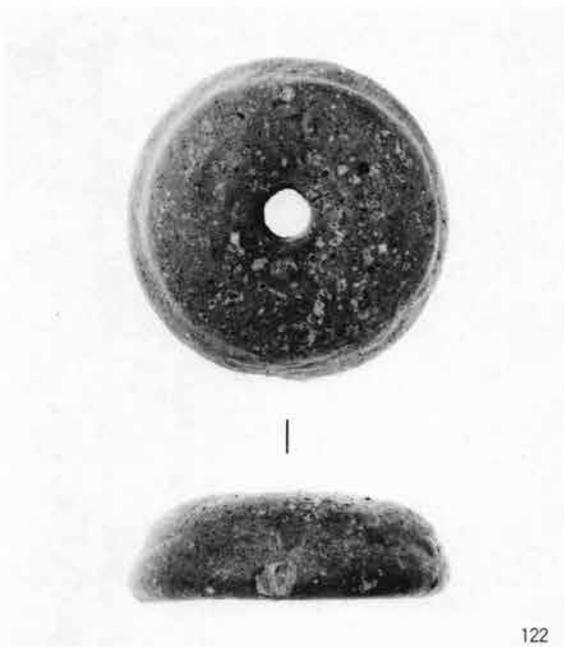
出土須恵器(1) 番号は実測図番号に一致





出土須恵器(3)







(1) 下後古墳群調査前遠景（東から）



(2) 下後古墳群調査後遠景（南東から）



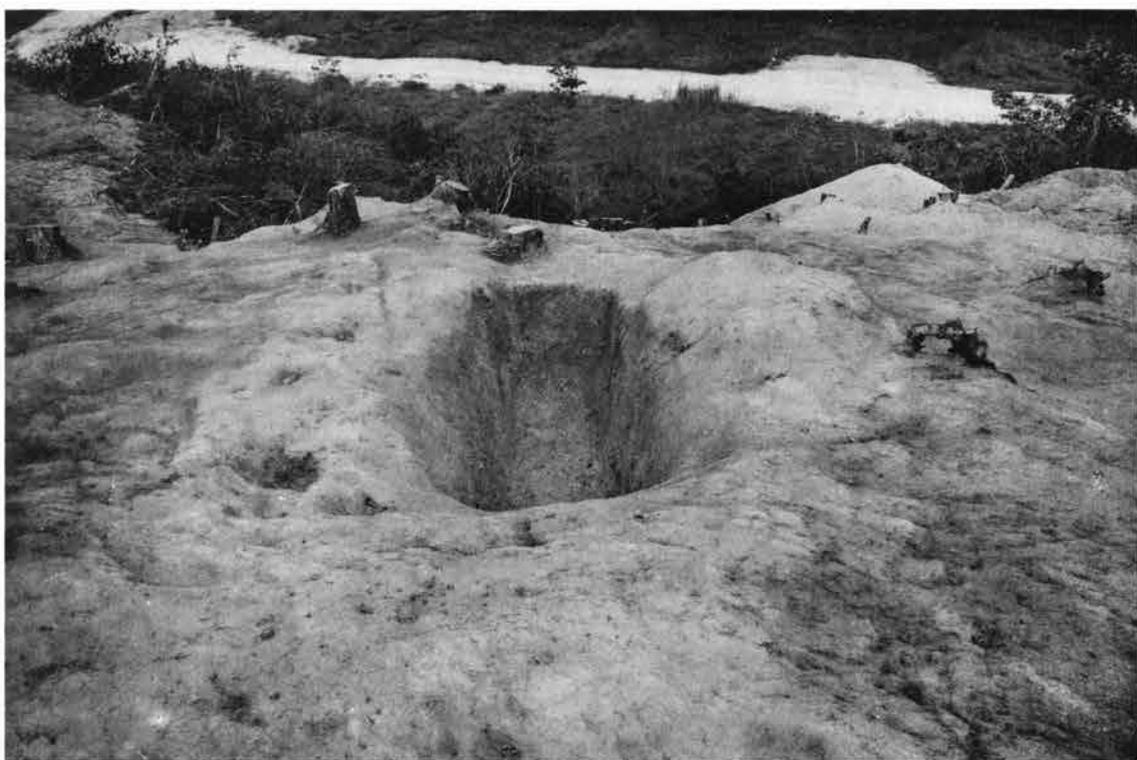
(1) 下後2・5号墳調査前全景(南西から)



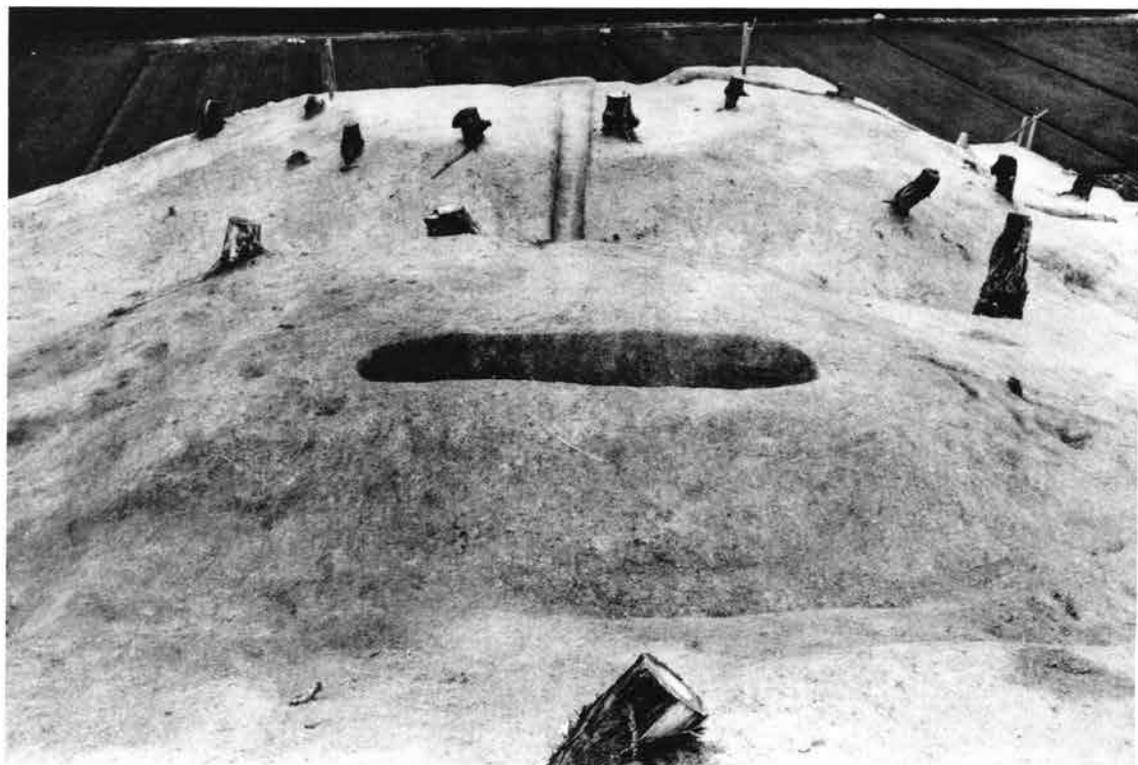
(2) 下後2号墳調査後全景(南西から)



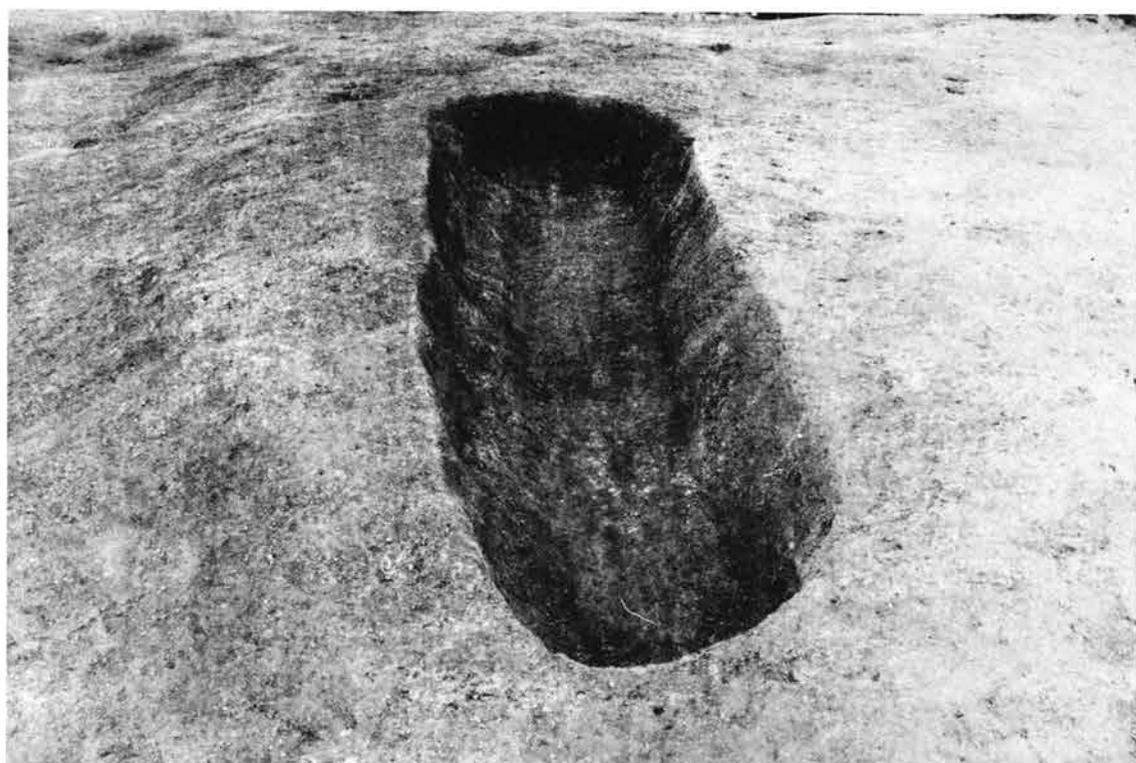
(1) 下後3号墳調査前全景（北東から）



(2) 下後3号墳主体部（西から）



(1) 下後5号墳調査後全景（南西から）



(2) 下後5号墳主体部（東から）



(1) 調査地全景 (北から)



(2) 古墓全景 (俯瞰)



(3) 古墓土坑2 (北西から)



(4) 石積み1 断ち割り状況 (東から)



(1) 古墓石組み検出状況 (南から)



(2) 古墓盛土2 除去後の状況 (北から)



(3) 石積み4断ち割り状況



(4) 試掘地全景(南から)



(1) 石積み2(北西から)



(2) 石積み3(北から)



(1) 山形古墓群全景



(2) S X01・02



(1) S X03全景



(2) S X03内小石室



(3) SX11集石



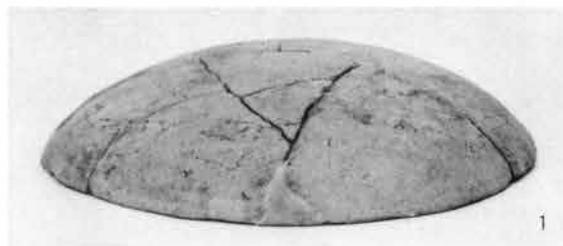
(4) SX03埋葬土坑



(1) SX04下層集石



(2) SX10集石





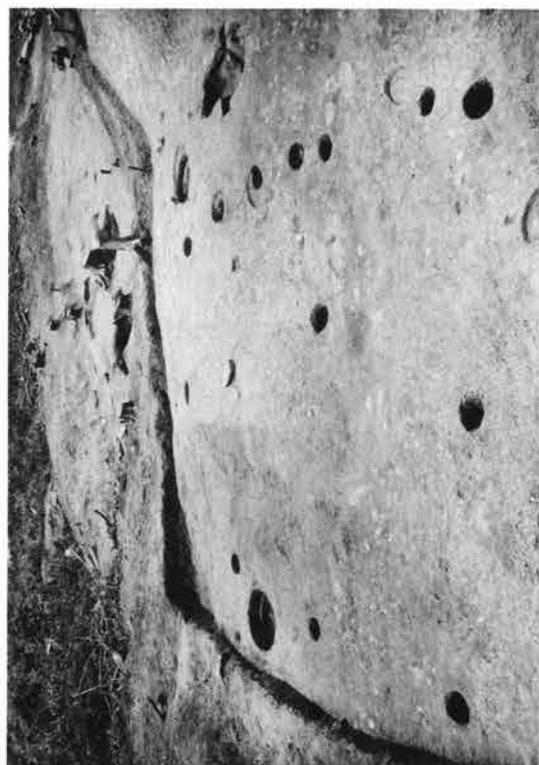
(1) 調査地遠景（北西から）



(2) S X12~15集石（南から）



(3) S K01 (茶毘跡：北から)



(4) S B01 (北から)



(1) S X12遺物出土状況



(2) S X12集石下土坑



(1) 調査地遠景（東から）



(2) 調査地全景（北から）



(1) A地区 S B02 (北東から)



(2) A地区 S B03 (北西から)



(1) A地区S B09 (北から)



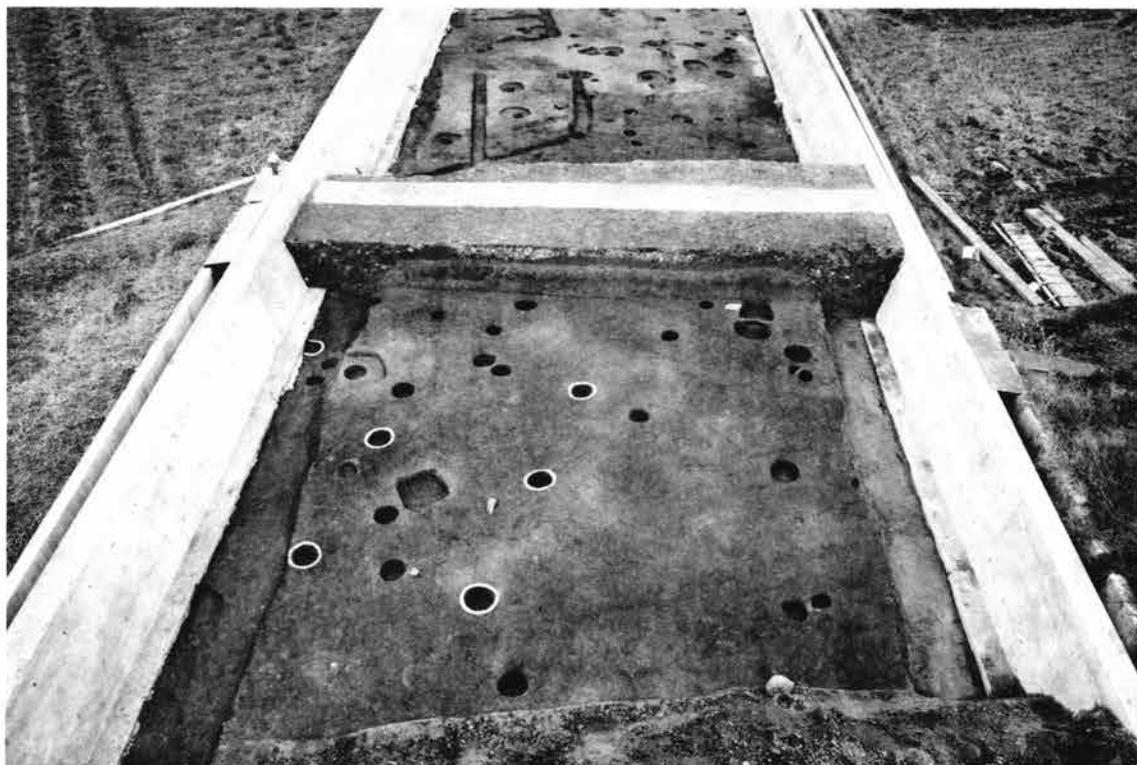
(2) A地区旧流路底 (西から)



(1) B地区S B01 (北から)



(2) B地区S B04・05 (東から)



(1) B地区S B06 (西から)



(2) B地区S B07・08 (西から)



(1) B地区S B11・12 (西北から)



(2) B地区S B10 (西北から)



(1) C-1地区全景(東から)



(2) C-1地区SX06(南から)



(1) C-2地区全景(北から)



(2) C-2地区SD08・09(東から)



(1) C-3地区SE02 (南から)



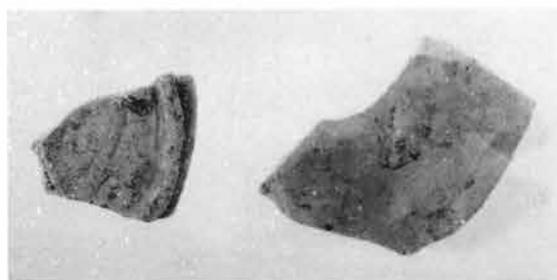
(2) C-3地区SX05上部集石 (北から)

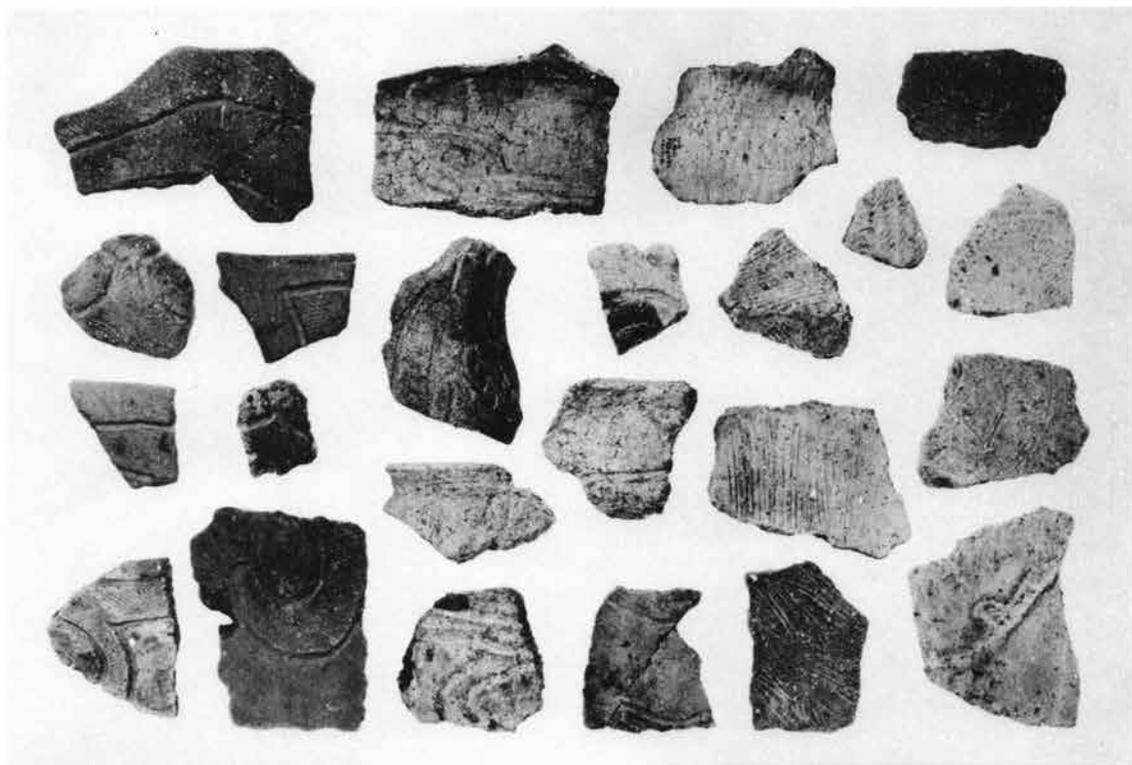


(1) D地区SH01・02 (北から)



(2) D地区SH01カマド跡 (南から)

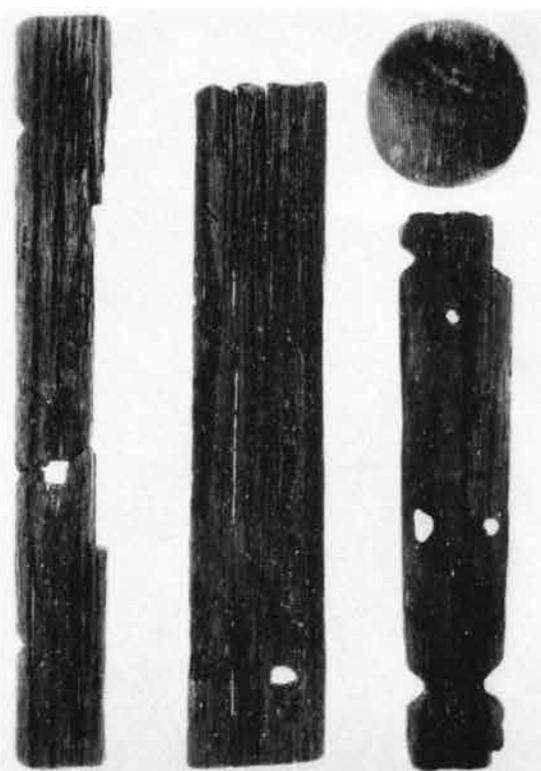




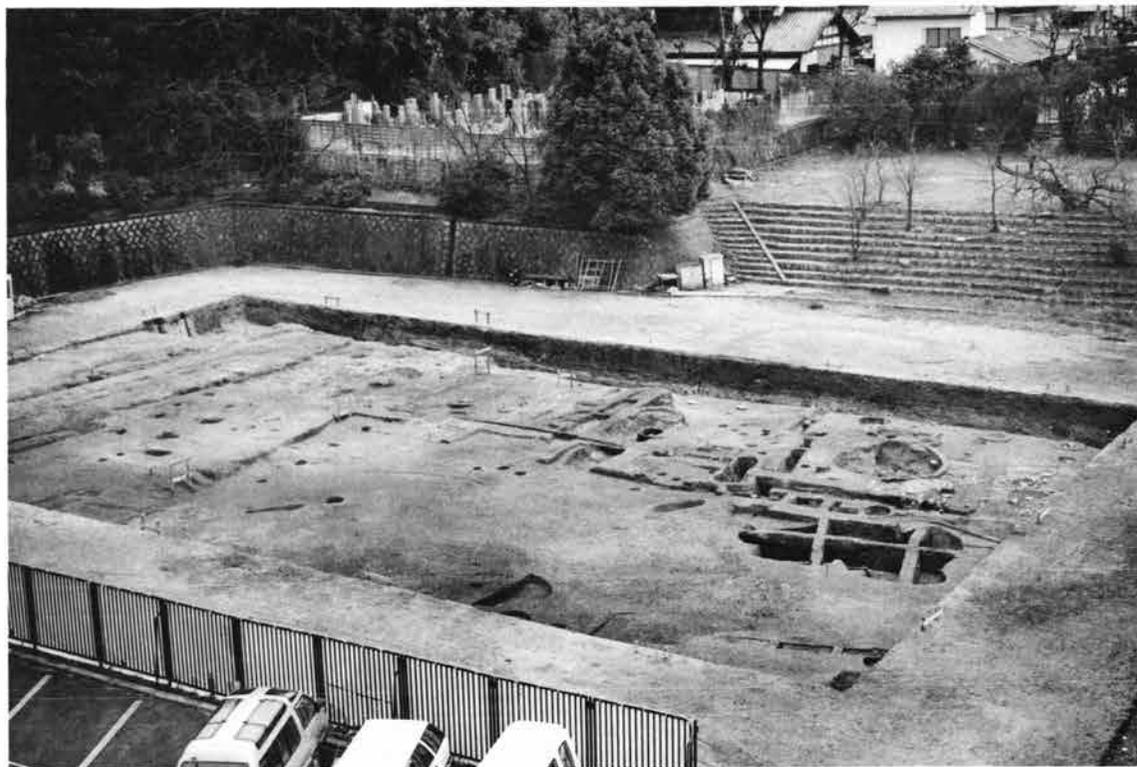
(1) 縄文土器



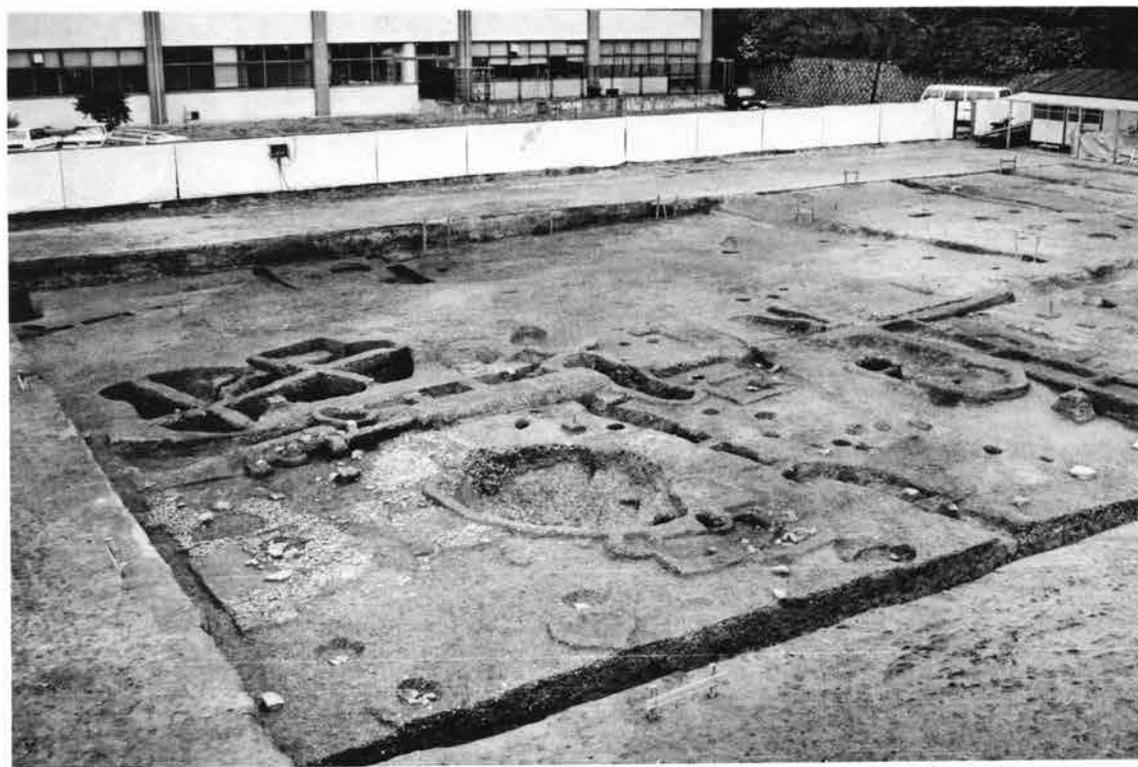
(2) 石製品・鉄製品



(3) 木製品



(1) 調査地全景（北西から）



(2) 調査地全景（南西から）



(1) 礎石建物跡 S B003周辺 (南西から)



(2) 礎石建物跡 S B006 (西から) 中央は土坑 S K163



(1) 溝 S D 115 断面 (東から)



(2) 礎石・礎石建物跡 S B 006 (西から)



(3) 礎石・礎石及び築地 S A 168 断面 (西から)



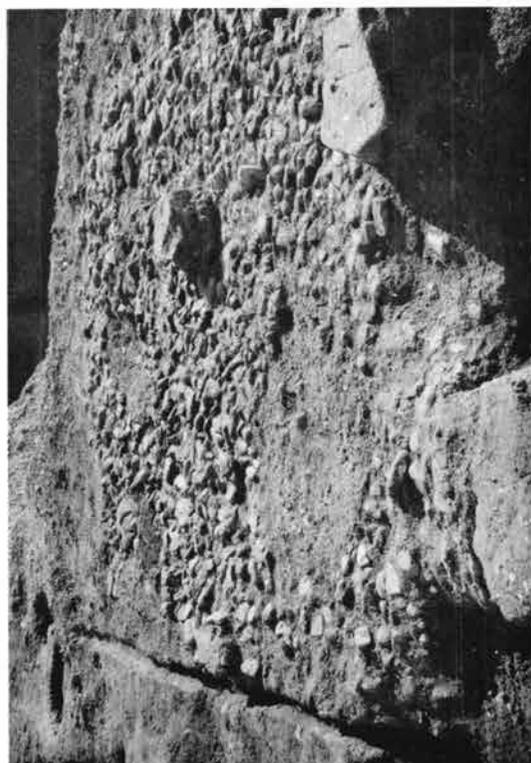
(4) 礎石・礎石及び築地 S A 168 断面 (西から)



(3) 土坑 S K 068・086・116完掘状況 (西から)



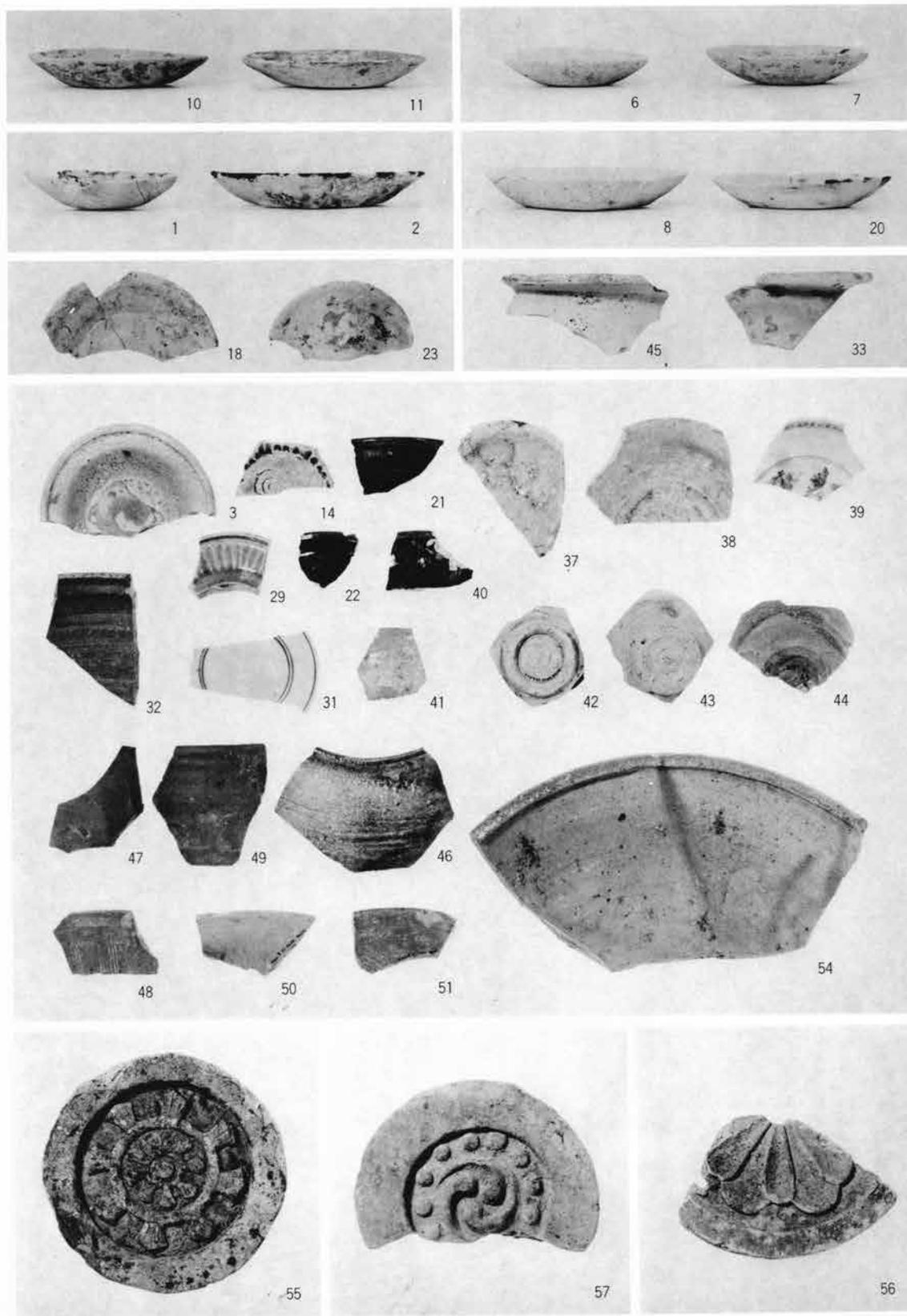
(4) 板塀 S A 005断面 (南から)



(1) 板塀 S A 005・礎石及び石敷 (北から)



(2) カマド S X 169完掘状況 (東から)



京都府遺跡調査概報 第44冊

平成3年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎(075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎(075)441-3155 (代)